出雲市駅付近連続立体交差事業地内

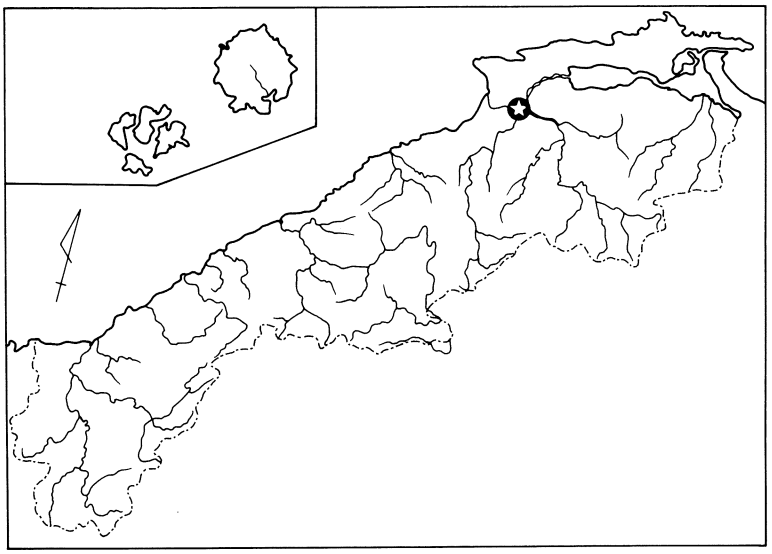
天神遺跡第9次発掘調査報告書

1999年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

出雲市駅付近連続立体交差事業地内

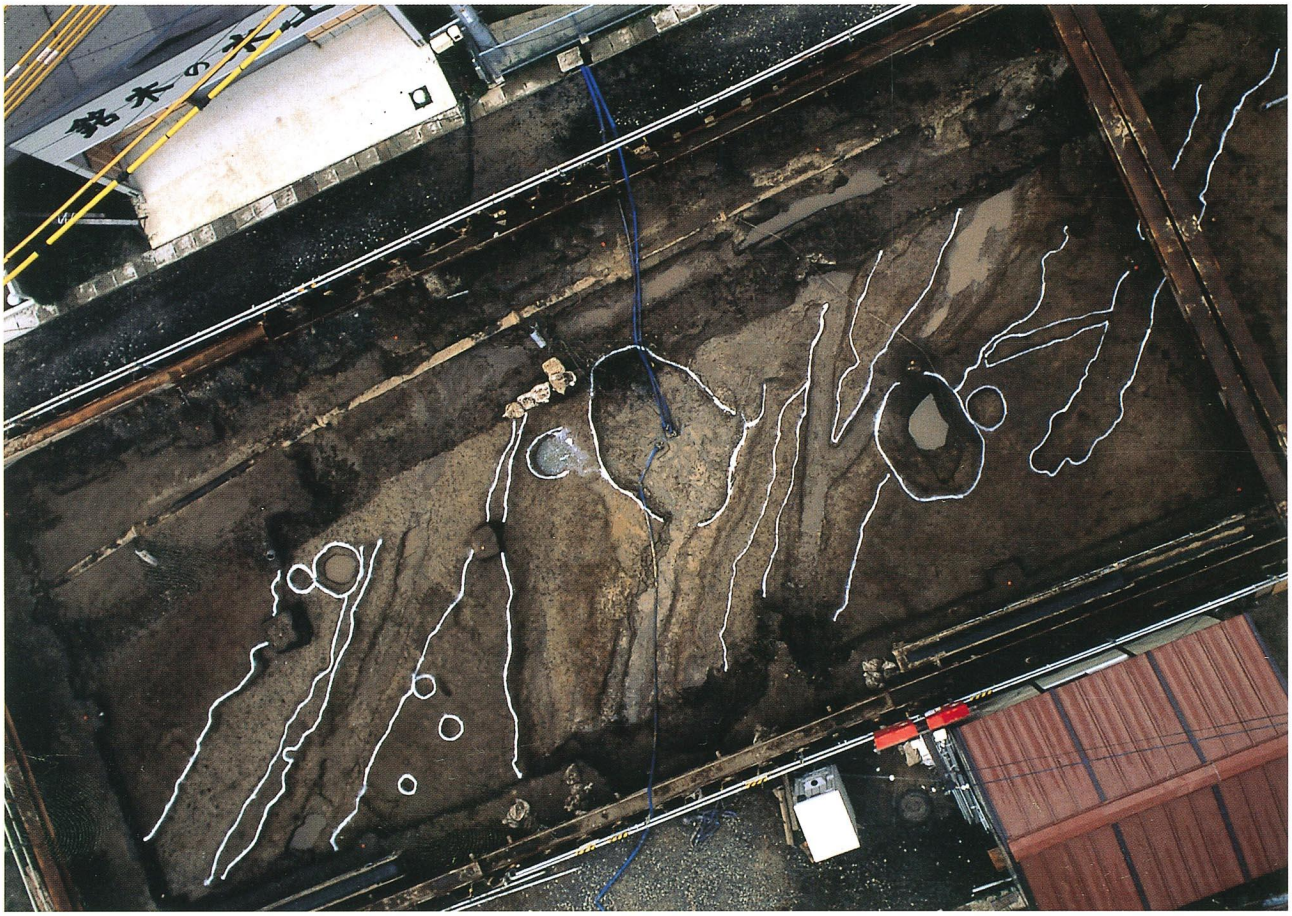
天神遺跡第9次発掘調査報告書



天神遺跡の位置

1999年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会



天神遺跡　遺構検出状況空中写真

SD03　検出状況

SK04　検出状況

SD03・SD04 検出状況

SK03・SK06・SD09・SD12 検出状況

序

出雲市教育委員会では、平成９年度に出雲土木建築事務所から委託を受け、出雲市駅付近連続立体交差事業地内に所在する天神遺跡の発掘調査を実施しました。

同事業地内では、平成６年度にも隣接地において発掘調査を実施しており、弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての環濠と考えられる大溝や、弥生時代の木製農耕具など数多くの遺構、遺物を検出しました。

今回の発掘調査でも、弥生時代中期を中心とする溝状遺構や、平安時代後半の井戸などを検出し、この地域におけるひとびとのくらしを知る貴重な資料を得ることができました。中でも最も大規模な溝状遺構は、平成６年度に調査した環濠と考えられる溝と同一のものである可能性が高く、環濠の規模やその当時の人々の生活域を考えるうえでも貴重な資料となりました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

なお、今回の調査にあたりご協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係各位に、哀心より御礼申し上げます。

平成１１年３月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　　言

1．本書は、出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市教育委員会が平成９年度に実施した天神遺跡第９次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。
平成９年（１９９７）４月２４日～同年７月１０日

3．発掘調査を行った地番は、次のとおりである。
出雲市塩冶有原町４丁目１番地ほか

4．調査は、次の組織で行った。
平成９年度
〔調査指導者〕西尾　克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、　岩橋　孝典（同　主事）
〔事　務　局〕後藤　政司（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上　　稔（同　係長）
〔調　査　員〕岸　　道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）、糸賀　伸文（同　臨時職員）
平成１０年度
〔調査指導者〕西尾　克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、守岡　正司（同　主事）
〔事　務　局〕後藤　政司（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上　　稔（同　課長補佐）
〔調　査　員〕岸　　道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）

5．本書で使用した遺構略号は次の通りである。
ＳＤ――溝状遺構、ＳＫ――土坑状遺構、ＳＸ――落込み状遺構、Ｐ――ピット

6．本書で使用した方位は真北を示す。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8．本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、糸賀のほか、高橋　智也（文化振興課主事）、片倉　愛美（同　主事）、今岡ひとみ、鬼村奈津子、春木　崇志、矢田　知美（同　臨時職員）が行った。

9．本書の執筆、編集は、上記調査員の協力を得て岸が行った。

10．石器の石材鑑定については、山本　順三（㈶田部美術館学芸員）が行った。

11．調査にあたっては、出雲土木建築事務所、ＪＲ出雲工事事務所から多大な協力を得た。

12．発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。

田中　義昭（島根大学法文学部教授）、池田　満雄（出雲市文化財審議会委員）、赤澤　秀則（鹿島町教育委員会係長）、角田　徳幸（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、岩橋　孝典（同　主事）、間野　大丞（同　主事）

13．発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

高根　正春　　稲村　玉枝　　高根　常代　　藤原　一男　　佐野　静子　　吉田　栄
藤原　　博　　陶山　　潤　　吾郷　　槙　　周藤　俊也　　鎌田　　悟　　板倉セツ子
角森雄志郎　　坂根　　誠　　藤原　　勉　　米山　清司　　奥田　広信

14．遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

遠藤　恭子　　飯國　陽子　　川谷　真弓　　荒木恵理子　　吹野　初子　　石川　桂子
岡野　和栄　　岡　こずえ

目　　次

カラー図版
序
例言
本文目次
挿図目次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．８次に亘る発掘調査と遺跡の範囲 …… 5
Ⅳ．調査の概要
　１．発掘調査の概要 …… 9
　２．遺構と遺物 …… 15
Ⅴ．総 括 …… 85
出土遺物観察表 …… 89
図 版 …… 図版１～図版30

挿 図 目 次

Ⅰ．調査に至る経緯

第１図 試掘トレンチ位置図 …… 1
第２図 試掘トレンチ堆積土層図 …… 1
第３図 発掘調査区位置図 …… 2

Ⅱ．位置と環境

第４図 天神遺跡周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ．８次に亘る発掘調査と遺跡の範囲

第５図 天神遺跡発掘調査例位置図 …… 7

Ⅳ．調査の概要

第６図 遺構配置図（1～4Gr) …… 11～12
第７図 遺構配置図（5～8Gr) …… 13～14
第８図 ＳＤ０１実測図 …… 15
第９図 ＳＫ０１実測図 …… 16
第10図 ＳＫ０２実測図 …… 16
第11図 Ｐ４実測図 …… 17
第12図 ＳＫ０３実測図 …… 17
第13図 ＳＫ０３出土遺物実測図 …… 18
第14図 ＳＫ０４実測図 …… 19
第15図 ＳＫ０４遺物出土状況実測図 … 20
第16図 ＳＫ０４出土遺物実測図(1) …… 21
第17図 ＳＫ０４出土遺物実測図(2) …… 22
第18図 ＳＫ０５実測図 …… 22
第19図 ＳＫ０５出土遺物実測図 …… 23
第20図 ＳＫ０６実測図 …… 24
第21図 ＳＫ０６遺物出土状況実測図 … 25
第22図 ＳＫ０６出土遺物実測図(1) …… 26
第23図 ＳＫ０６出土遺物実測図(2) …… 28
第24図 ＳＫ０６出土遺物実測図(3) …… 29
第25図 ＳＸ０５出土遺物実測図 …… 31
第26図 ＳＸ０５実測図 …… 31
第27図 ＳＤ０３実測図 …… 33
第28図 ＳＤ０３遺物出土状況実測図（南側） …… 34
第29図 ＳＤ０３遺物出土状況実測図（北側） …… 35
第30図 土器群１（ＳＤ０３）実測図 … 36
第31図 土器群１（ＳＤ０３）出土遺物実測図 …… 36
第32図 ＳＤ０３出土遺物実測図(1) …… 38
第33図 ＳＤ０３出土遺物実測図(2) …… 39
第34図 ＳＤ０３出土遺物実測図(3) …… 41
第35図 ＳＤ０４実測図 …… 43
第36図 ＳＤ０４遺物出土状況実測図（南側） …… 44
第37図 ＳＤ０４遺物出土状況実測図（北側） …… 45
第38図 ＳＤ０４出土遺物実測図(1) …… 47
第39図 ＳＤ０４出土遺物実測図(2) …… 49
第40図 ＳＤ０４出土遺物実測図(3) …… 50
第41図 ＳＤ０４出土遺物実測図(4) …… 51
第42図 ＳＤ０８実測図 …… 52
第43図 ＳＤ０８遺物出土状況実測図（南側） …… 53
第44図 ＳＤ０８遺物出土状況実測図（北側） …… 54
第45図 ＳＤ０８出土遺物実測図 …… 55
第46図 ＳＤ０９実測図 …… 57
第47図 ＳＤ０９遺物出土状況実測図 … 58
第48図 ＳＤ０９出土遺物実測図(1) …… 60
第49図 ＳＤ０９出土遺物実測図(2) …… 62
第50図 ＳＤ０９出土遺物実測図(3) …… 64
第51図 ＳＤ０９出土遺物実測図(4) …… 66
第52図 ＳＤ０９出土遺物実測図(5) …… 68
第53図 ＳＤ０９出土遺物実測図(6) …… 69
第54図 ＳＤ１２実測図 …… 71

第55図 ＳＤ１２出土遺物実測図 …… 72
第56図 遺構外出土遺物実測図(1) …… 75
第57図 遺構外出土遺物実測図(2) …… 76
第58図 遺構外出土遺物実測図(3) …… 79
第59図 遺構外出土遺物実測図(4) …… 80
第60図 遺構外出土遺物実測図(5) …… 81

Ⅴ.総 括

第61図 第７次調査 大溝１実測図 …… 86

Ⅰ．　調査に至る経緯

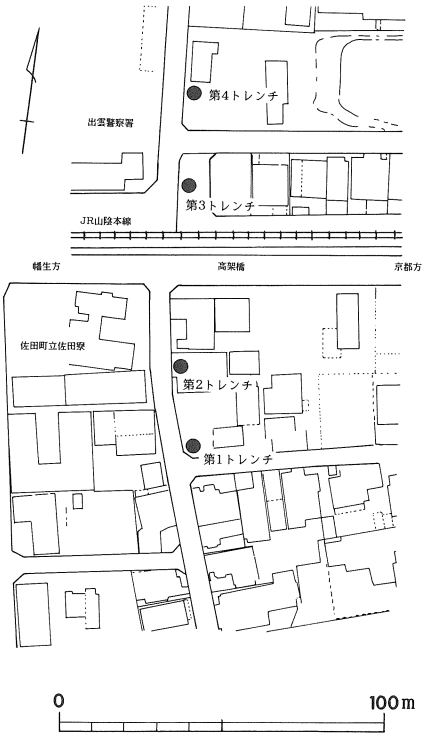
平成８年(1996)３月29日、出雲土木建築事務所より出雲市駅付近連続立体交差事業地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は周知の遺跡である天神遺跡の範囲内であるとともに、平成６年(1994)には北側の隣接地（現在は鉄道高架橋となっている）を発掘調査[(1)]し、多くの遺構や遺物を検出しているが、遺構検出レベルや遺物包含層を確認するため、試掘調査を実施することにした。

試掘調査は、同年４月24日に４ヶ所のトレンチを設定して行った（第１図)。その結果、高架橋の北側に設定した第３・第４トレンチでは、平成６年に発掘調査を実施した地山上面の包含層が削平された状態で、遺構・遺物とも確認できなかった。一方、南側に設定した第１・第２トレンチからは遺構及び遺物が検出された（第２図)。遺物には弥生土器・土師器が多く、須恵器・陶器もわずかに出土している。また、遺物を包含している層位は、標高約６.１～７.０ｍと厚く、試掘溝全体が遺構にかかっていると考えられた。

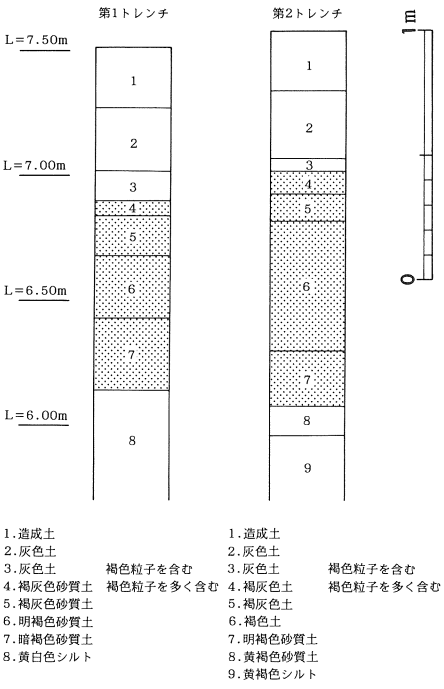
試掘調査の結果から、事業者である出雲土木建築事務所と出雲市教育委員会、島根県教育委員会の三者で協議を重ね、高架橋の南側、幅約10ｍ、長さ約45ｍの約450㎡を発掘調査することで合意した（第３図)。そして、調査期間は平成９年(1997)４月から同年７月までとすることを確認した。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者である出雲土木建築事務所から平成９年（1997)３月10日付で埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の３）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第98条の２）を同年３月17日付で文化庁長官宛提出している。

発掘調査は、平成９年(1997)４月から準備を進め、同年４月24日から開始した。なお、調査地は現状が既設舗装道路であったため、試掘調査によって確認されていた遺物包含層の上層である造盛土までを重機によって取り除き、その下面から調査を開始している。そして、夏の猛暑と台風、遺構内からの湧水などに悩まされながらも平成９年(1997)７



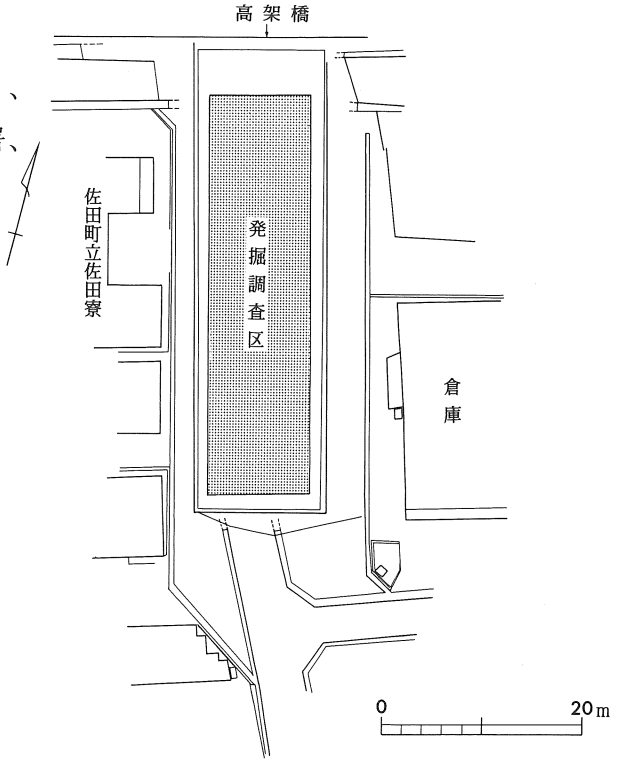
第1図　試掘トレンチ位置図



第2図　試掘トレンチ堆積土層図

月10日に調査を終了した。その間、同年6月29日には75名の参加者を得て現地説明会を行っている。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届(遺失物法第13条)、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第3図　発掘調査区位置図

註

(1)「天神遺跡第7次発掘調査報告書」
出雲市教育委員会　(1997)

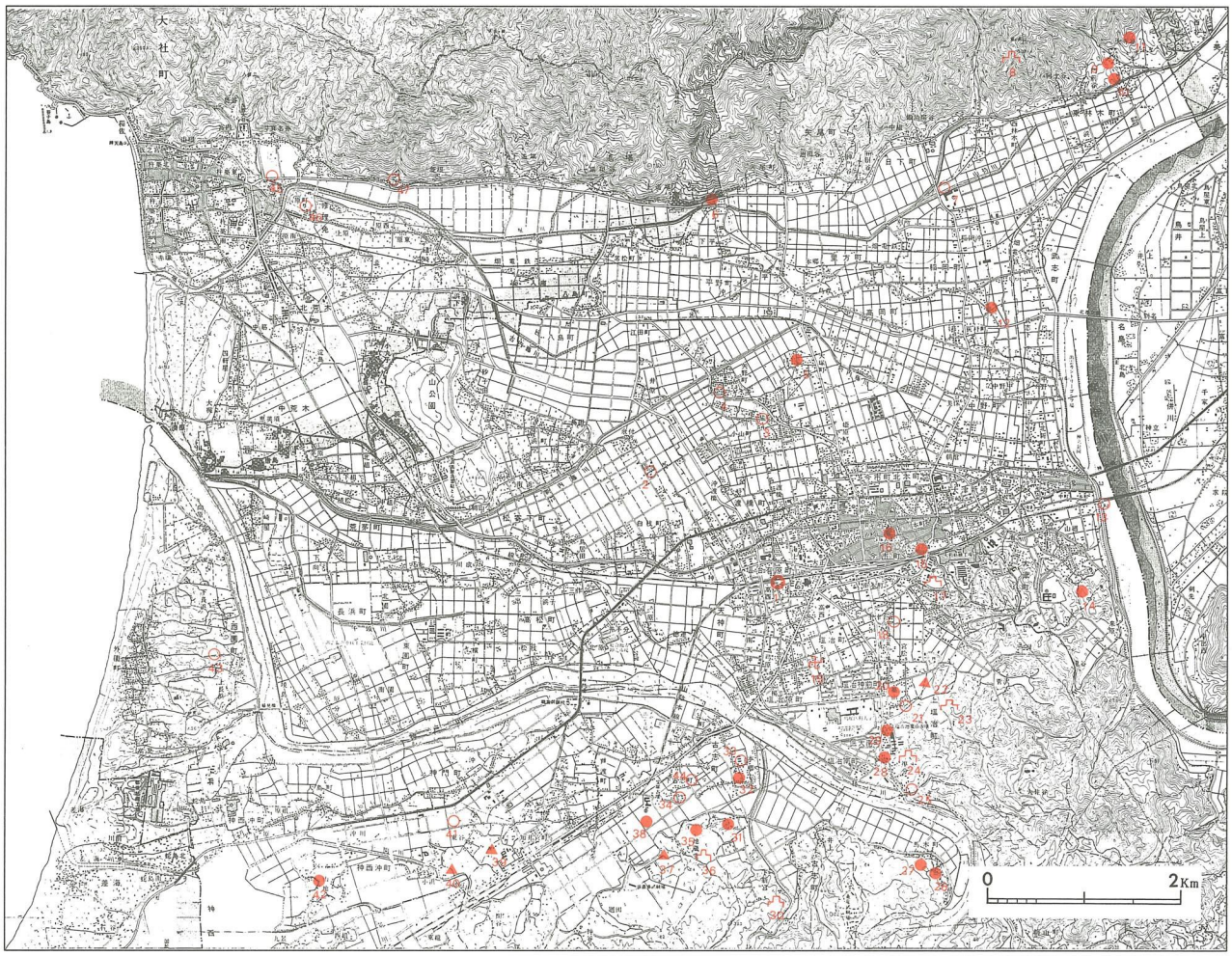
Ⅱ．位置と環境

(1) 遺跡の位置

天神遺跡は、出雲市天神町及び塩冶有原町を中心とする広範囲な地域に所在している。現在では山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、ＪＲ出雲市駅から西方１㎞ほど離れた地域に広がっており、そのほとんどが宅地として利用されている。

出雲平野をとりまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流



第4図　天神遺跡周辺の遺跡

1.天神遺跡　2.白枝荒神遺跡　3.小山遺跡　4.矢野遺跡　5.大塚古墳　6.石臼古墳　7.山持川川岸遺跡　8.鳶ヶ巣城跡　9.平林寺山古墳　10.膳棚山古墳群　11.大寺古墳　12.荻杼古墓　13.斐伊川鉄橋遺跡　14.西谷墳墓群　15.今市大念寺古墳　16.塚山古墳　17.平家丸城跡　18.角田遺跡　19.神門寺境内廃寺　20.上塩冶築山古墳　21.築山遺跡　22.上塩冶横穴墓群　23.大井谷城跡　24.半分城跡　25.三田谷遺跡　26.小坂古墳　27.刈山古墳群　28.半分古墳　29.地蔵山古墳　30.栗栖城跡　31.放れ山古墳　32.大梶古墳　33.古志本郷遺跡　34.田畑遺跡　35.妙蓮寺山古墳　36.浄土寺山城跡　37.地蔵堂横穴墓群　38.宝塚古墳　39.福知寺横穴墓群　40.小浜山横穴墓群　41.知井宮多聞院遺跡　42.山地古墳　43.上長浜貝塚　44.正蓮寺周辺遺跡　45.出雲大社境内遺跡　46.原山遺跡　47.菱根遺跡

して入海のような状況を呈していた「神門水海」と呼ばれる潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。

また、古代国・郡・里制においては神門郡高岸郷に比定されており、『出雲国風土記』には、天神遺跡周辺の様子について、次のように記載されている。「或るは土地豊に沃えて土穀・桑・稔り款枝に、百姓の膏腴の薗なり。或るは土地豊に沃えて、草水叢り生ひたり。」というように、農業に適した豊かな肥沃地であったようである。

このような地形のもと、天神遺跡は入海の河口部に近い神戸川北岸の旧自然堤防上に立地していたと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。

(2) 歴史的環境

出雲平野には、数多くの遺跡が存在している。中でも天神遺跡の所在する塩冶地区は、出雲市内でも最も埋蔵文化財の密集する地域となっている。神戸川右岸に形成され、南北に長く伸びる旧自然堤防上には、神門寺付近遺跡・塩冶小学校付近遺跡・弓原遺跡・高西遺跡など、それぞれを区分するのが難しいほど連結して遺跡が密集している。

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前期末から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡からも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡（湖陵町）などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵上に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60ｍもあるような3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有す大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓・菅沢古墓のほか、近年の発掘調査によって、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、いち早く儒教あるいは仏教文化が取り入れられていたことが窺える。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、矢野遺跡では14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

Ⅲ．８次に亘る発掘調査と遺跡の範囲

１．８次に亘る発掘調査

天神遺跡では、これまでに種々の開発に伴い、８次、20ヶ所の発掘調査が行われている（第５図）。

(1)　第１次発掘調査――海上地区土地区画整理事業に伴う発掘調査――（1971年）[1]

道路新設部分６ヶ所について行われた発掘調査である。第１調査地区では、柱穴を伴う竪穴遺構のほか、弥生時代中期後半の壺棺墓が検出されている。器高58㎝を測る壺棺が、長さ約１.５m、深さ約50㎝の墓坑に横にして埋納されていた。第２調査地区では、弥生時代中期後半頃の溝状遺構が検出されており、短頸壺や鋸歯文のある石製紡錘車などが出土している。第３調査地区では、弥生時代中期後半頃の溝状遺構や古墳時代の土坑のほか、ピットなどを検出している。第４調査地区では、古墳時代後期以降と推定される溝状遺構が検出され、土師器高坏やまりなどが出土している。また、天神遺跡発見の端緒となった第５調査地区では、古墳時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴を10以上検出し、須恵器や土師器の壺などが出土している。第６調査地区では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡３棟や溝状、柵状遺構などが検出されている。中でも奈良時代の掘立柱建物跡の柱穴は、径約70㎝、深さ約40㎝を測る大形のものであり、付近で墨書土器が出土していることから、地方官衙跡（郡家、郷倉、駅家など）の可能性が指摘されている。

(2)　第２次発掘調査――島根医大教職員宿舎建設に伴う発掘調査――（1975年）[2]

官舎部分３ヶ所について発掘調査が行われている。第１調査区では、弥生時代中期中葉の土坑墓と推定される遺構を14基検出しているほか、弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけての溝状遺構などを検出している。溝状遺構の中には「コ」の字状を呈するものがあり、方形周溝墓としての可能性が指摘されている。また、第２調査区では、古墳時代後期から近世にかけての掘立柱建物跡６棟と溝状遺構４条などを検出している。特に古墳時代後期頃にあたる掘立柱建物跡の柱穴は、径１m～１.２mと大形で、２間×４間の総柱となるものも含まれており、1971年の調査を裏付けるように、郡衛など官衙跡的遺構である可能性を示唆している。また、これまで弥生時代中期の土器編年を前・後半に２区分していたのに対し、この調査で出土した土器などが指標となって弥生時代中期を前葉・中葉・後葉に３区分できる貴重な資料となっている。

(3)　第３次発掘調査――出雲考古学研究会による自主発掘調査――（1978年）[3]

天神遺跡周辺を開発の波から守るため、その性格を捉えることを目的とした発掘調査であり、天神天満宮南側の３ヶ所で行われている。Ｂ－１区では古墳時代中期と考えられる土器溜を検出し、土師器高坏、埦には赤色塗彩され暗文が施されたものが多く、周囲から土製の勾玉や丸玉などが出土していることから、祭祀性の強い遺構と考えられている。また、平安時代頃と考えられる掘立柱建物跡の柱穴は、径80㎝～１mに及ぶ大形のもので、同区から緑釉陶器が出土していることや1971年の調査時に隣接した畑地内から墨書土器が出土していることから考えて、官衙的建物群の一部と解されてい

る。Ａ－２区、Ａ－４区の調査では溝状遺構、ピットなどを検出しているが、時期、性格ともに不明とされている。なお、付近で出土した墨書土器は、この調査時に「旱天」と判読できることがわかっている。

(4) 第４次発掘調査――建設省職員宿舎建設に伴う発掘調査――（1981年）[4]

職員宿舎の建物部分、約200㎡について発掘調査を行っている。遺構は、奈良時代のものと推定される掘立柱建物跡２棟や平安時代と推定される土坑、中世から近世にかけての溝状遺構などが検出されている。特に、中世の溝状遺構の中には、それぞれが方形に囲繞するものがあって、２棟以上の建物跡を溝によって区画していたものと推定されている。なお、出土遺物には須恵器、土師器、古銭などがあるが、弥生土器は認められていない。

(5) 第５次発掘調査――建設省新庁舎建設に伴う発掘調査――（1985年～1986年）[5]

庁舎部分、約300㎡について発掘調査が行われている。遺構は、弥生時代中期から中世にかけての溝状遺構や土坑状遺構が複雑な切合関係をもって検出されている。特に、弥生時代中期中葉の土坑墓と考えられる遺構には、管玉などの副葬品を有するものもあり、この地域における社会的階級の成立を考えるうえで貴重な資料となっている。また、調査範囲が限られているため全容は不明であるが、平面形が方形を呈し、床面に側溝が認められる古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられるような遺構が検出されており、この調査区周辺に古墳時代後期の集落跡があることも想定されている。

(6) 第６次発掘調査――塩冶地区遺跡分布調査による遺跡範囲確認調査――（1986年）[6]

５ヶ所のトレンチを設けて行った遺跡範囲確認調査である。第１トレンチでは、中世の溝状遺構やピットなどを検出している。第２トレンチでは、溝状遺構、土坑、ピットなどを検出しているが、弥生時代中期の溝状遺構の中には、多量の土器が認められ、断面が「Ｖ」字状を呈して集落を囲繞する環濠の可能性が指摘されているものもある。そのほか、弥生時代中期の遺構としては、土坑も検出されている。遺構の多くは古墳時代後期から中世にかけてのものであるが、少量ながら弥生土器片も確認されている。また、第４トレンチでも、溝状遺構、ピット、落ち込み状遺構など多数の遺構を検出している。時期は奈良時代から近世にかけてのものと考えられている。

(7) 第７次発掘調査――出雲市駅付近連続立体交差事業（高架橋部分）に伴う発掘調査―（1994年）[7]

高架橋予定地の幅約６ｍ、全長約270ｍの区間で発掘調査を行っている。Ａ区では、弥生時代中期中葉から近世に至るまでの溝状遺構、土坑、ピットなどを多数検出している。中でも、弥生時代中期中葉頃の遺構である大溝１・２は、幅が約６ｍもある大規模なもので、集落を囲繞する環濠の可能性が指摘されている。Ｂ区でも弥生時代中期中葉から近世に至るまでの溝状遺構、土坑、ピットなど多数の遺構を検出している。溝状遺構には、大規模なものが４条検出されており、それぞれ環濠の可能性が指摘されているとともに、時期的に重なるものがあることから、多重環濠として機能していた可能性がある。特に、弥生時代終末期頃に埋まったと考えられるＳＤ０６からは、遺物が多量に出土し、

第5図　天神遺跡発掘調査例位置図

1.建設省宿舎新築に伴う調査(1994)　2.出雲市駅付近連続立体交差事業に伴う調査(1994)　3.出雲市駅付近連続立体交差事業に伴う調査(1997)　4.建設省新庁舎建築に伴う調査(1985～1986)　5.島根医大教職員宿舎建設に伴う調査（1975,第1調査区）　6.(1975,第3調査区)　7.海上地区土地区画整理事業に伴う調査(1971,第1調査地区)　8.(1971,第2調査地区)　9.(1971,第4調査地区)　10.(1971,第3調査地区)　11.建設省職員宿舎建設に伴う調査(1981)　12.(1971,第6調査地区)　13.(1971,第5調査地区)　14.(1975,第2調査区)　15～18・20.塩冶地区遺跡分布調査(1986)　19.出雲考古学研究会による調査（1978）

搬入品も多く認められることから、当該期の集落を考えるうえで貴重な資料となっている。C区は旧自然流路の低湿地で、弥生時代中期後葉頃の農耕具や食器などの木製品が多量に出土している。木製品の中には、未成品のものも含まれており、付近で杭や溝状遺構が検出されていることから、溝やウッドサークルで保管していた可能性が指摘されている。D区では、近世のものと考えられる石敷状遺構や道状遺構などを検出し、付近では墨書木札が出土していることから、この付近に集荷センター的な施設があったことが想定されている。

(8) **第8次発掘調査**——建設省宿舎新築に伴う発掘調査——（1994年）[(8)]

宿舎建物部分と駐車場部分約 1,000 ㎡について発掘調査が行われている。遺構としては、溝状遺構、土坑、ピットなどを検出している。時期は古墳時代後期から近世に至るまでのものであるが、古墳時代後期の遺構は土坑墓1基のみである。なお、溝状遺構の中には、これまでの発掘調査によって指摘されていたように、建物を囲繞する可能性があるものも検出されている。なお、弥生土器は認められていない。

2．天神遺跡の範囲

天神遺跡は、天神町及び塩冶有原町を中心とする地域に所在し、その範囲は東西約 450 m、南北約 600 mの広範囲に及んでいる。これまでの発掘調査によって遺構や遺物が数多く検出され、弥生時代中期中葉頃から近世に至るまでの長期間、連綿と集落が営まれていることが明らかになっている。しかし、遺構や遺物の出土状況から考えると、弥生時代から古墳時代にかけての居住域は遺跡の北東部に集中している傾向にあり、奈良時代以降については西部や南部で多く検出されている。

天神遺跡の所在する地域は市内でもいち早く宅地化が進み、発掘調査についても部分的で面的な調査が少ないが、大局的にみると前述のように居住域が二極化していることは、今後も注視していく必要がある。

註

(1) 「出雲市天神遺跡」　出雲市教育委員会　（1972年）
(2) 「天神遺跡」　出雲市教育委員会　（1977年）
(3) 「天神遺跡の諸問題」　出雲考古学研究会（『古代出雲を考える』1　1979年）
(4) 「天神遺跡発掘調査報告書」　出雲市教育委員会　（1982年）
(5) 「天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ」　出雲市教育委員会　（1986年）
(6) 「塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ」　出雲市教育委員会　（1987年）
(7) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会　（1997年）
(8) 「天神遺跡第8次発掘調査報告書」出雲市教育委員会　（1996年）

Ⅳ．調査の概要

１．発掘調査の概要

調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北とも５m間隔のグリッドを設定し、南からＡ１～Ａ８Gr、Ｂ１～Ｂ８Grとした。調査面積は東西 10 m、南北 45 mの 450 ㎡である。なお、水処理のために調査区を囲むように深さ約 30 ㎝の側溝を掘っているが、この際にも多くの遺物を検出している。

層　序　（第６図・第７図）

調査区が南北に長いため、複雑な堆積を示しており、切合関係を把握するのも難しい状況であった。また、遺構が集中している調査区南側と遺構があまり検出されていない北側とでは、大きく層序が異なっている。

調査区の北側では、基本的には上層から褐灰色土、明褐灰色土、暗褐色土と堆積しており、地山である黄褐色シルト質土に達する。一方、南側の基本層は、上層から褐灰色土、黒褐色系土、砂質系土と堆積しており、地山である黄褐色シルト質土に達している。この層位の違いは、遺構の残存状況や遺物の出土状況から推察すると、北側では暗褐色土が堆積した後の時期に何度か削平を受けたものと考えられる。

遺　構　（第６図・第７図）

遺構は、溝状遺構 11 、土坑状遺構６、落ち込み状遺構６、ピット状遺構９を検出しており、遺構が築かれた時期も弥生時代中期から古墳時代初頭・古代・中世・近世のものなど様々であり、これらの遺構が複雑な切合関係をみせている。

近世の遺構は、最上位層である褐灰色土上面で検出され、溝状遺構を２（ＳＤ０１・ＳＤ０２）、土坑状遺構を１（ＳＫ０１）、落ち込み状遺構１（ＳＸ０１）を検出している。

古代から中世にかけての遺構は、溝状遺構を１（ＳＤ０５）、土坑状遺構を５（ＳＫ０２～ＳＫ０６）、落ち込み状遺構を４（ＳＸ０２～ＳＸ０４）、ピット状遺構９（Ｐ１～Ｐ９）を検出している。中でも土坑状遺構は、その全てが 11 世紀後半から 12 世紀代にかけて築かれ、井戸として利用されたと考えられ、特にＳＫ０４・ＳＫ０６では白磁を共伴し、多量の遺物が検出されている。

弥生時代から古墳時代初頭頃にかけての遺構は、溝状遺構を８（ＳＤ０３・ＳＤ０４・ＳＤ０７～ＳＤ１２）、落ち込み状遺構２（ＳＸ０４・ＳＸ０５）を検出している。中でも溝状遺構であるＳＤ０９は、第７次発掘調査[(1)]で検出されたＡ区大溝１と規模や方向がほぼ一致することから、同一の溝である可能性が高く、注目される。

また、遺構は調査区の南側に集中しているが、北側には遺構が存在しないのではなく、地山上面が何度かの削平を受けているためで、実際には遺構の底部のみが部分的に残っている状態であった。

遺　物

遺物は、造成土を除くと地山である黄褐色シルト質土の上層に堆積する全ての層に包含しており、弥生土器・土師器を中心に須恵器・磁器・鉄器・木製品も若干出土している。総発掘調査面積は450㎡であるが、遺物の出土量はコンテナ17箱分にも及んでいる。

中でも黄褐色シルト質土の上層に堆積する黒褐色土、暗褐色土は安定した遺物包含層となっている。また、遺構内からの出土量も多く、ＳＤ０３・０４・０９、ＳＫ０４・０６からは大量の遺物を検出している。

弥生土器には、壺・甕・高坏・鉢・蓋などの器種があり、バラエティーに富んでいる。そのほとんどが弥生時代中期中葉頃の遺物であるが、中には中期前葉に近い様相を示す遺物も認められ、天神遺跡が営まれた時期がさらに遡る可能性がある。また、壺や甕の中には内外面とも横方向のミガキによって調整されている特異な土器など、他地域から搬入された可能性があるものもあり、貴重な資料となっている。

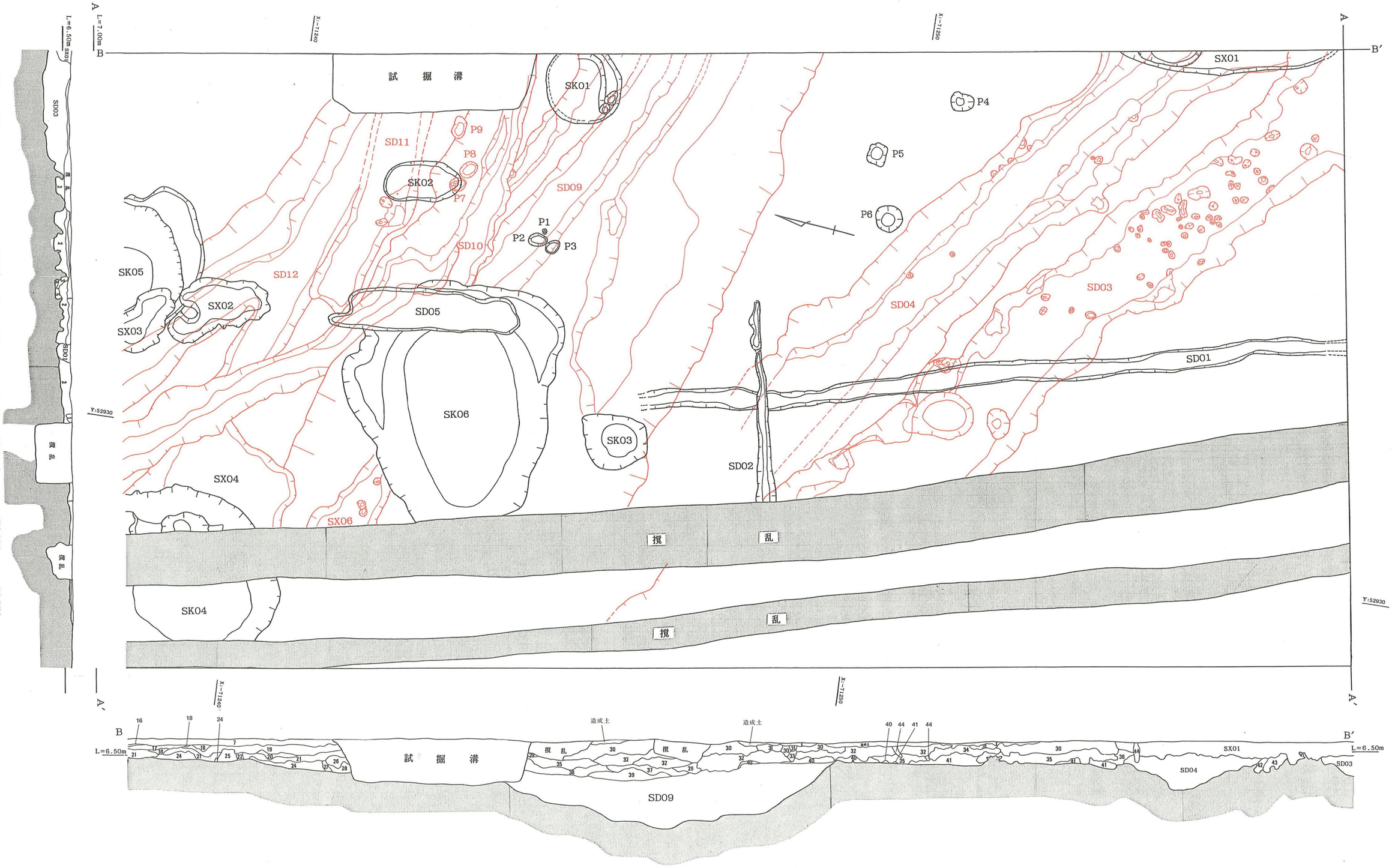
弥生時代後期頃の遺物は少ないが、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては再び遺跡の繁栄した時期で、遺物の出土量も多い。そして、中には第７次調査でも検出された布留式傾向甕も数点含まれており、注目される。

古墳時代前期・中期の遺物は少ないが、後期から奈良時代にかけての遺物はわずかながら出土している。そして、平安時代末（11世紀後半～12世紀代）になると、当該地に多くの遺構が築かれて再び繁栄期を迎え、遺物の出土量も多い。遺物には甕・坏・埦・小皿などとともに、玉縁のつく白磁や鉄鏃などの鉄器も共伴しており、良好な資料となっている。その他、中世・近世の遺物もわずかに認められ、遺跡が営まれていたことが窺われる。

以上のように、当該地は弥生時代中期中葉頃から近世に至るまで、一時衰退期はあるものの、連綿と集落が営まれていたことが窺われる。

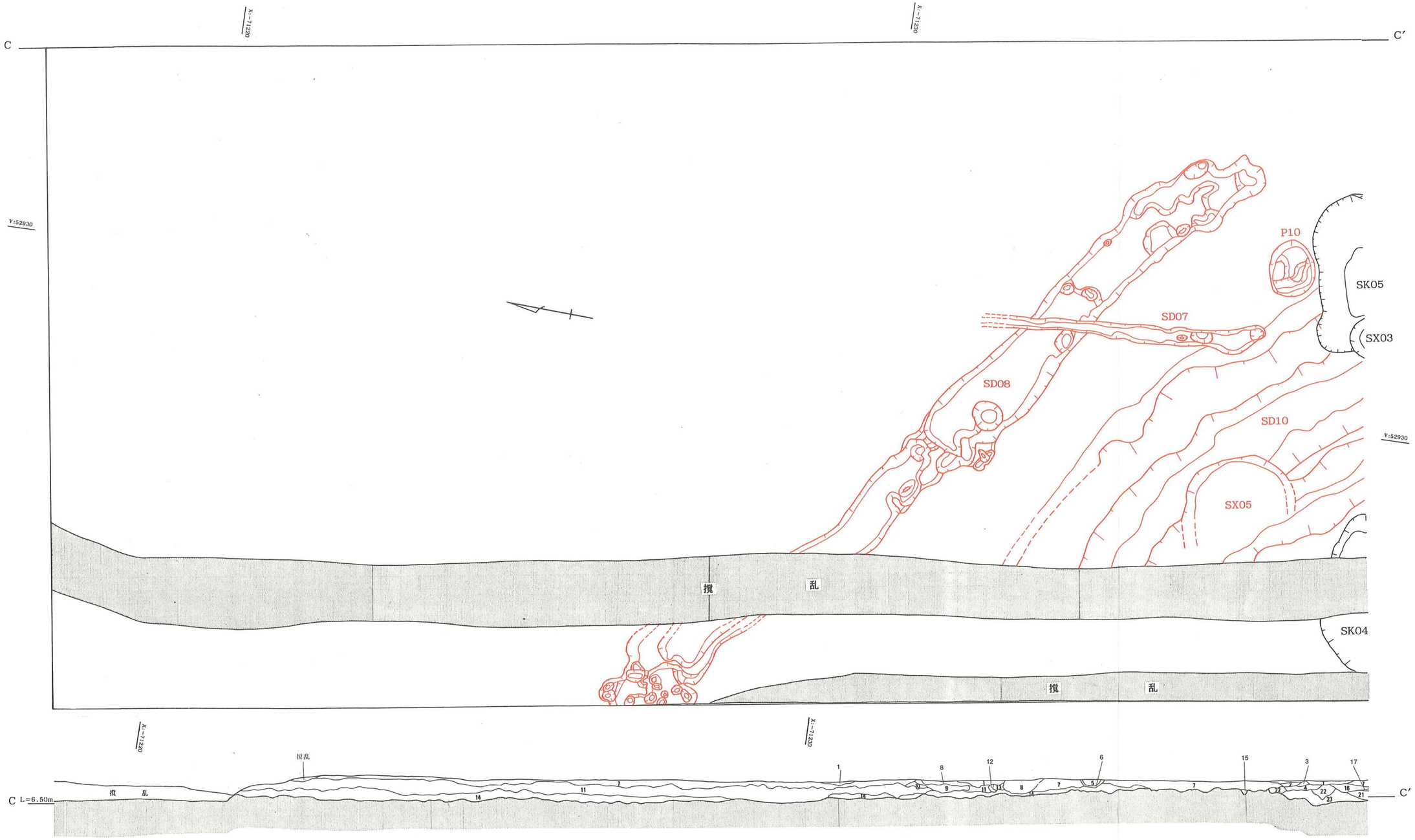
註

(1)　「天神遺跡第７次発掘調査報告書」　出雲市教育委員会　（1997年）



第6図　遺構配置図（1～4Gr）

※赤刷は弥生時代～古墳時代の遺構、黒刷は古代～中近世の遺構



23.明褐色砂質土

24.明褐色土　地山ブロックを多く含む

25.褐色土

26.褐色土　地山ブロックを多く含む

27.暗褐色土　少し撹乱を受けた層

28.暗褐色土　粒子粗い

29.暗褐色土　黒色土ブロックを含む

30.黒褐色土

31.暗褐色土　しまりがある

32.褐色土　砂粒を含む

33.褐色砂質土

34.灰褐色土　しまりがある

35.明褐色土

36.淡褐色砂質土

37.褐灰色土　褐色粒子を含み、しまりがない

38.褐灰色土　37層よりやや暗い

39.明褐灰色土　少し粘性があり、褐色粒子を含む

40.褐色砂質土　地山ブロックを多く含む

41.黄褐色砂質土　地山ブロックを多く含む

42.明褐色砂質土

43.淡黒色砂質土　地山ブロックを多く含む

44.灰褐色土

0　4 m

第7図　遺構配置図（5～8Gr）

※赤刷は弥生時代～古墳時代の遺構、黒刷は古代～中近世の遺構

2．遺構と遺物

(1) 近世の遺構

近世の遺構は、溝状遺構２、土坑状遺構１を検出しているが、いずれも褐灰色土上面で検出されており、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。

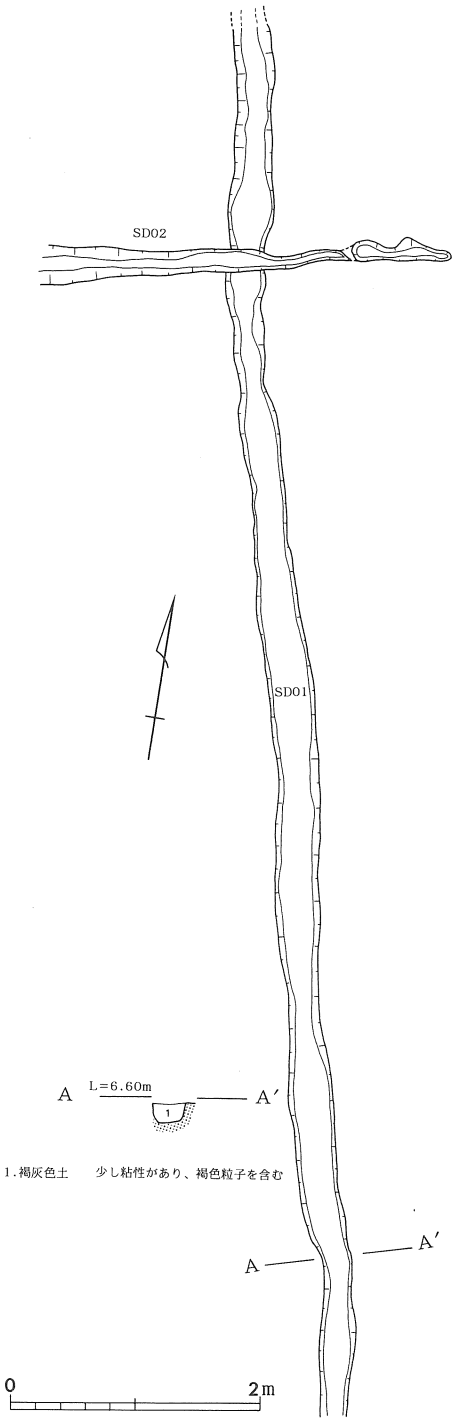
ＳＤ０１（第８図）

調査区の南側、褐灰色土上面で検出された南南東－北北西に伸びる溝状遺構である。北側は上部削平のために途中で切れ、南側は調査区外へと伸びている。検出長10.8ｍ、最大幅38㎝を測る。なお、検出高は標高6.58ｍである。

覆土には、少し粘性のある褐灰色土が堆積し、断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて、底面はやや平坦に作り出しており、最深部までの深さは約16㎝である。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、堆積土の状況や遺構の切合関係から考えると近世の遺構である可能性が高い。

また、ＳＤ０１と直交するようにＳＤ０２が西南西－東北東へと伸びているが、切合関係からＳＤ０１より新しい時期に築かれたことが明らかである。しかし、ＳＤ０１と同様、遺物は全く出土しておらず、性格については不明である。



第8図　SD01実測図

ＳＫ０１（第９図）

調査区の東側、Ａ３Grの褐灰色土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、東側が一部調査区外へ伸びているが、径約1.24ｍのほぼ円形を呈している。なお、検出高は標高6.58ｍである。

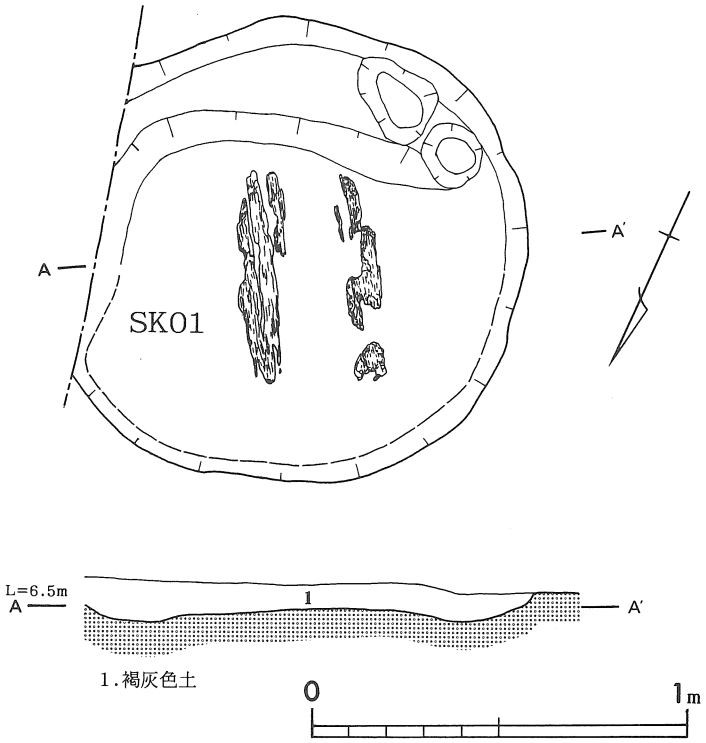
覆土には、黄褐色粘土をブロック的に含む褐灰色土が堆積しており、断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しているが、南側では一度平坦面を作ってから中央最深部へと落ちている。なお、最深部までの深さは約12㎝である。

土器は出土していないが、遺構の中央で２本の木片を検出している。これは、何かを据え付けるために渡されていた副木と考えられるが、何を据え付けていたかについては不明である。時期については、堆積土の状況や遺

構の切合関係から考えると、近世の遺構である可能性が高い。

(2) 古代から中世にかけての遺構

古代から中世にかけての遺構は、溝状遺構１、土坑状遺構５、落ち込み状遺構４、ピット状遺構９を検出しており、遺構の残存状態もほぼ良好で、多量の遺物が出土している遺構もあり、貴重な資料となっている。



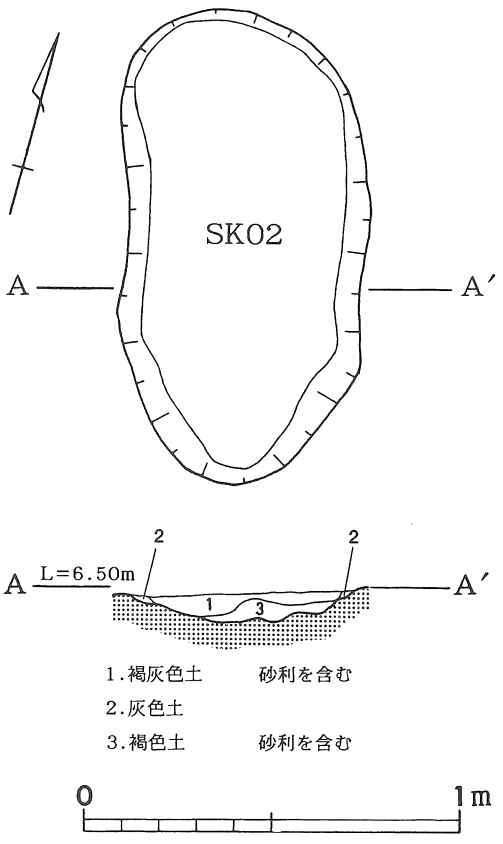
第9図　SK01実測図

ＳＫ０２（第10図）

Ａ３～Ａ４Grの灰白色粘質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長63㎝、南北長1.27ｍを測り、南北に長い楕円形を呈する。遺構の基軸は、南南東－北北西を向いており、検出高は標高6.48ｍである。

覆土には、上層から砂利を含む褐灰色土・灰色土・褐色土と堆積している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約８㎝である。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、堆積土の状況や遺構の切合関係から考えると、中世の遺構である可能性が強い。



第10図　SK02実測図

Ｐ４（第11図）

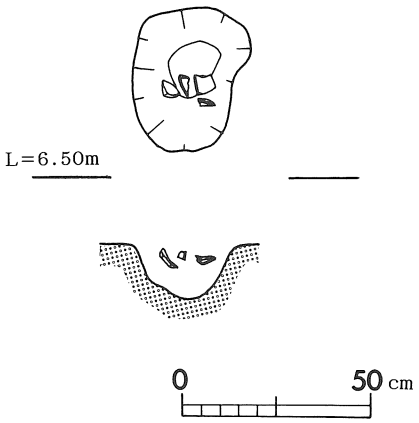
Ａ２Grの黄褐色シルト質土（地山）上面で検出したピット状遺構である。平面プランは東西長30㎝、南北長38㎝を測り、やや南北に長い楕円形を呈する。なお、検出高は標高6.32ｍである。

覆土には、褐色砂質土が堆積しており、断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出し、最深部までの深さは約15㎝である。

Ｐ４の出土遺物（第60図－88）

遺物は、土師器の小皿が１点のみ出土している。ほぼ完形で、口径９.２㎝、底径５.４㎝、器高１.95㎝を測り、内外面ともナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。このような小皿は、11世紀後半頃から導入されたと考えられており、器形からは判断できないが、他の遺構から出土した遺物を考えると11世紀後半から12世紀代の可能性が強い。

遺構の性格については、他のピットとの位置関係から考えると柱穴とは考えにくく、不明である。



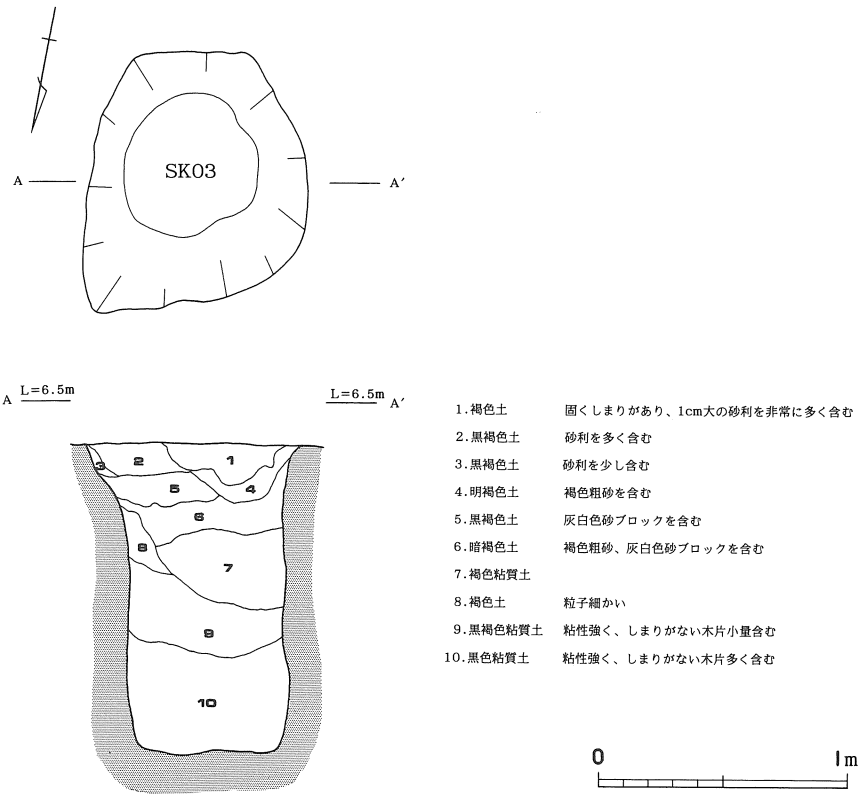
第11図　P4実測図

ＳＫ０３（第12図）

Ｂ３Grの灰黄褐色土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長約90㎝、南北長約１.05ｍを測り、南北にやや長いいびつな楕円形を呈している。なお、検出高は標高６.32ｍである。

覆土には、上層に砂利を多く含む褐色土や黒褐色土が堆積しており、中層には砂をブロック的に含む黒褐色土・暗褐色土が堆積し、下層には粘性が強い黒褐色土・黒色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて、底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約１.24ｍである。なお、ＳＫ０３は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての溝状遺構（ＳＤ０９）と切合関係にある。

遺構の性格については、下層の粘質土中に木片が認められることから、木枠組みの井戸として利用されていた可能性が強い。また、同時期に築かれたと考えられる遺構から出土した遺物から検討しても、ＳＫ０３は11世紀後半から12世紀代にかけて築かれ、遅くとも13世紀代には利用されなくなったと考えられる。



第12図　SK03実測図

ＳＫ０３の出土遺物

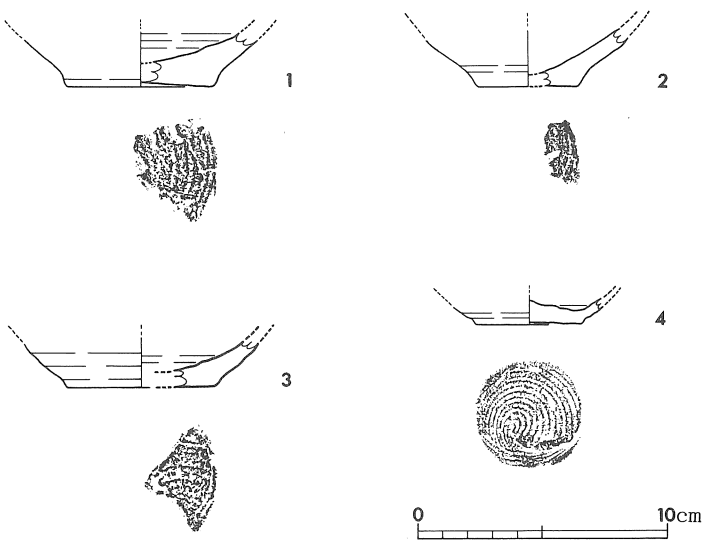
（第13図）

遺物には小片が多いが、土師器坏あるいは埦が出土している。１～４は土師器の坏あるいは埦である。いずれも内外面は回

転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

1は底部に厚みがあるので特徴で、2は口径に対して底径が小さくなるタイプのものであろう。3・4については全体の形状までは把握し難い。これらの遺物の時期的判断は難しいが、他の遺構などから考えると、11世紀後半から12世紀代の遺物である可能性が強いのではないだろうか。

また、下層の粘質土中から木片がかなり出土していることは注意される。



第13図　SK03出土遺物実測図

ＳＫ０４（第14図）

調査区のほぼ中央、Ｂ４～Ｂ５Grにかけて検出した土坑状遺構で、中央に水道管、西側にガス管が埋設されていたため、かなりの攪乱を受けている。

検出した状況では、東西長2.56ｍ以上、南北長3.24ｍを測り、平面プランはほぼ円形を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高6.35ｍである。

覆土には上層に砂利を含むにぶい黄色土・褐色土・暗褐色土などが堆積し、中層には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積してその下層には黒褐色土・暗灰色粘質土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ち、攪乱により明確には判断し難いが、底面はほぼ平坦に作り出しているようで、最深部までの深さは約80㎝である。

遺物は遺構の中層から下層にかけての出土が多く、中央と西側が大きく攪乱を受けてはいるものの、東側からの出土量が多い（第15図）。

遺構の性格としては、井戸が考えられるが、遺構の中央部が大きく攪乱を受けていることから、木片、板材などの出土も確認されず、判断し難い。しかし、遺構内からは量的には多くの土器・鉄器などが出土しており、井戸を埋める際に祭祀を行った可能性もある。

ＳＫ０４の出土遺物（第16図）

出土した遺物には土師器坏・小皿・足高高台付坏・台付坏・白磁碗・鉄器など多くの遺物がある。その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものもある。1～10は土師器の坏で、いずれも内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

2は、口径に対して底径が小さくなるタイプのものであろう。3も形状的には2と同様であり、底径6.0㎝、口径15.7㎝、器高4.1㎝を測り、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。6は、

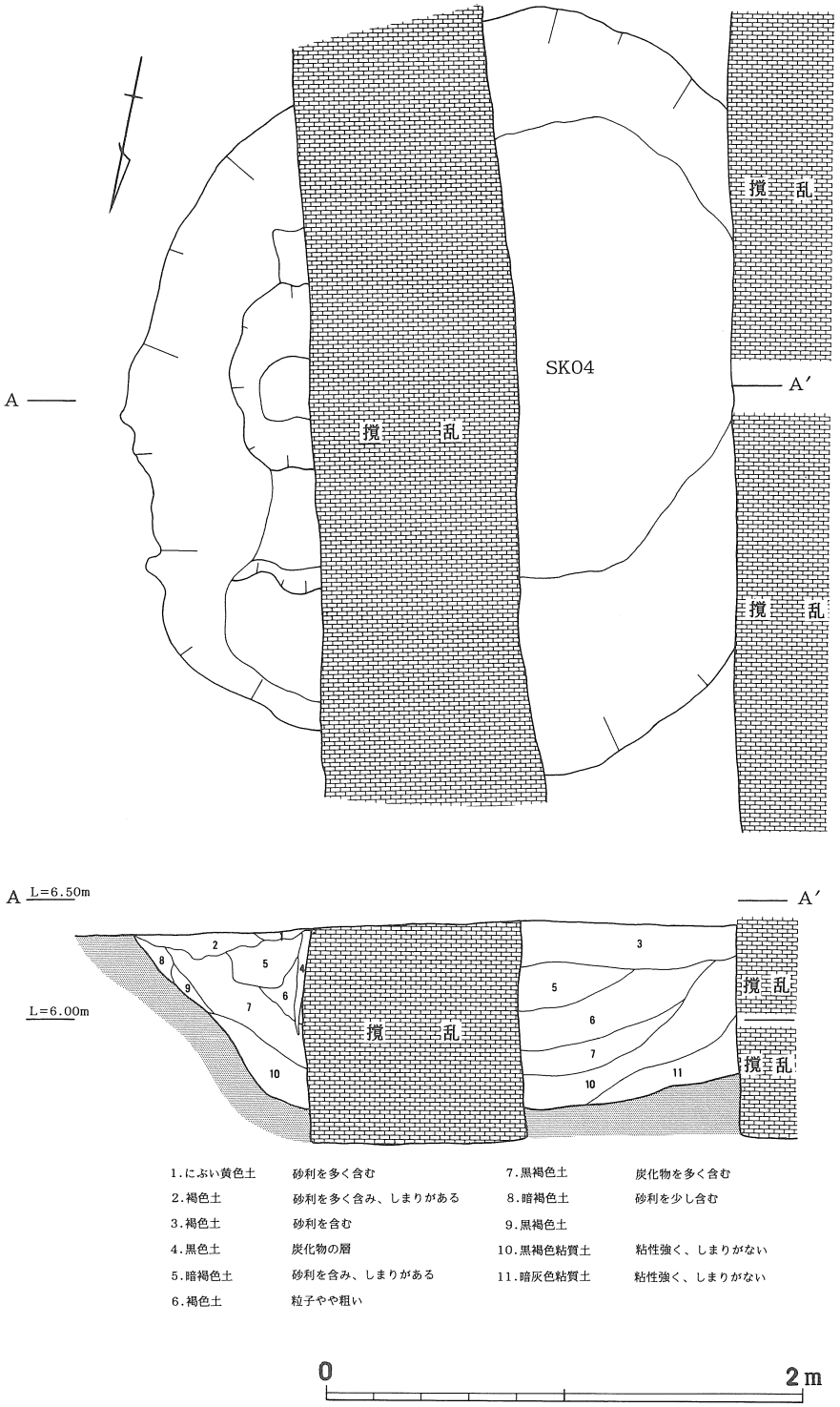
底径５.８㎝、口径14.0㎝、器高４.６㎝を測り、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。また、体部には回転水引き痕が明瞭に残り、外面にはススが付着している。10は口縁部から体部にかけての破片であるが、内外面とも黒褐色を呈し、口縁端部がやや外反するという特徴をもつ。

これらの坏は、６がやや古い様相を呈しているものの、その他は松江市天満谷遺跡ＳＤ０３付近、遺構外出土土器(1)、斐川町西石橋遺跡墓壙出土土器(2)、出雲市藤ヶ森遺跡（Ｉ地点）ＳＫ０１出土土器(3)と形状がよく似ており、12世紀代のものと考えられる。

11～13は土師器の小皿である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。

11は、やや内湾ぎみに立ち上がり、器高が1.35㎝と低く、内外面にススが付着している。12は形状的には11と同様であるが、器高は２.０㎝と高さがある。13は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。これらの小皿は、その出現が11世紀後半頃と考えられることから、それ以降のものであろう。

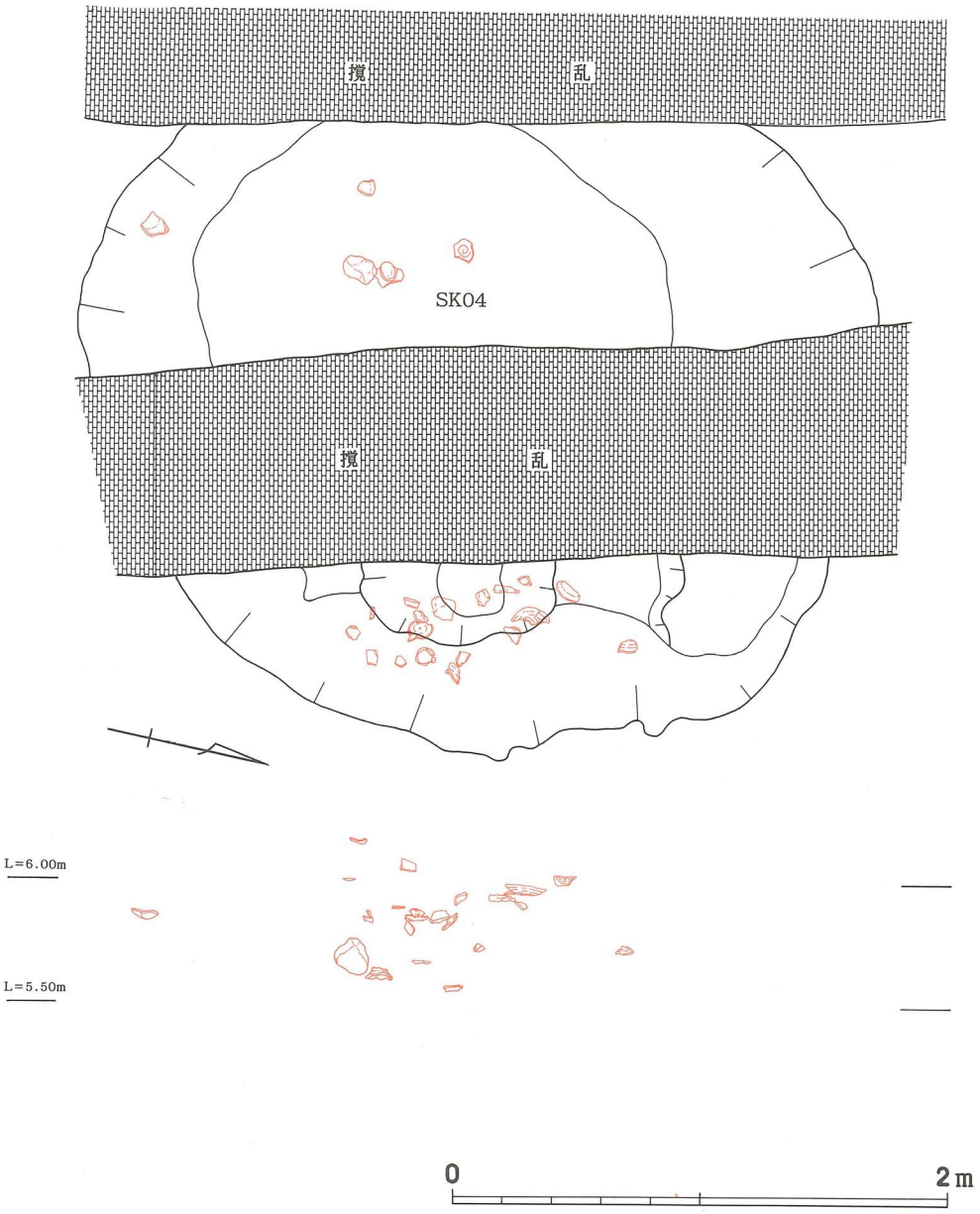
14は、足高高台をもつ土師器坏である。高台部はやや外傾するが外観的には直立に近く、内外面とも回転ナデによって調整されている。また焼成が非常に良好で、外面にはススが付着している。足高高台付の坏は、小皿と同様、時期的には11世紀後半頃から出現するものであることから、それ



第14図　SK04実測図

以降のものであろう。

15は、台付の土師器坏である。内外面とも回転ナデにより調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。このタイプのものは、松江市天満谷遺跡・黒田畦遺跡[4]などからも出土しており、12世紀後半以降に出現する器形である。



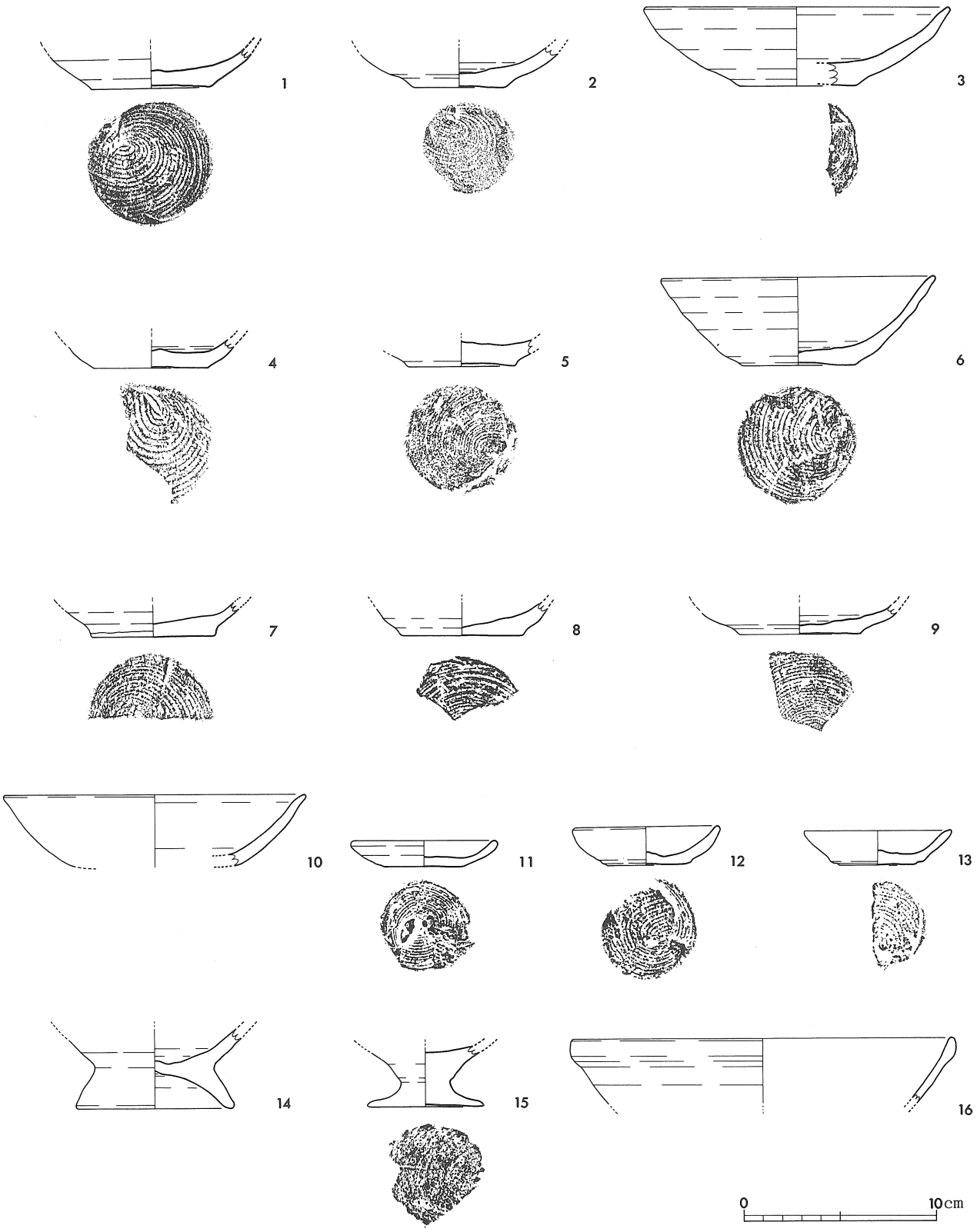
第15図　SK04遺物出土状況実測図

16は、白磁碗の口縁部から体部にかけての破片である。口径約19.7㎝を測り、外面口縁部に玉縁状の突帯が付くものである。その特徴から11世紀後半から12世紀代にかけての資料であろう。平安時代から鎌倉時代にかけての土師器にはバリエーションが多く、容易に時期的な判断はし難いが、この白磁が出土していることによりＳＫ０４から出土している土師器についてもおおよそ当該期の資料であると考えられる。

第17図－１～３はＳＫ０４から出土した鉄製品である。

１は錆が付着してはいるが、最大長9.35㎝、最大幅2.4㎝、重さ42ｇを測る。２も同様に錆化しているが、最大長6.9㎝、最大幅2.5㎝、重さ21ｇを測る。Ｘ線写真から観察すると、１は先端に２ヵ所の型持せ孔をもつ鉄鏃である。なお、片端は欠損している。２は鑿であろう。刃部の一部と上端が欠損している。３は、Ｘ線写真から観察すると完形ではあるが、用途については不明である。しかし、最大長7.25㎝、最大幅3.4㎝、最大厚が1.6㎝以上あり、121ｇと重量もあることなどか

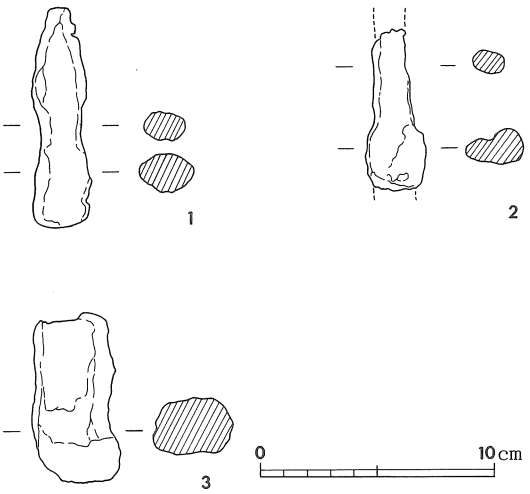
ら、金鎚のようなものが想定される。これらの鉄製品は、他の出土遺物から考えると11世紀後半から12世紀代のものである可能性が強い。



第16図　SK04出土遺物実測図(1)

ＳＫ０５（第18図）

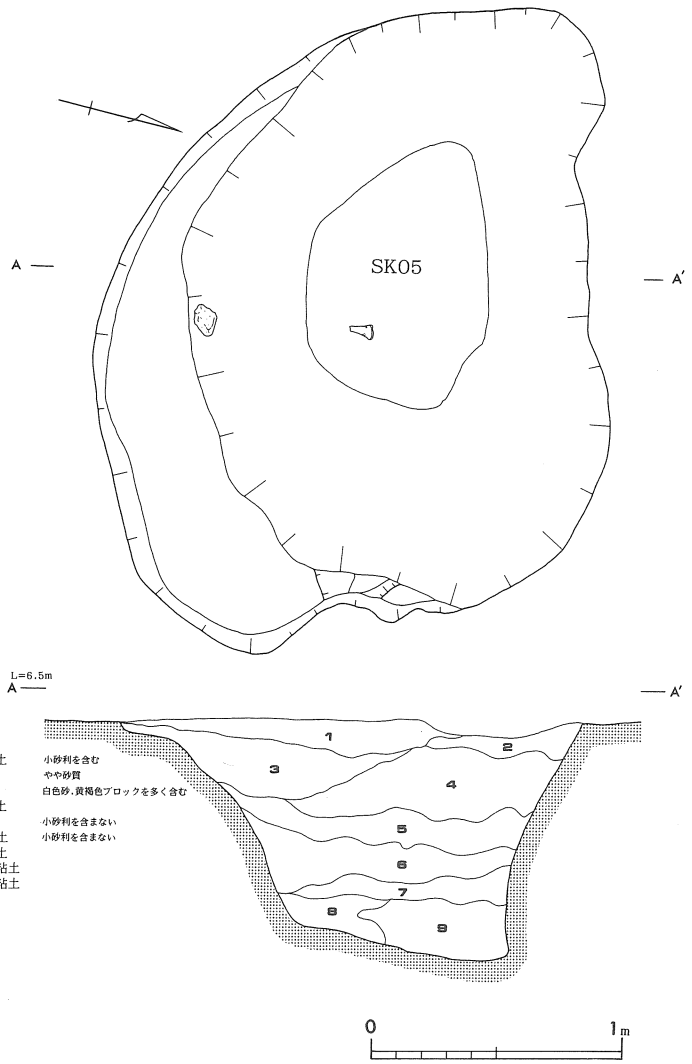
調査区のほぼ中央、Ａ４～Ａ５Grの灰白色粘質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長約２.４ｍ、南北長約２.05ｍを測り、東西にやや長いいびつな楕円形を呈している。なお、検出高は標高６.37ｍである。



第17図　SK04出土遺物実測図(2)

覆土には、上層に砂利を含む暗褐色土、中層には砂利を含まない褐色系土が堆積し、下層には粘性の強い暗褐色土や黒褐色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、基本的には肩部から約45度の角度で落ち、底面はほぼ平坦に作り出しているが、遺構の南側では一度平坦面を作り出してからさらに落ち、やや北側に偏る最深部へと達する。なお、ＳＫ０５はやや新しい時期の遺構であるＳＸ０２、ＳＸ０３、弥生時代の遺構であるＳＤ１２と切合関係にある。

遺構の性格としては、形状や下層からかなりの湧水があることから、素掘りの井戸と考えられる。時期としては、出土遺物から考えると11世紀後半から12世紀代にかけてのものと考えられ、井戸を埋める際に土器などを投入し、祭祀を行った可能性もある。



第18図　SK05実測図

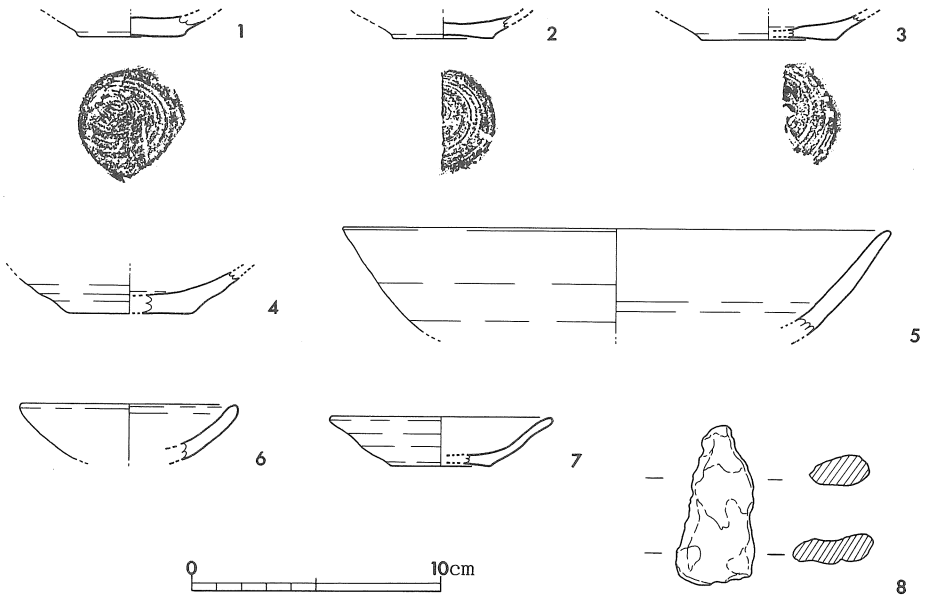
ＳＫ０５の出土遺物（第19図）

出土遺物には細片が多いが、土師器坏・小皿・鉄製品が出土している。

１～５は土師器の坏である。いずれも内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。５は、口径21.８㎝を測るやや大形の坏で、やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部の内外面にはススが付着してい

る。

6・7は土師器の小皿である。6はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。7は底径3.9㎝、口径8.8㎝、器高1.95㎝を測り、内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。



第19図　SK05出土遺物実測図

8は錆が付着しているが、最大長6.3㎝、最大幅3.4㎝、重さ27gを測る鉄製品で、X線写真で観察すると完形の鉄鏃であることが判明した。この鉄鏃も他の出土遺物から考えると11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。

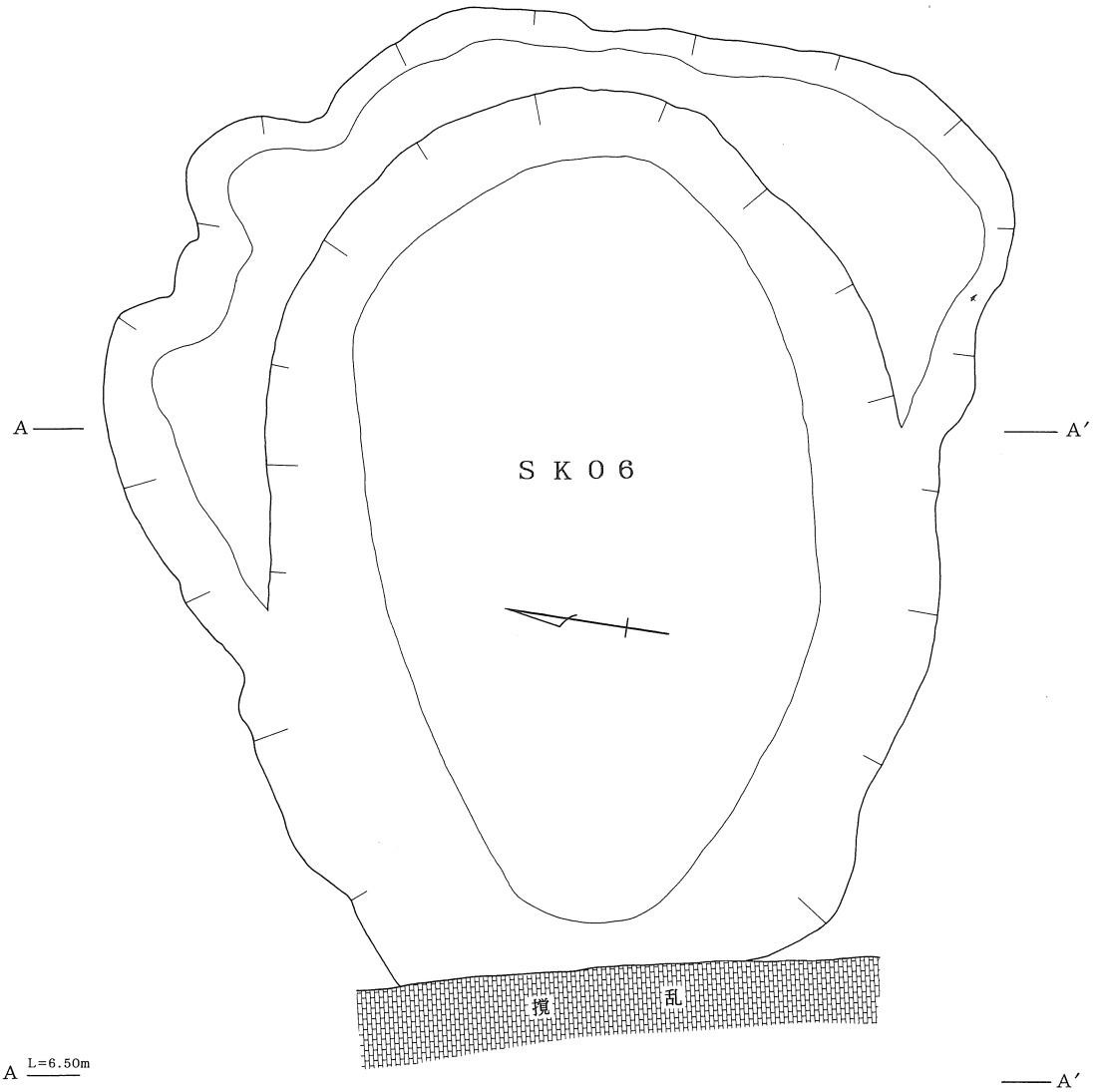
SK06（第20図）

調査区のやや南側、A3～A4Gr、B3～B4Grの灰黄褐色土上面で検出された土坑状遺構である。西側は水道管が埋設されていたため攪乱を受けているが、東西長4.0m以上、南北長約3.2mを測り、東西に長い楕円形状を呈している。なお、検出高は標高6.30mである。

覆土には、基本的に上層に砂利を多く含む褐色土・黒色土が堆積し、中層から下層にかけては粘性のある黒褐色土・暗灰色土が堆積しているが、遺構の中央部では異なった堆積層を示している。つまり、3層から13層までの覆土は人為的に埋められたものと考えられ、付近の堆積層には認められない黄褐色砂層や黒色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層にまで達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、遺構の東側では肩部から緩やかに落ちて一度平坦面を作り出し、さらに鋭角に底面へ向かって落ちている。一方、西側では肩部からほぼ垂直に落ちており、底面は一様に平坦に作り出している。なお、最深部までの深さは約1.0mである。

遺物は、上層から下層にかけてほぼ同量の出土が認められ、出土量も多い（第21図）。位置的にはやや東側からの出土量が多く、遺構ほぼ中央の最深部からは井戸の側板、副木として利用されていたと考えられる板材や杭が検出されている。また、中層にあたる褐色粘質土からは若干のヤマトシジミの貝殻が認められ、注意される。

遺構の性格としては、中央最深部から板材や杭を検出していることから、木枠組みの井戸として利用されていたと考えられる。そして、遺物の出土量から考えると、井戸を廃棄する際に大量の土器を投入し、祭祀を行っていた可能性が高く、その後、人為的に埋めたものと考えられる。また、出土遺物から考えると遺構が築かれた時期は11世紀後半から12世紀代と考えられ、遅くとも13世紀代に

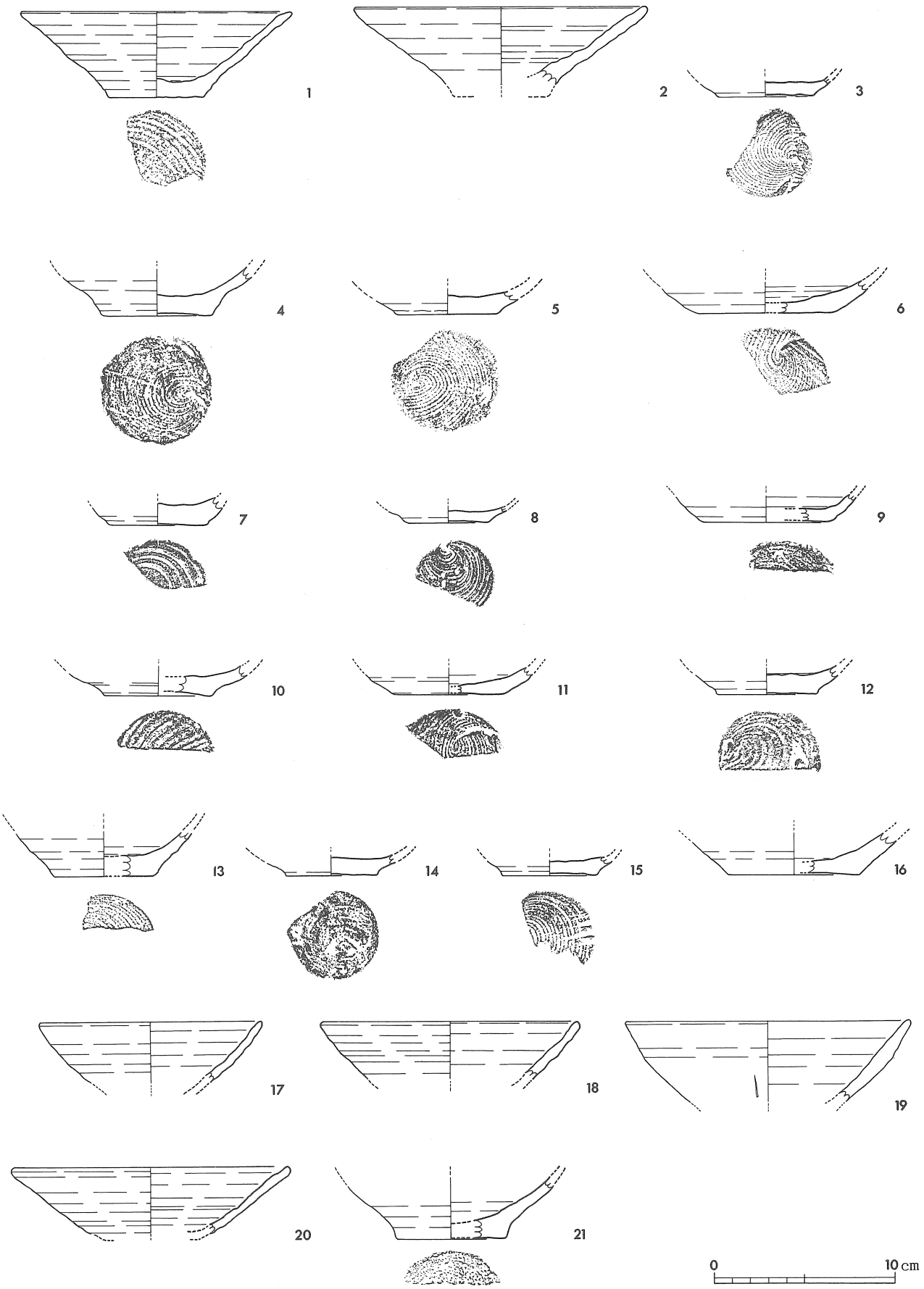


1.灰黒色土	灰白色土ブロック含む	12.黄褐色土	粘土と砂の混合層	23.褐色粘質土	粗砂少し含む
2.黒褐色土	砂利を多く含む	13.灰黄色粘質土	粒子細かい	24.褐色粗砂層	
3.黒色土	砂利を多く含む	14.褐色土	砂利を多く含む	25.暗オリーブ色粘質土	粘性強く、しまりがない
4.黄褐色砂層	黄褐色粘土、黒色土ブロック含む	15.褐色土	砂利を少し含む	26.黒褐色土	粒子細かく、少し粘性あり
5.黄褐色粗砂層	黄褐色粘土ブロック含む	16.暗褐色土	粒子細かい	27.黒褐色粘質土	粘性強く、しまりがない
6.オリーブ黒色粘質土	粗砂少し含む	17.黒褐色土	黒色土ブロックを含む	28.黒灰色粘質土	粘性非常に強く、しまりがない
7.オリーブ色土	粗砂、黒色土ブロック含む	18.褐色粘質土	黒色土ブロックを含む	29.オリーブ褐色粘質土	
8.黄褐色土		19.暗褐色土		30.灰褐色砂質土	黄褐色粘土ブロック含む
9.黒褐色粘質土	粘性強く、しまりがない	20.褐色土		31.暗灰色粘質土	粘性非常に強く、しまりがない
10.赤褐色土	少し粘性あり	21.灰色砂	ブロック	32.灰色粘質土	粘性強く、しまりがない
11.黒色粘質土		22.明褐色土	やや砂質	33.暗灰色粘砂層	

0 2 m

第20図　SK06実測図

第21図　SK06遺物出土状況実測図



第22図　SK06出土遺物実測図(1)

は利用されなくなったものと考えられる。

ＳＫ０６の出土遺物（第22～24図）

ＳＫ０６からは、平安時代末頃の土師器坏が最も多く出土しているが、その他、土師器小皿・甕・高坏・須恵器壺・白磁碗・鉄器・砥石なども検出されており、バラエティーに富んでいる。その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものがある。

第22図－１～21は土師器坏である。１・２は器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に大きく開く。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

１は、底径6.2㎝、口径14.8㎝、器高4.75㎝を測り、体部には回転水引き痕が明瞭に残っている。これらの特徴をもつ坏は、斐川町西石橋遺跡墓壙出土土器、出雲市藤ヶ森遺跡（Ｉ地点）ＳＫ０１出土土器に形状がよく似ており、12世紀代のものと考えられる。

３～16は底部から体部にかけての破片であり、全体の形状は把握できないが、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。この中には底部回転糸切り後、一部にヘラ状工具による調整が認められるもの（４・６・15）もある。

17～20は、口縁部から体部にかけての破片で、内外面とも回転ナデにより調整されている。18・20は１・２と同様に器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に大きく開くタイプのものであろう。

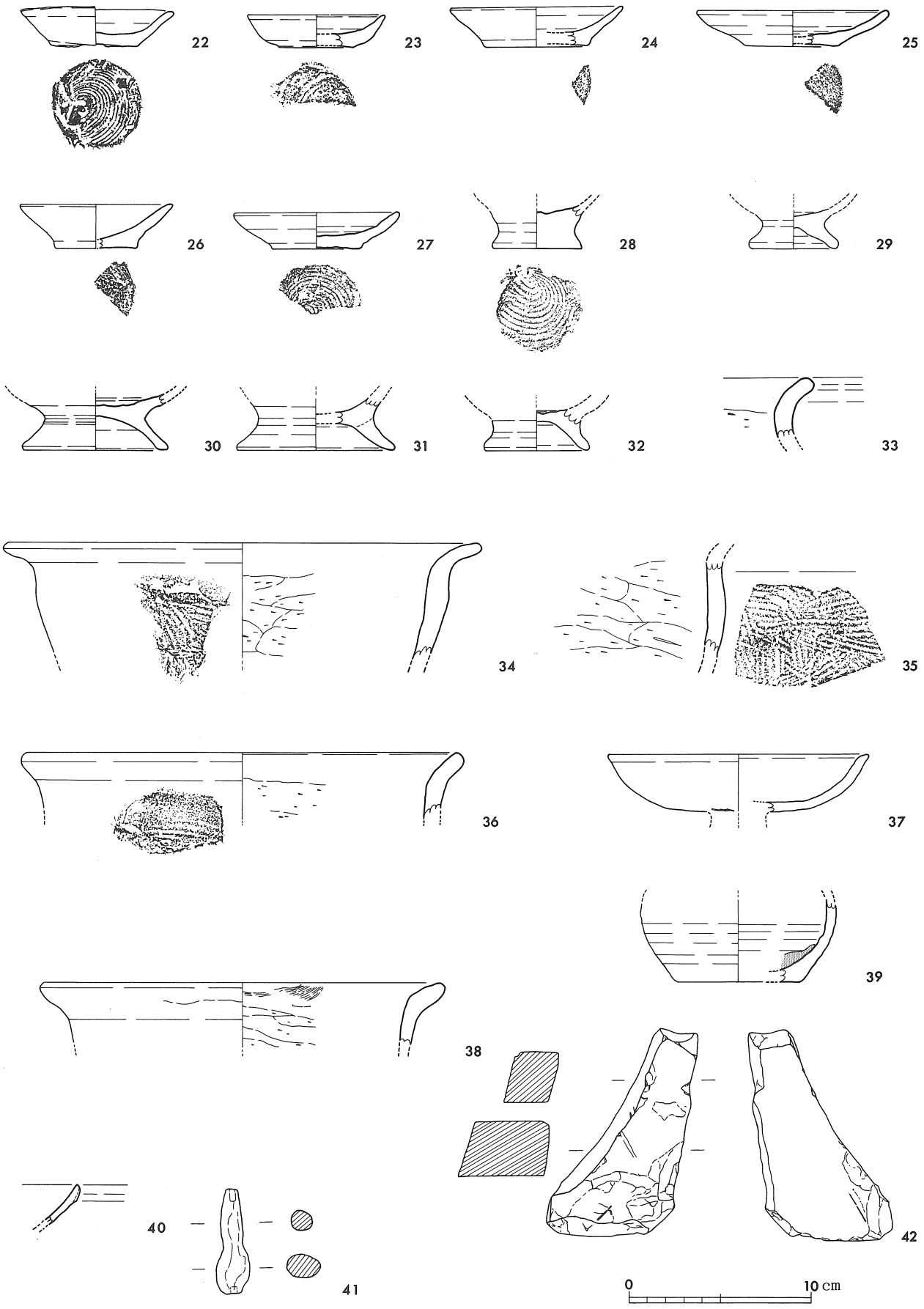
21は、非常に硬質で焼成が良好であり、一見すると須恵器のようにも見える土師器坏である。やや内湾ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されているようである。平安時代～鎌倉時代にかけての土師器坏には多くのバリエーションがあり、編年が確立されてはいないが、ＳＫ０６からは11世紀後半から12世紀代の玉縁状の突帯が付く白磁が出土していることを考えると、これらの土師器坏はおおよそ当該期の遺物であると考えられる。

第23図－23～27は、土師器の小皿である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。22は完形で、底径4.6㎝、口径8.0㎝、器高2.1㎝を測り、外面口縁部にはススが付着している。23は、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。24～26は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、27はやや内湾ぎみに立ち上がる。以上のような小皿は、その出現が11世紀後半頃と考えられることから、それ以降のものであろう。

28は、台付の土師器坏である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。なお、台付の坏は、12世紀後半以降に出現する器形である。

29～32は、足高高台をもつ土師器坏である。いずれも内外面は回転ナデにより仕上げられているが、高台部が大きく外傾するもの（29～30）、外傾するが、外観的には直立に近いもの（32）に類別できるが、これらの特徴からは時期的判断は難しい。なお、このタイプの坏は、11世紀後半以降に出現する器形である。

33～36は、土師器甕であろう。いずれも外面はタタキ、内面頸部下は強いケズリによって調整され、外面全体にススが付着している。33・36は口縁部は外方へゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。34は、口縁部が外方へ強く屈折している。以上のような形態的特徴をもつ甕は、出雲



第23図　SK06出土遺物実測図(2)

地域では類例が少ないが、頓原町中原遺跡[5]では外面はタタキ、内面はケズリの後ナデによって調整されている甕が出土しており、旭町重富遺跡[6]では外面タタキ、内面はカキメによって調整されている甕が出土している。これらの甕は、北陸系の長胴甕によく似たタイプの土器で、搬入品の可能性もあろう。

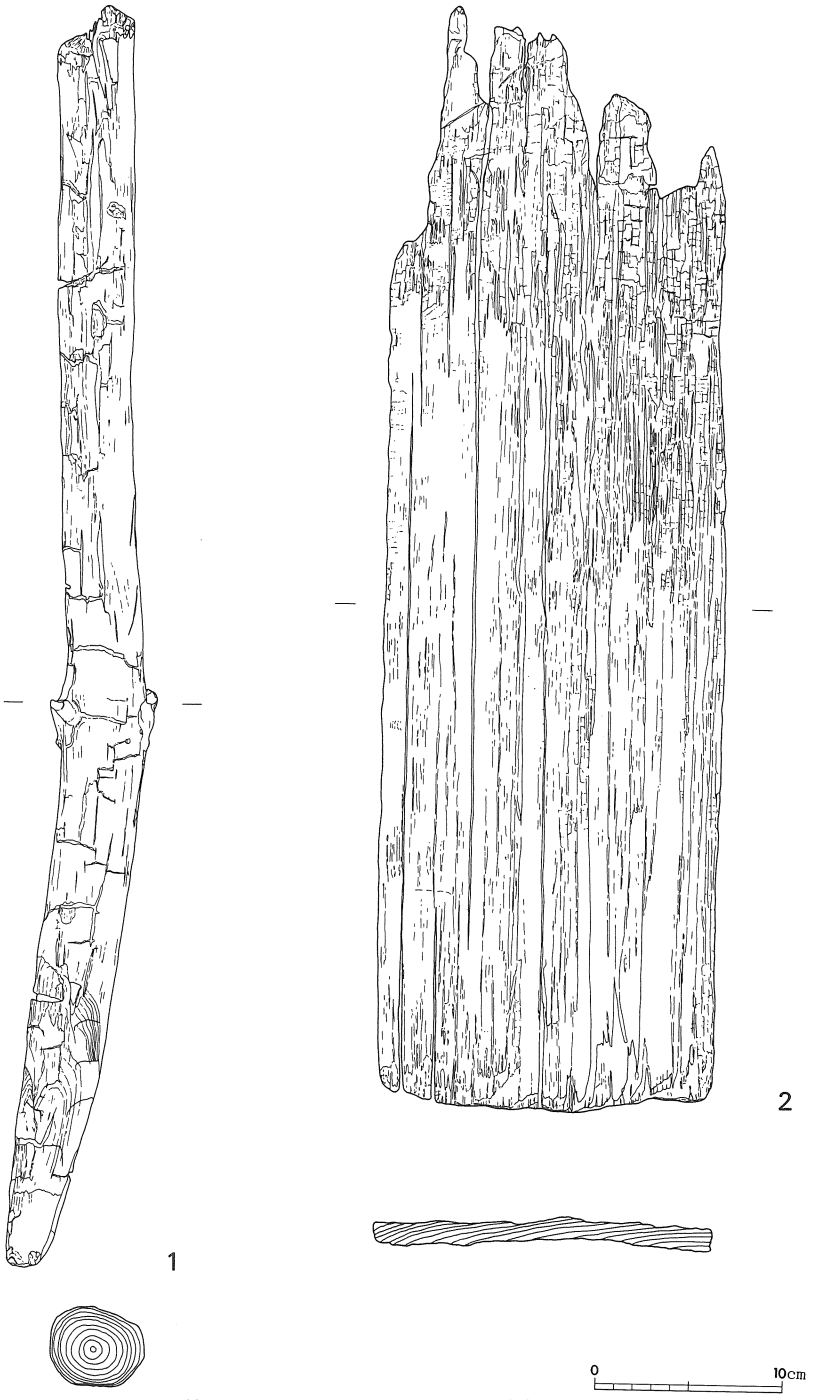
38は、当地方では一般的にみられる土師器甕で、口縁部内外面はナデによって調整（一部ハケ）され、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。以上（33～36・38）のような甕は、他の出土遺物から考えると、おおよそ11世紀後半から12世紀代にかけてのものであろう。

39は、須恵器壺の底部である。底径6.6㎝を測り、内面底部には自然釉がかっている。このタイプの壺は、松江市池の奥2号墳周溝内土壙[7]、長峯遺跡[8]などからも出土しており、おおよそ10世紀～11世紀代にかけてのものであろう。

40は、白磁碗である。外面口縁部に玉縁状の突帯を有しており、その特徴から、11世紀後半から12世紀代にかけての資料であろう。

41は、用途不明の鉄製品である。現状では錆化しており、最大長5.0㎝、最大幅1.9㎝、重さ11gを測るが、X線写真から観察すると径4㎜程度の円管状を呈しているようである。なお、両端を欠損している。

42は、砥石である。片端をわずかに欠損し、広い方の二面に使用痕が認められるが、片面は全面



第24図　SK06出土遺物実測図(3)

を使用したものではなく、約1/4は自然面が残っている。石材には細粒の安山岩を用いている。

この他、ＳＫ０６からは木製品も出土している（第24図）。いずれも中央最深部から出土しており、木枠組みの井戸の部材として利用されたものと考えられる。

１は、枠木の副木として用いられた杭であろう。片端は欠損しているが、現状では長さ67㎝、最大径4.3㎝を測り、表面は樹皮を剥いだ状態であるが、下端部は削り出して杭状に加工している。なお、この杭は横たわった状態で出土している。

２は、井戸の側板として用いられたものであろう。ほぼ完形の状態で、片端はほぼ平坦に削られ、最大長58㎝、最大幅18㎝、最大厚1.2㎝を測る。なお、この板材はほぼ直立した状態で出土している。以上のようにＳＫ０６からは多くの遺物が出土しているが、形状などから若干前後するものもあろうが、おおよそ11世紀後半から12世紀を中心とした範疇に入る資料と考えられる。

古代から中世にかけてのその他の遺構

この時期の遺構としては、前述した他にはＳＫ０２と同様に灰白色粘質土上面で検出した溝状遺構１（ＳＤ０５）、落ち込み状遺構３（ＳＸ０２～ＳＸ０４）、ピット状遺構８（Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５～Ｐ９）を検出している。これらの遺構の上面は何度かの削平を受けているものと考えられ、遺構の残存状況もあまり良くない。遺物も全く出土しておらず、時期的な判断は難しいが、層位的には平安時代末期の遺構である土坑状遺構（ＳＫ０３～ＳＫ０６）の上面で検出していることから、少なくともそれ以降、中世に築かれた遺構である可能性が強いのではないだろうか。

また、ＳＤ０５とＳＸ０２～ＳＸ０４については、上面が削平を受けていることを考えると同一の溝状遺構であった可能性もあろう。

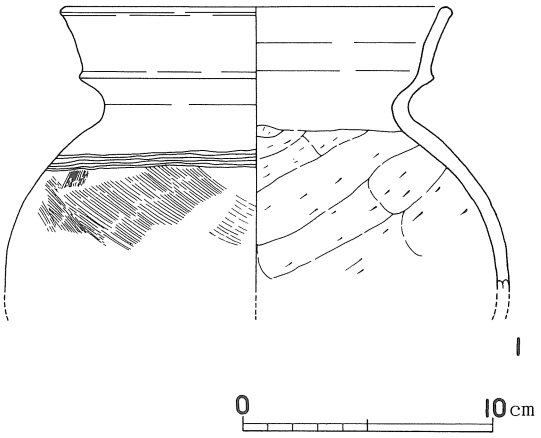
(3) 弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての遺構

弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての遺構は、溝状遺構８（ＳＤ０３・ＳＤ０４・ＳＤ０７～ＳＤ12）、落ち込み状遺構２（ＳＸ０４・ＳＸ０５）を検出しており、遺構内からは多量の遺物が検出されている。また、大規模な溝状遺構も検出され、第７次発掘調査によって検出された溝状遺構とともに環濠として機能していたことも考えられ、貴重な資料となっている。

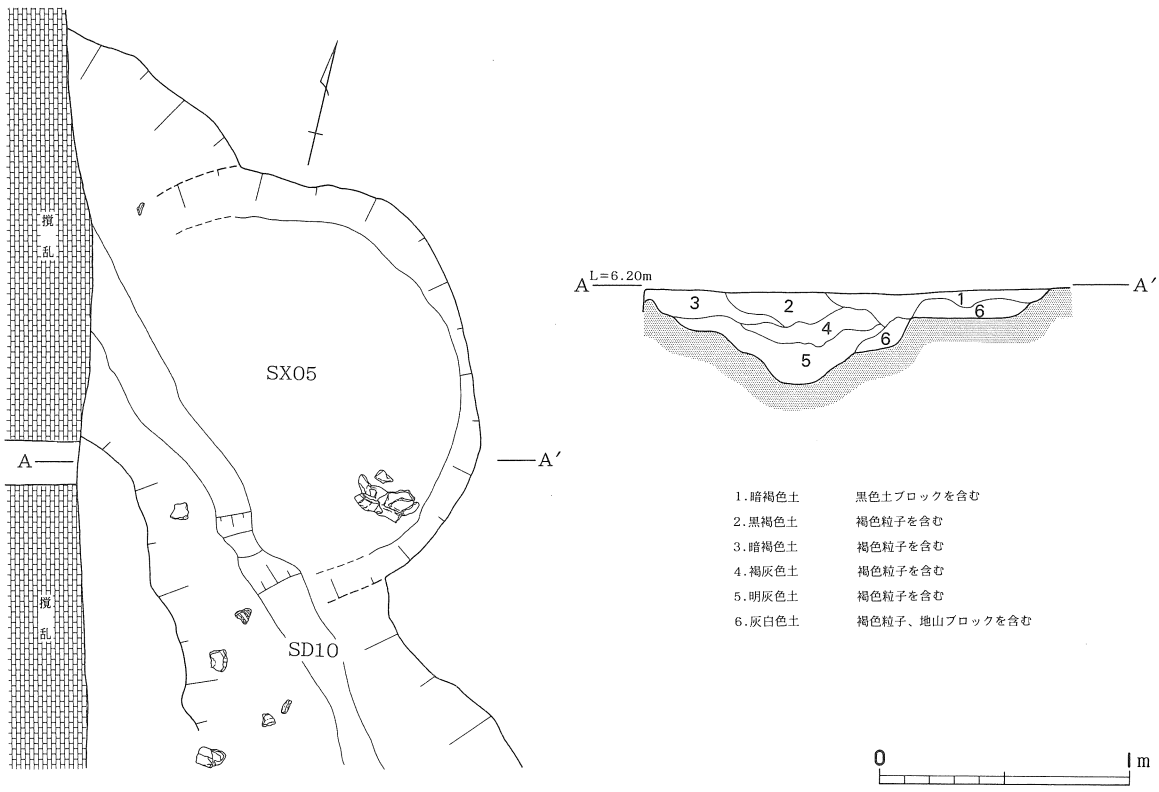
ＳＸ０５（第26図）

Ｂ５Grの黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した落ち込み状遺構である。西側はガス管埋設のために攪乱を受けている。また、ＳＸ０５よりも古い遺構であるＳＤ１０との土層の見極めが困難であったことから、全体の形状が把握できなかった。しかし、土層断面から推察すると、平面プランは径約1.75ｍのほぼ円形状を呈していたものと考えられる。なお、検出高は標高6.18ｍである。

第26図の土層断面をみると、１層～３層までがＳＸ０５の覆土と考えられ、上層には黒色土ブロックを含む暗褐色土が堆積し、その下層には褐色粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ち、底面はほぼ平坦に作



第25図　SX05出土遺物実測図



第26図　SX05実測図

り出しているようである。

遺物には古式土師器の甕が１点出土しているのみで、遺構の性格は不明であるが、築かれた時期については古墳時代前期初頭と考えられる。

ＳＸ０５の出土遺物（第25図）

古式土師器が１点出土しているのみである。複合口縁の甕１は、口縁部から体部にかけての破片であり、口径15.4㎝、残存高11.4㎝を測る。口縁部は内外面ナデ、頸部下外面は６条の直線文と斜め方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、口縁端部はやや外方に折り曲げ、ナデて凹面を作っている。複合口縁部の稜は水平方向に向いているが、やや鋭さを欠く。このような甕は、鹿島町南講武草田遺跡の７期[(9)]に相当する資料であり、古墳時代前期初頭のものであろう。なお、当該期の甕は第７次発掘調査のＳＤ０４からも検出されている。

ＳＤ０３（第27図）

調査区の南側、Ａ１GrからＢ３Grにかけて、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東－西北西の方向に伸びる溝状遺構である。西側は水道管、ガス管埋設のために攪乱を受けているが、南側、北側ともに調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況では、長軸15.０ｍ以上、最大幅２.０ｍ、狭い所でも約１.２ｍを測る。なお、検出高は標高約6.30ｍである。

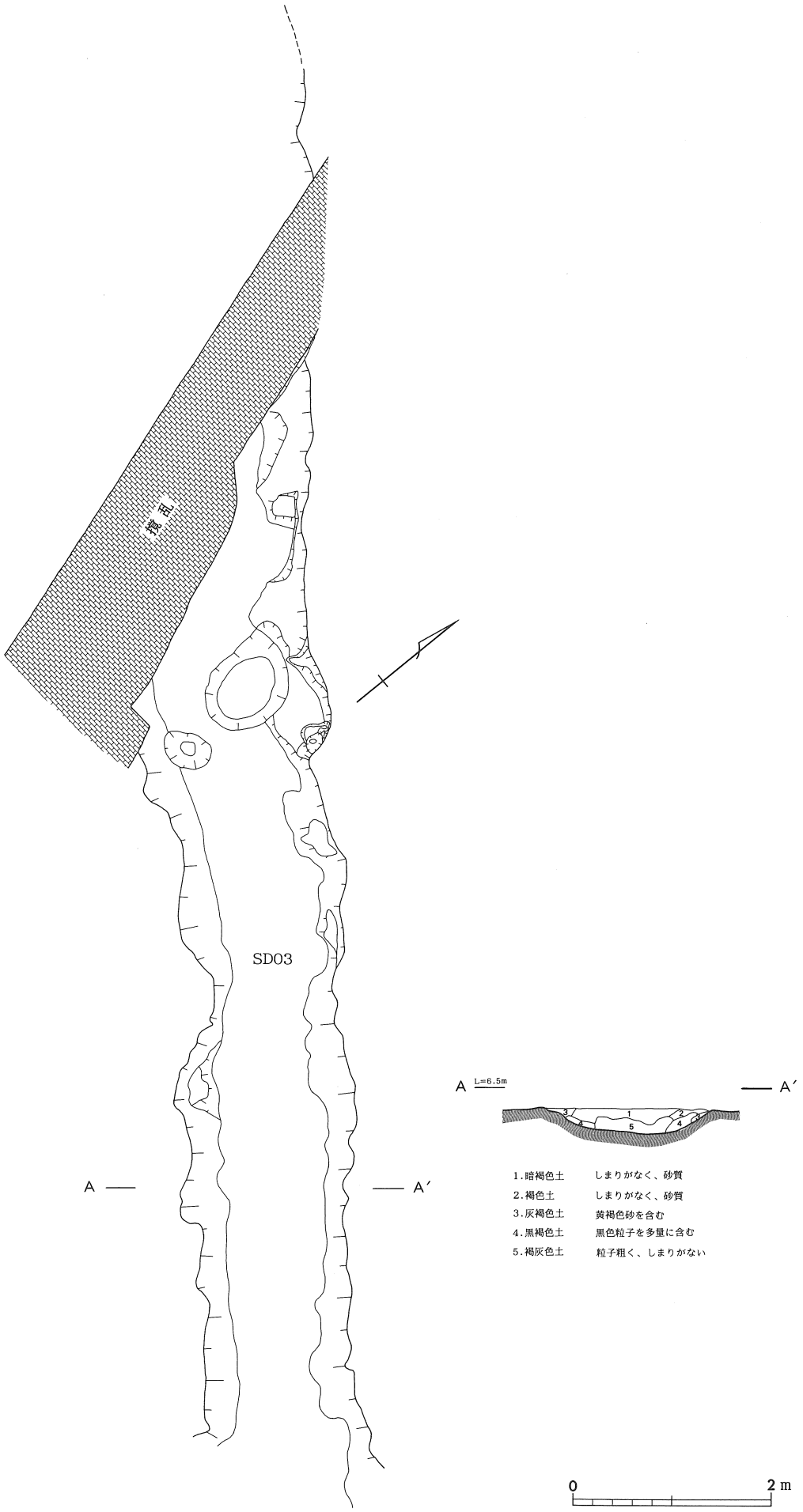
覆土には、上層に暗褐色・褐色の砂質土が堆積し、下層には粒子が粗い褐灰色土が堆積して最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は、両肩からやや緩やかに落ち、底面はレンズ状に丸く作り出している。最深部までの深さは約46㎝、浅い所でも約24㎝の深さがある。

全体の形状は、Ａ１Grの南側とＢ２Grの南側付近で溝の幅が広くなっており、Ａ１Grの北側でやや狭くなっている。また、Ｂ２Gr南側の遺構底面にはピット状の遺構が２穴掘り込まれ、そのうちの１つは径約80㎝、深さ約55㎝もあるが、出土遺物もなく、性格は不明である。なお、Ｂ２GrではＳＤ０３よりも古い遺構であるＳＤ０４と切合関係にある。

遺物の出土状況をみると、遺構の南側（第28図）では標高5.85ｍから6.55ｍの範囲に上層から下層にかけてほぼ平均して多量の遺物が出土している。位置的にみると、南側にやや遺物が多い傾向にある。しかし、これらの遺物の中には弥生時代中期頃の遺物が中心ではあるが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も若干検出され、層位的にも底面直上からの検出もあることは注意される。

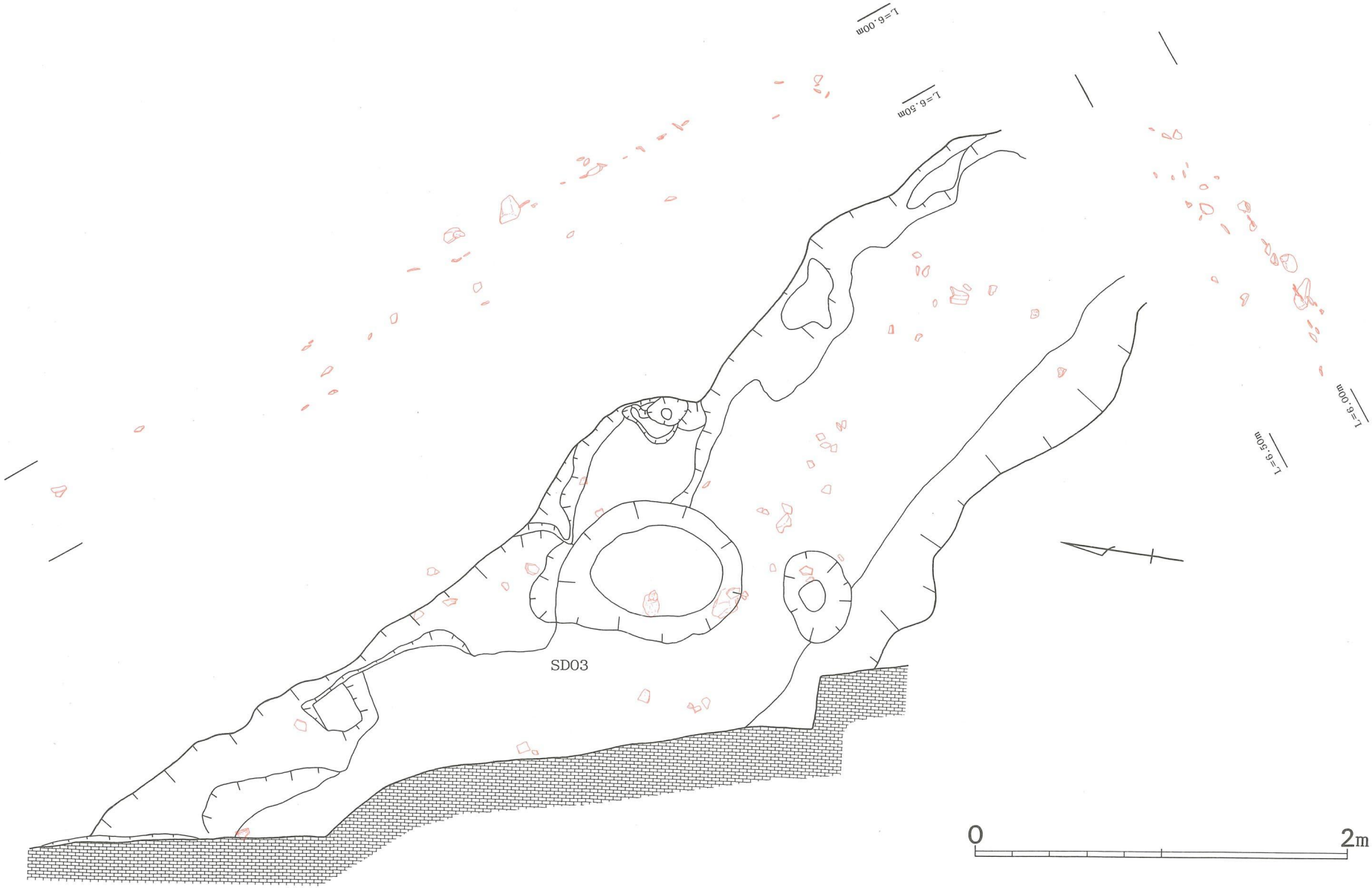
一方、遺構の北側（第29図）では標高5.8ｍから6.42ｍの範囲に遺物が認められている。南側での出土状況と比べると出土量は少ないが、位置的には平均して遺物が認められている。また、層位的には上層よりも下層から多く遺物が検出されている。

遺構の性格は判断し難いが、覆土には砂質土系の土が堆積していることから、水路のように常時水が流れていた状態とは考えにくく、空濠のような状況であったことが推測される。そして、幅が約２.０ｍと規模も大きいことから、集落を囲繞する環濠として機能していたことも考えられる。



第27図　SD03実測図

第28図　SD03遺物出土状況実測図（南側）



第29図　SD03遺物出土状況実測図（北側）

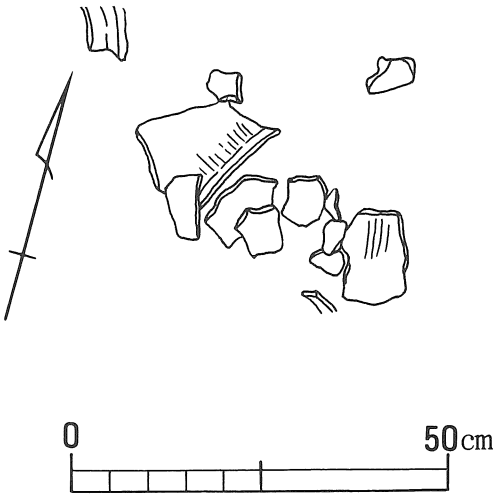
遺構が築かれた時期については、出土遺物から考えると弥生時代中期中葉頃の遺物が圧倒的に多いことから、当該期に築かれたものと考えられる。しかし、機能していた時期については、弥生時代後期の遺物が皆無であるにも関わらず、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土しており、判断し難い。推測するとすれば、弥生時代中期中葉頃に築かれた溝状遺構が後期には機能しなくなり、その後弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて再び同じ箇所を掘り直して利用されたのではないだろうか。そして、古墳時代前期中頃までには再び機能しなくなったと考えられるのではないだろうか。

土器群１（第30図）

本格的な発掘調査を開始する前に、下層からの湧水や雨水を排水するため、幅40㎝、深さ30㎝ほどの側溝を調査区の４面に掘り下げているが、南に設定した側溝から検出された土器群である。

発掘調査によって検出した遺構の配置から考えると、弥生時代中期中葉頃に築かれた遺構であるＳＤ０３と同じ方向にあり、覆土もＳＤ０３の５層と同様の粒子の粗い褐灰色土中から検出されたことから、同一の溝状遺構の一部であると考えられる。

遺物は、約50㎝×40㎝の幅の間に重なり合うような状況で２個体以上の土器が出土している。いずれも弥生時代中期中葉頃の資料であり、時期的にもＳＤ０３が築かれた時期と一致するものである。



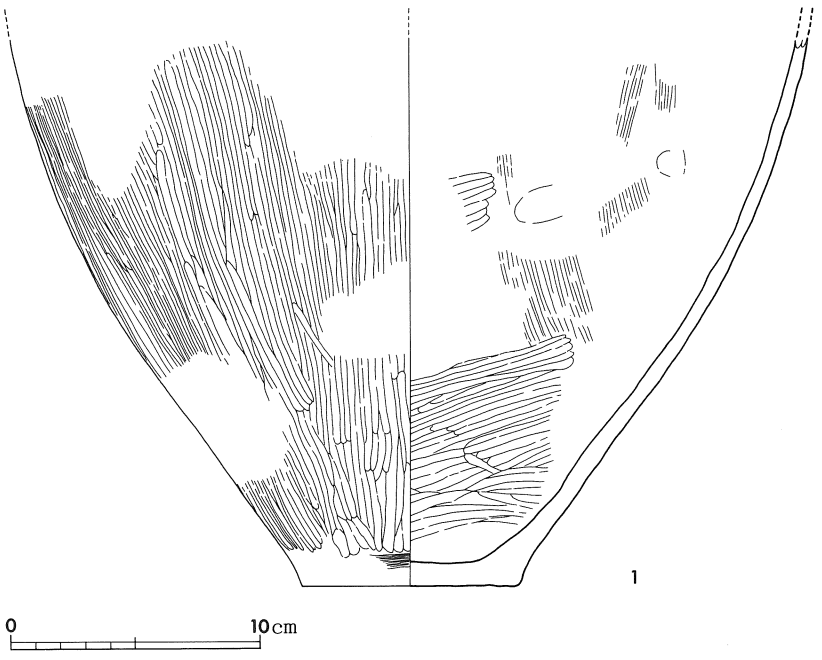
第30図　土器群1（SD03）実測図

土器群１の出土遺物

（第31図）

土器群１から出土した土器は、そのほとんどが接合可能なうえ、形態的にも特徴があって貴重な資料となっている。

１は、弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片で、底径8.6㎝、残存高22.7㎝を測る。底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、胴部付近は内湾し



第31図　土器群1（SD03）出土遺物実測図

て倒卵形になるもので、外面はタテ方向のミガキによって調整され、内面底部付近から胴部下半にかけては横方向のミガキ、胴部中央付近は斜め方向のハケによる調整が行われている。なお、外面胴部にはススが付着しており、焼成は非常に良好である。

このように内面底部から胴部にかけて、ヨコ方向のミガキによって調整されるタイプの土器は出雲地域には珍しい。ＳＤ０３の出土遺物から考えると弥生時代中期中葉頃の遺物であると考えられるが、形態的には弥生時代前期末の系譜を引くものと考えられ、やや古い様相を示すものであろう。松本編年[10]ではⅡ－１様式からⅢ－１様式の範疇に相当する資料ではないだろうか。

なお、このような形態的特徴をもつ壺あるいは甕は、松江市タテチョウ遺跡[11]、西川津遺跡[12]などで少量ながら出土している。

ＳＤ０３の出土遺物（第32図～第34図）

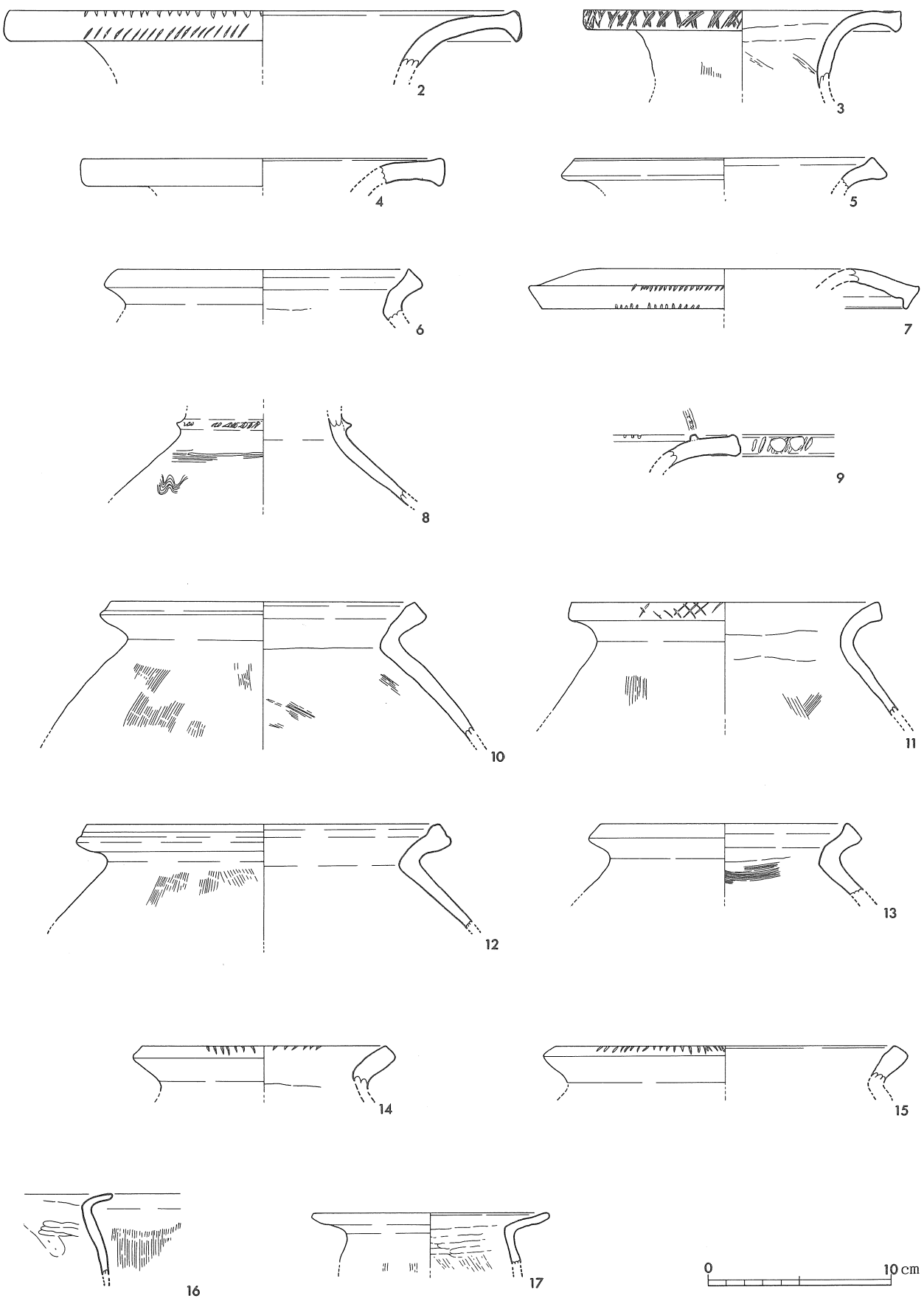
弥生時代中期中葉頃の遺物には、壺・甕がある。その中には珍しい形態的特徴をもつものも含まれており、貴重な資料となっている。

第32図－２～４・７～９は弥生土器の壺である。２は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張し、口縁端部の両端には刻目文が施されている。３は、形態的には２と同様であるが、口縁端部は２本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施している。頸部外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。４は、口縁部内外面はナデによる調整が行われ、口縁端部は無文で、上下にわずかに拡張している。７は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部の両端には刺突による刻目文が施されている。８は、壺の頸部から胴部にかけての破片であるが、外面頸部には刻目文で飾った三角形文帯を貼付け、胴部には６本単位からなるクシ状工具によって直線文・波状文が施され、内面はハケによる調整が行われている。９は、口縁端部がわずかに上下に拡張し、口縁端部を刻目文・円形浮文で飾っている。また、口縁内面には刻目文を施した三角形文帯を貼り付けている。

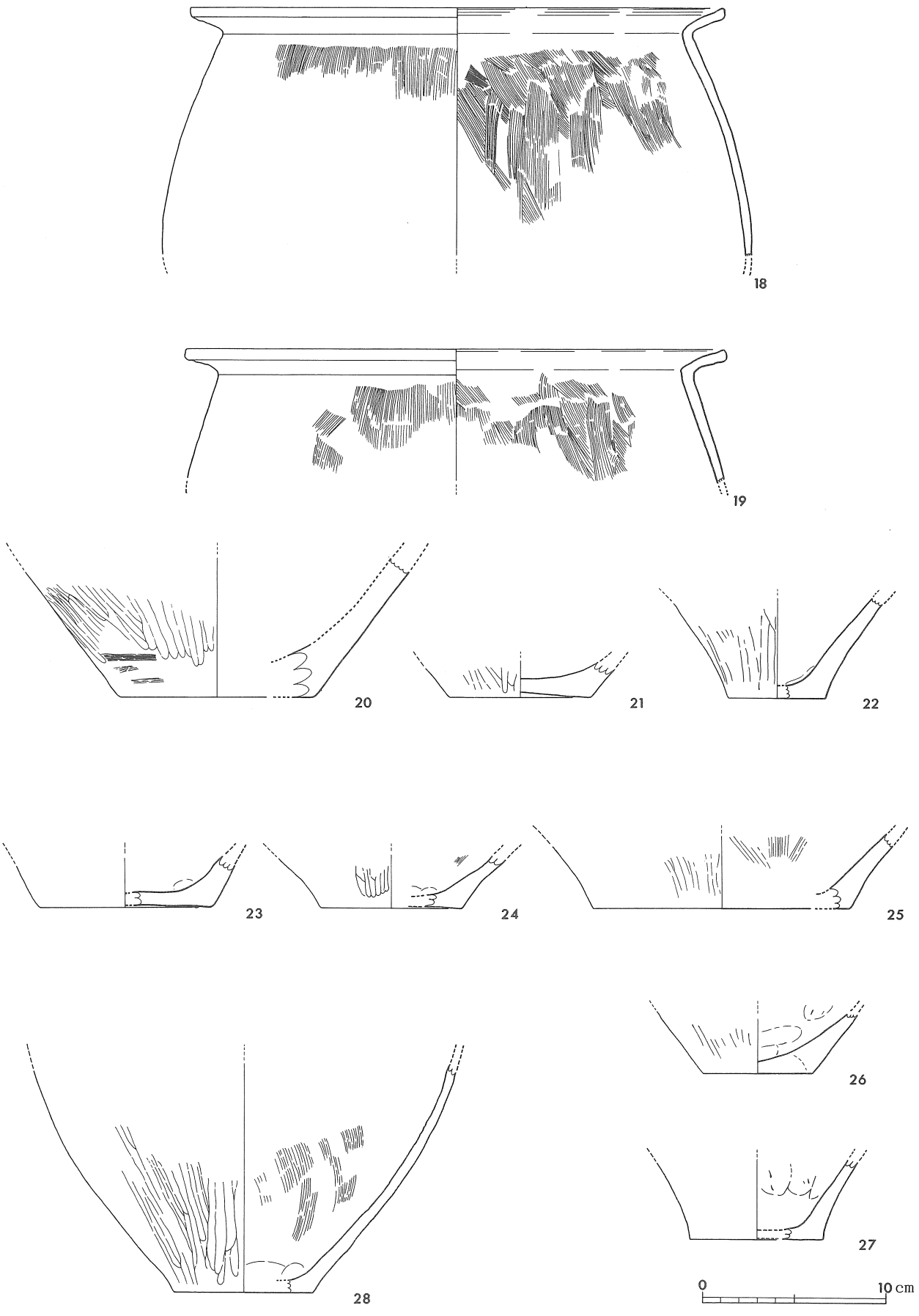
以上のような特徴をもつ壺は、おおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第32図－５・６・10～17、第33図－18・19は、弥生土器の甕である。５・６は、口縁部が外方に短く屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作っている。10も形態的にはほぼ同様であるが、外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケにより調整されている。11は、頸部から緩やかに屈折して端部に平坦面を作り、クシ状工具によって斜格子文を施している。外面頸部下は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。12・13は、口縁部が外方に強く「く」の字状に屈折し、口縁端部が上方に拡張して平坦面を作っている。12は、外面頸部下には縦方向のハケ、内面はナデによって調整され、13は内外面ともナデにより調整されている。14・15は口縁部の破片であり、いずれも口縁端部には平坦を作るがあまり拡張はしない。口縁端部の平坦面には斜線文・端部内面には刺突による刻目文が施されている。

16は、口縁部の厚みが薄く、鋭く「く」の字状に屈折して口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデにより調整されているが、外面頸部下は縦方向のハケ、内面はケズリの後、横方向



第32図　SD03出土遺物実測図(1)



第33図　SD03出土遺物実測図(2)

のミガキ・ナデによって調整されている。17も形態的にはほぼ同様であるが、内面頸部下は横方向のミガキ・斜め方向のハケによる調整が行われている。なお、外面にはススが付着している。

第33図－18・19はやや大形の甕である。18は、口縁部が外方に強く屈折して口縁端部は上方に拡張し、平坦面を作っている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。19も形態的にはほぼ同様である。18・19は胴部が張り出すタイプのものであろう。

以上のような特徴をもつ甕は、壺と同様におおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、時期としては弥生時代中期中葉のものであろう。

第33図－20～28は弥生土器の壺あるいは甕の底部付近の破片である。20は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、一部は細かいハケによって調整されている。21は、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。24は、内面底部付近に指頭圧痕が残り、一部にはハケによる調整が行われている。25も同様で、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。26・27は、内面底部から胴部にかけて縦方向のケズリによる調整が行われ、27は直立ぎみに立ち上がっている。28は、底部から胴部にかけてのやや大きめの破片であるが、外面は縦方向のミガキ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。

第34図－29は、外面は一般的な縦方向のミガキによって調整されているが、内面も横方向のミガキによる調整が行われている。30も内面の一部に斜め方向のミガキ、やや上方にハケによる調整が行われている。内面をミガキによって調整されるタイプの土器は、土器群1からも出土しているが、この時期の遺物としては珍しい。なお、30は外面にススが付着している。

以上のような壺あるいは甕は、29・30などやや古い系譜を引くものもあるものの、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

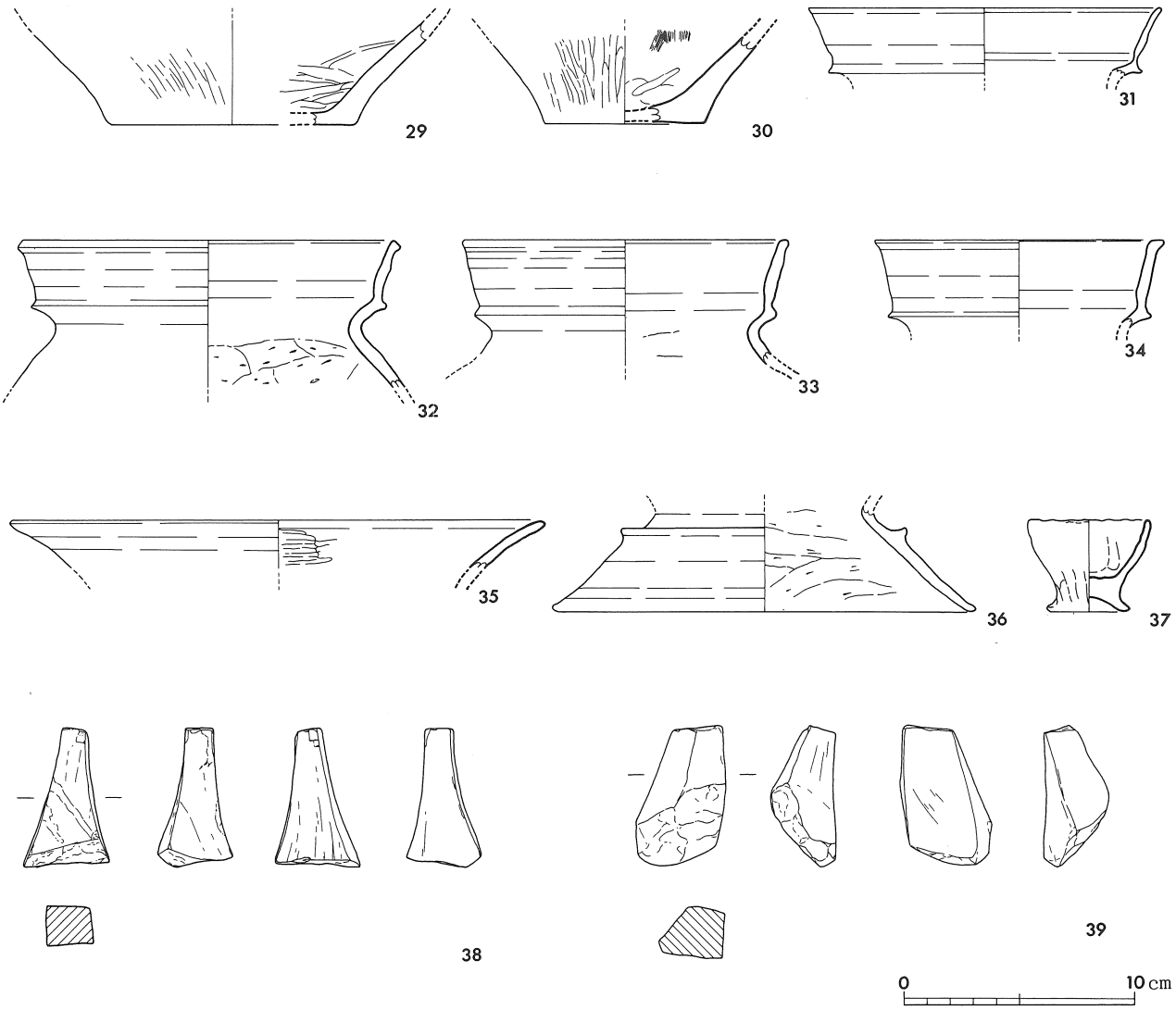
ＳＤ０３からは、前述したような弥生時代中期中葉頃の遺物のほか、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も確認されている。

第34図－31～34は、複合口縁を有す古式土師器の甕である。31は器壁が薄く、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。草田編年では5期に相当する資料であろうか。

32は器壁はやや厚く、口縁端部を外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁部の稜は水平方向に向いている。33は、口縁端部をわずかに外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁部の稜は水平方向に突出するがやや鋭さを欠く。口縁部内外面はナデによる調整が行われ、外面頸部下は横ナデ、内面はケズリにより調整されている。34も32とほぼ同様な形態をもっている。32～34の甕は、その特徴から草田編年7期に相当する資料と考えられる。

35・36は、古式土師器の器台である。35は受部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによって調整されている。36は、筒部から脚部にかけての破片である。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。

37は、ほぼ手捏ねによって仕上げられたミニチュア土器で、御猪口のような形状をしている。外面付近の一部には縦方向のミガキ、内外面全体に小さく間隔の狭い指頭圧痕が残っている。



第34図　SD03出土遺物実測図(3)

35～37については時期的判断は難しいが、ＳＤ０３から出土している古式土師器から考えると、おおよそ草田５期～７期の範疇に入る資料であり、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

38・39は砥石である。38は両端とも欠損しているが、現存長5.8㎝、最大幅3.8㎝、最大厚2.5㎝、重さ47ｇを測る。片端は使用によって厚さ1.15㎝ほどに擦り減っており、４面ともに使用痕が残っている。なお、石材には流紋岩質凝灰岩を用いている。39も両端が欠損しているが、現存長 6.0㎝、最大幅3.0㎝、最大厚2.5㎝、重さ55ｇを測る。片端は使用によって厚さ1.45㎝ほどに擦り減り、全体の５面に使用痕が残っている。38と同様に石材には流紋岩質凝灰岩を用いている。なお、砥石については時期的判断が難しい。

以上のように、ＳＤ０３からは多くの遺物を検出しており、その大半が弥生時代中期中葉頃の遺物であるが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も認められている。しかし、その間の弥生時代後期の遺物が皆無であることは、ＳＤ０３が機能していた時期を考えるうえで注視する必要がある。

ＳＤ０４（第35図）

調査区の南側、Ａ１GrからＢ３Grにかけて、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東－西北西の方向に伸びる溝状遺構である。Ａ１Grでは近世の遺構と考えられるＳＸ０１に切られ、Ｂ２Grでは弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての遺構であるＳＤ０３に切られている。また、西側は水道管・ガス管埋設のために攪乱を受けているが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、長軸10.0ｍ以上、最大幅約1.80ｍ、狭い所でも約1.52ｍを測る。なお、検出高は標高約6.30ｍである。

覆土には、上層から下層にかけて褐色系の砂質土が堆積し、最下層には灰白色のシルト質土が堆積しているが、この層位からも多くの遺物が確認されている。また、中層には炭化物のような黒色粒子を含む層や地山ブロックを含む層が部分的に認められる。なお、最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は部分的にやや異なるが、遺構の南側では東肩部は鋭角に、西肩部は約45度の角度で落ちているが、半ばあたりでなだらかな段を作って再び底面に向かって鋭角に落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。一方、遺構の北側では、東肩部はやや鋭角に落ちて一旦平坦面を作り、再び底面に向かって鋭角に落ちているが、西肩部からは約30度の角度で落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは約52㎝、浅い所でも約36㎝の深さがある。

全体の形状は、遺構の南側と北側付近で溝の幅が広くなっており、Ａ２Gr付近ではやや狭くなっている。なお、Ａ２Gr北側からＢ３GrにかけてはＳＤ０３によって切られているため、遺構上面における形状は判断できない。

遺物の出土状況をみると、遺構の南側（第36図）では標高6.00ｍから6.50ｍの範囲に遺物が認められる。層位的には上層よりも中層・下層から多くの遺物が出土しており、位置的にはほぼ平均して遺物が認められている。

一方、遺構の北側（第37図）では標高5.82ｍから6.68ｍの範囲で遺物が認められている。南側と比較するとＳＤ０３によって切られていることもあるが、総じて出土量は少なく、層位的には中層から下層にかけての出土量が多く、位置的にはほぼ平均して遺物が認められている。

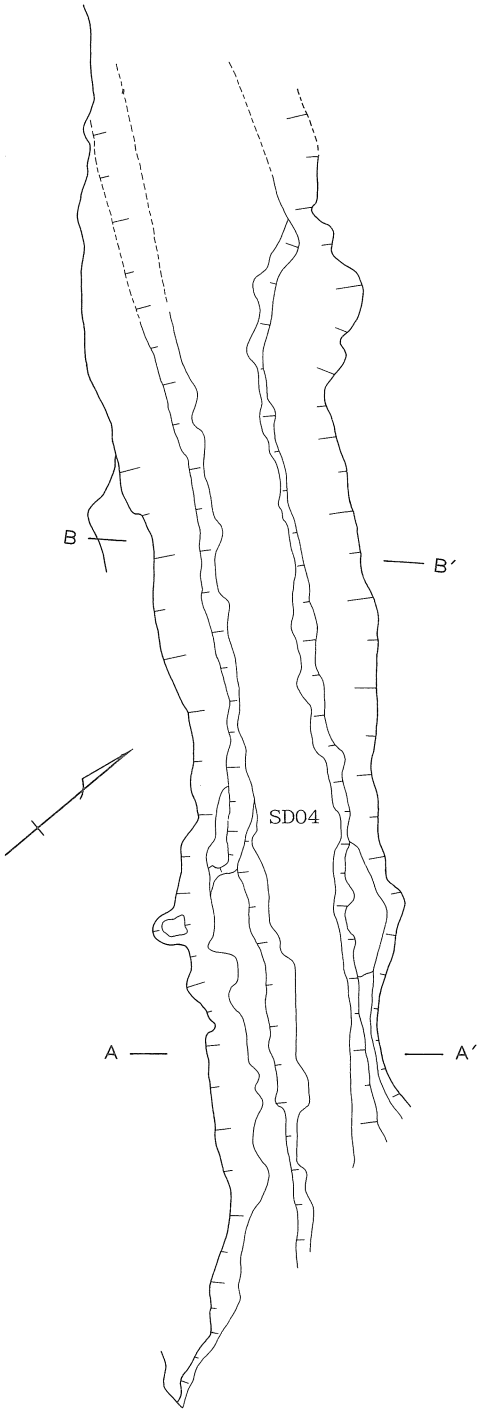
遺構の性格は判断し難いが、前述したＳＤ０３と同様に覆土には砂質系土が堆積していることから、水路のように常時水が流れていた状態とは考えにくく、空濠のような状況であったと考えられる。そして、幅が約1.8ｍと規模も大きいことから、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性も考えられる。

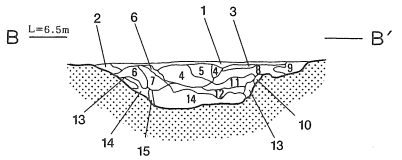
遺構が築かれた時期については、出土遺物には弥生時代中期頃の遺物しか認められていないことから、当該期に築かれ、機能していた期間も比較的短期間であったものと考えられる。

ＳＤ０４の出土遺物（第38図～第41図）

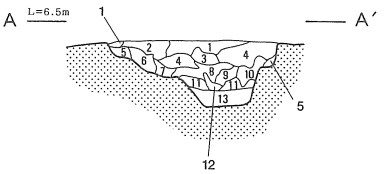
ＳＤ０４からは弥生時代中期中葉頃と考えられる遺物のみが出土しており、その中には弥生土器の壺・甕・鉢や石器が出土している。

第38図－１～８は、弥生土器の壺である。１は、口縁部が短く外反し、口縁端部はわずかに拡張するが無文である。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。２は、



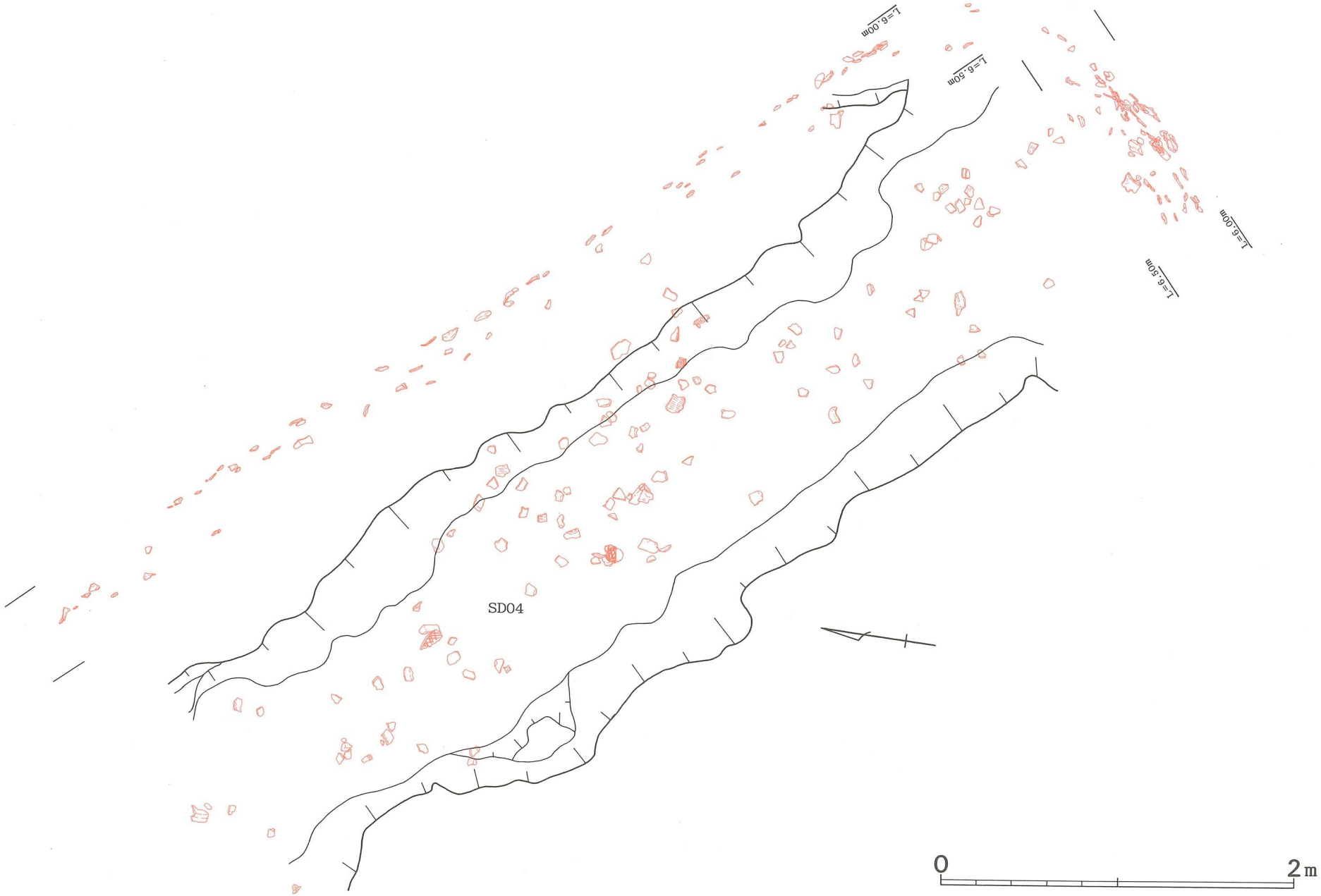


1.暗褐色土
2.黄褐色砂質土
3.褐灰色土
4.明褐色砂質土　褐色粒子を含む
5.黒褐色土　黒色粒子を多く含む
6.灰褐色砂質土　粒子やや粗い
7.灰黄褐色土
8.褐色土　粒子細かい
9.黒色土　地山ブロック含む
10.黒色土　ブロック混入
11.褐色砂質土　粒子やや細かい
12.黄褐色砂質土　地山ブロック含む
13.褐色砂質土　地山ブロック含む
14.灰白色砂層　粒子やや粗い
15.褐色砂質土　粒子粗い

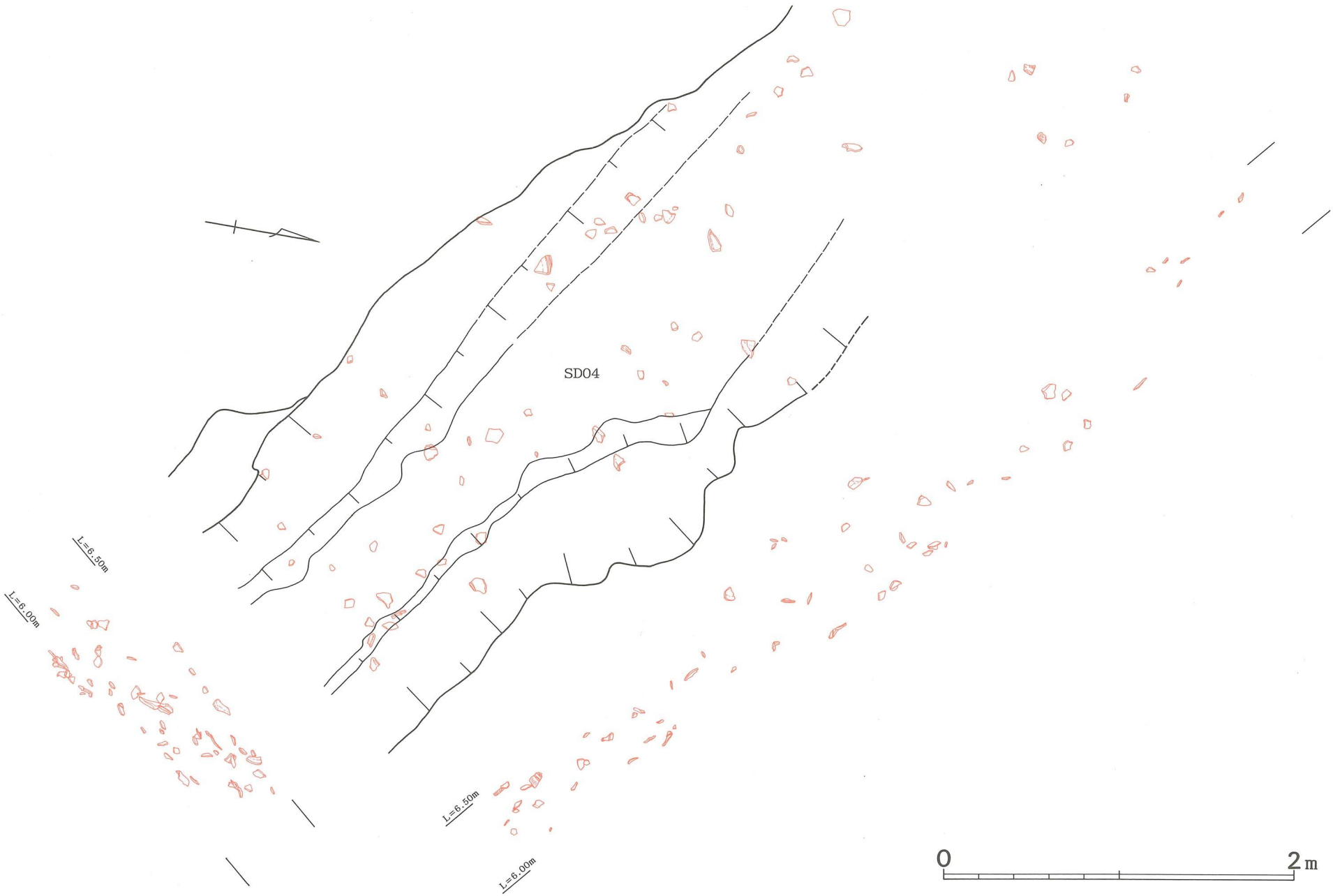


1.暗褐色砂質土
2.褐色砂質土
3.明褐色砂質土　褐色粒子を含む
4.にぶい褐色砂質土
5.黄褐色砂質土　地山ブロック含む
6.明褐色砂質土
7.灰褐色砂質土
8.褐灰色砂質土　黒色粒子を含む
9.褐灰色砂層
10.黒褐色砂質土　黒色粒子を含む
11.灰白色砂層　粒子やや粗い
12.黄灰色砂層　粒子非常に細かい
13.灰白色砂層　粒子細かい

第35図　SD04実測図



第36図　SD04遺物出土状況実測図（南側）



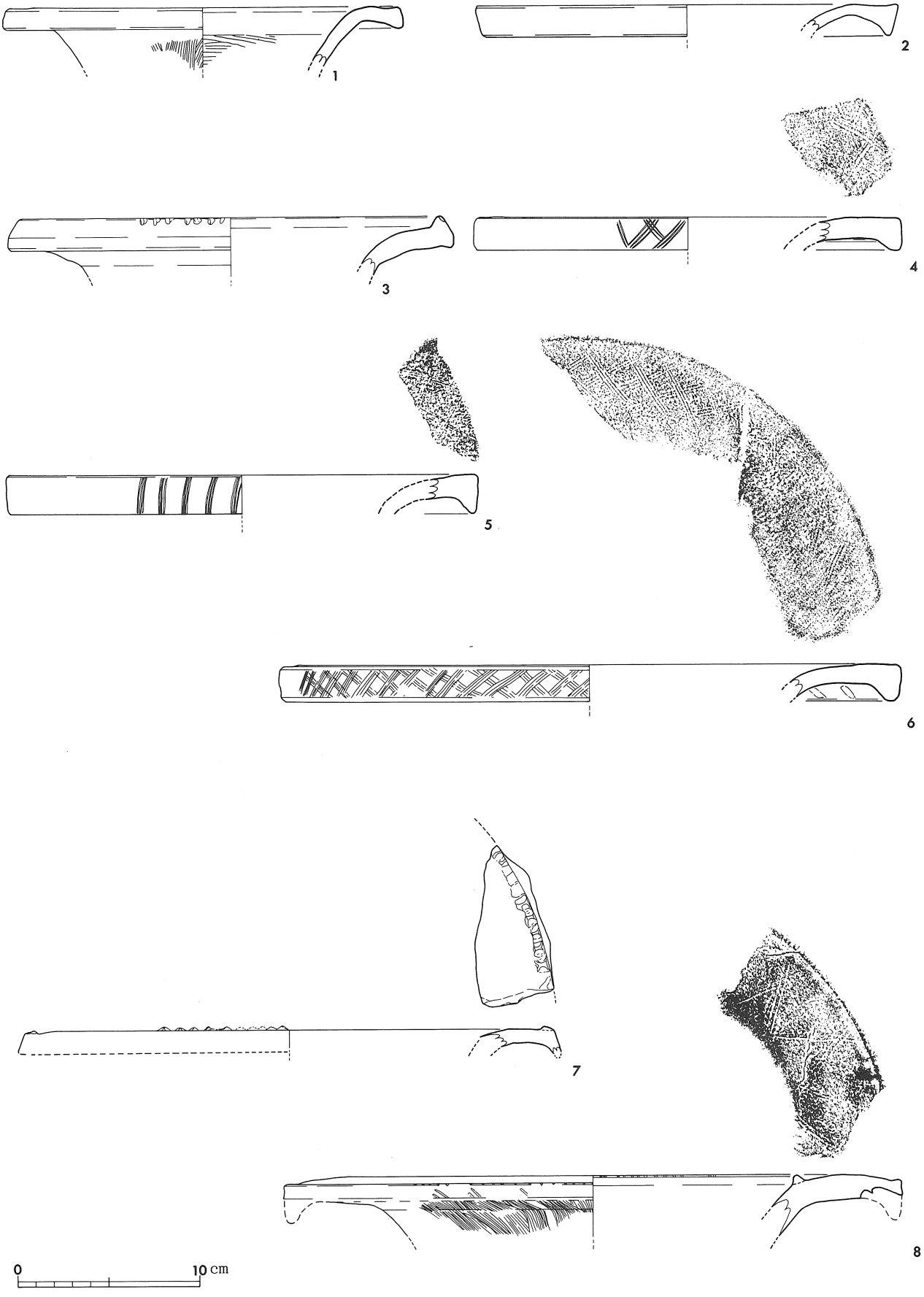
第37図　SD04遺物出土状況実測図（北側）

口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下にわずかに拡張するが無文である。3は、口縁部が短く外反し、口縁端部が上方に拡張して端部上方には刺突による刻目文を施している。このようなタイプの土器は、出雲地域ではあまり類例がない。4は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部の内外面には3本単位のクシ状工具により斜格子文を施している。5も口縁端部は下方にのみ拡張し、口縁端部には3本単位のクシ状工具による斜格子文、内面にも斜格子文を施している。6は、口径34.0㎝を測る大形品であるが、口縁部は朝顔状に大きく開き、口縁端部は下方にのみ拡張している。口縁拡張部の内外面には3本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施し、内面にはさらに刺突による列点文が3列にめぐらされている。また、下方に拡張する口縁端部と頸部外面との境には指頭圧痕が明瞭に残っている。7は、朝顔状に開いた口縁部をもち、口縁端部の上方に指頭圧痕文帯を貼付け、口縁端部を上下に拡張させている。8は、朝顔状に開く口縁部に上下に拡張する口縁端部を有し、口縁拡張部の内外面には2本単位のクシ状工具によって斜格子文が施されている。また、口縁端部上方には刺突による刻目文、さらには内面に刻目文を施した三角形文帯を貼付けて飾っている。なお、頸部外面は縦方向のハケによる調整が行われている。

第39図－9は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張するが無文である。頸部外面は縦方向のハケ、内面には指頭圧痕が明瞭に残っている。第38図－3と同様に出雲地域では珍しいタイプのものである。10は、わずかに外傾して伸びる長めの口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張している。口縁端部の両端からは貝殻による刻目文を施して「く」の字状の文様を作り出し、さらに円形浮文を貼付けている。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のミガキによって調整されている。11・12は、壺の頸部から胴部にかけての破片である。11は、頸部に指頭圧痕文帯をめぐらし、外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整によって仕上げられている。12は、頸部に2以上の三角形貼付文帯をめぐらし、外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。この時期の壺は、指頭圧痕文帯や三角形文帯を貼付け、頸部と胴部には明瞭な境をもっていることが一つの特徴である。

以上のような壺は、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。しかし、これらの中には、出雲地域では類例の少ない第38図－3のような遺物が認められることは、今後も注視していく必要がある。また、当該期の天神遺跡から出土している壺の口縁部には、第38図－4・6・8のように斜格子文を施す例が圧倒的に多く、一つの地域性として「天神式」とでも呼称されるべきものではないだろうか。

第39図－13～22は、弥生土器の甕である。13は、口縁部がゆるく「く」の字状に外方に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して平坦面を作り、ヘラ状工具によって刻目文を施している。口縁部は内外面ナデ、外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。14は、口縁部は13と同様に外方に屈折し、口縁端部に平坦面を作り出しているが拡張せず、無文である。頸部下の内外面には斜め方向のハケによる調整が行われている。15は、口縁端部がわずかに上下に拡張し、頸部下の内外面は縦方向のハケによって調整されている。16は、口縁部が鋭く屈折し、口縁端部は上下に拡張するが、特に上方に大きく拡張している。外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。17は、口縁部が外方に屈折し、口縁端部は上下に拡張す



第38図　SD04出土遺物実測図(1)

るが、拡張は上方により大きい。18は、口縁部が外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部は拡張しない。19は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。20は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面はナデによる調整が行われ、内面には凹線文状の凹みが認められる。21は、口縁部が外方に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。22は、甕の口縁部の小片であるが、器壁がやや厚く、口縁端部は拡張しない。

第40図－23～28も弥生土器の甕である。23は口縁部は外方に「く」の字状に屈折して口縁端部は拡張せず、やや丸くおさめている。頸部下外面はススの付着により調整不明であるが、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。24も形態的にはほぼ同じで、頸部下の外面は縦方向のハケ、内面はミガキによる調整が行われているようである。25は、口縁部は外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張するが平坦面は作らず、丸くおさめている。頸部下外面は斜め方向の細かいハケ、内面はやや間隔の広い斜め方向のハケによって調整されている。また、外面にはススが付着している。26は、壺のように口縁部が長く外方に開くが器壁は薄く、口縁端部は拡張せず丸くおさめている。27・28は甕の口縁部の小片であるが、口縁端部はやや上方に拡張するという特徴をもつ。

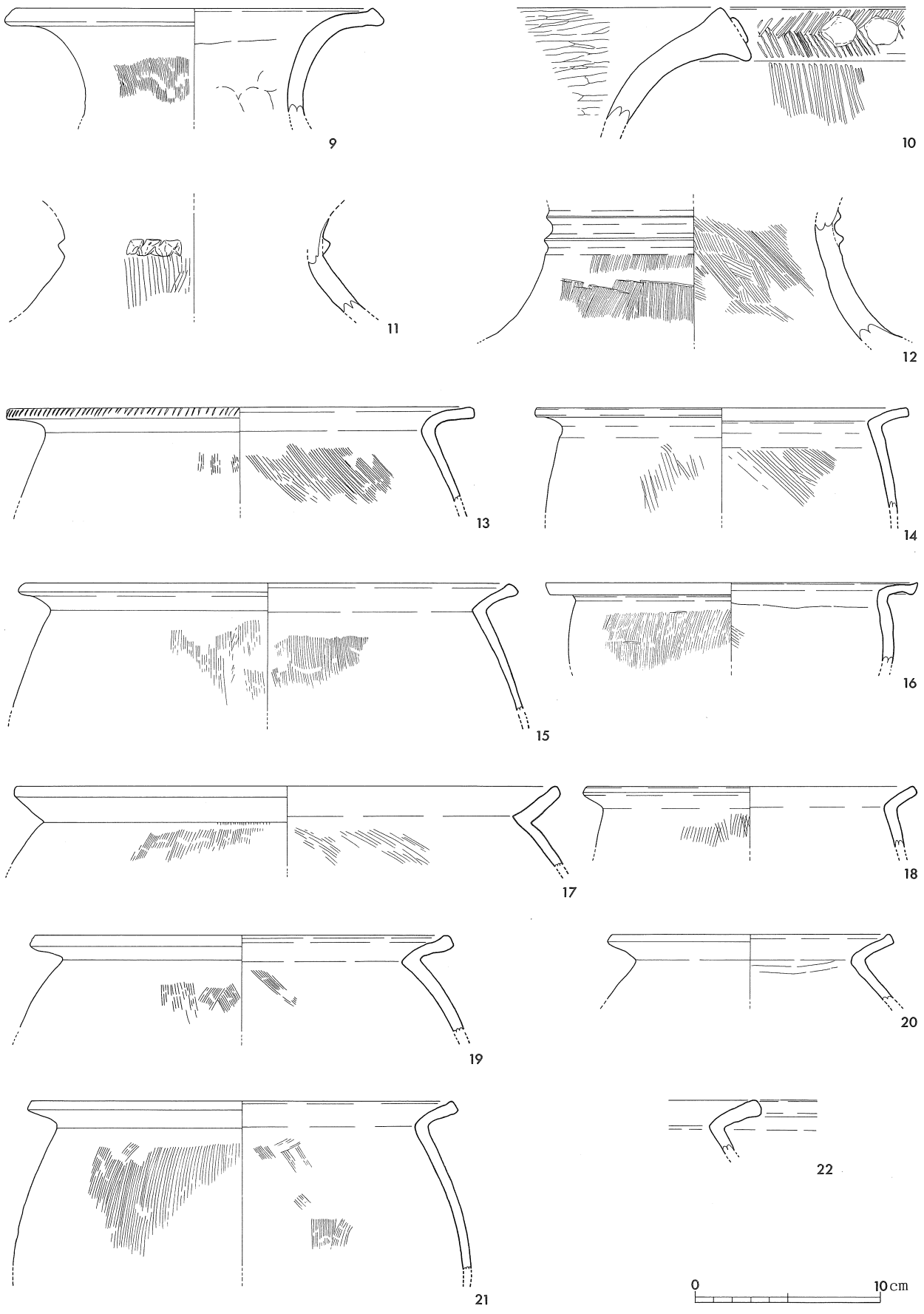
以上のような甕は、口縁端部が上下に拡張するものや上方のみに拡張するもの、拡張しないものなどがある。また、端部に平坦面を作るもの、丸くおさめるものなど様々な形態的特徴をもつものもあるが、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第40図－29は、弥生土器の鉢であろうか。口縁端部にフラットな面を作り、外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。ＳＤ０４から出土している壺・甕の形態から考えると、松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料であろう。

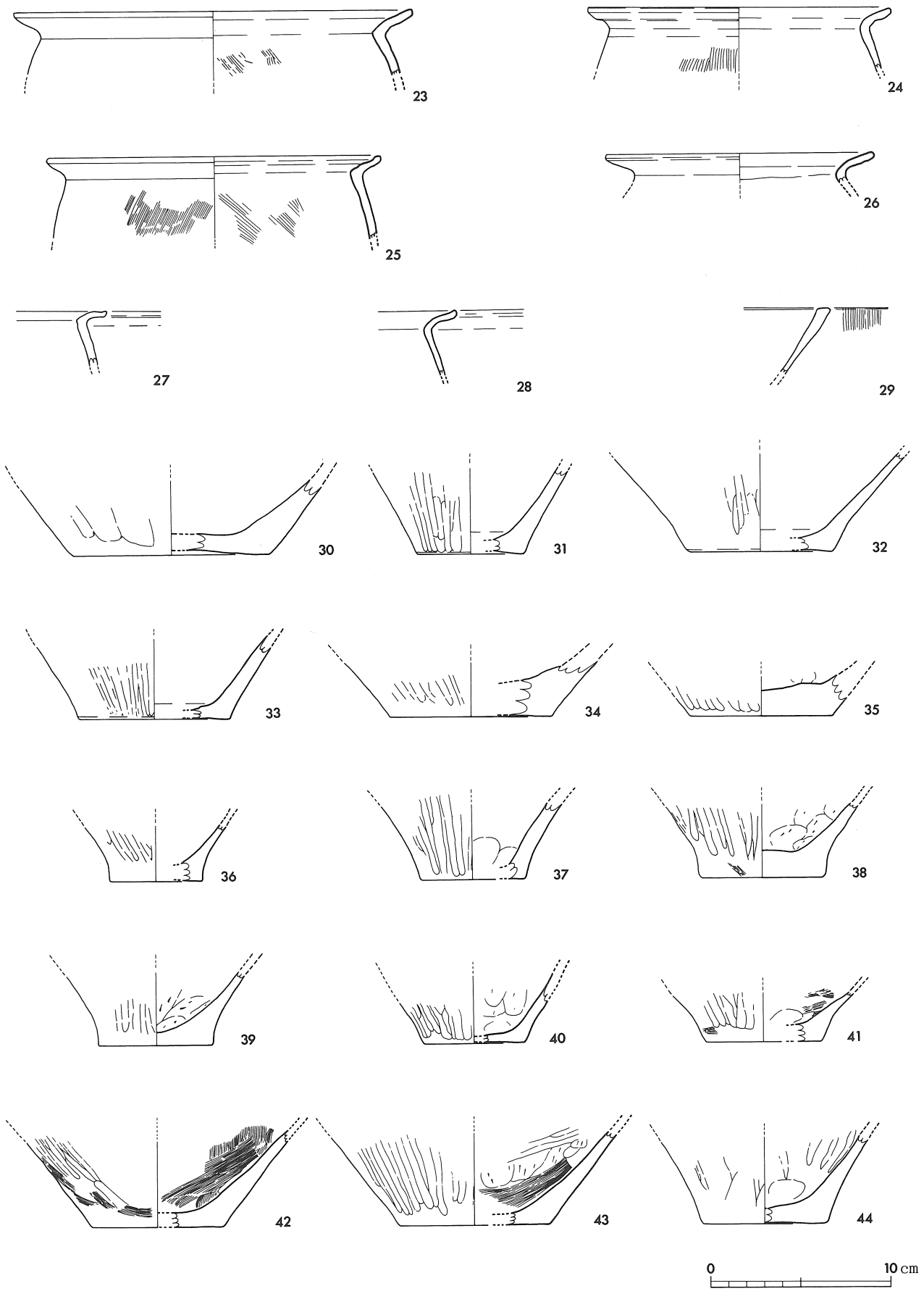
第40図－30～44は、弥生土器の壺あるいは甕の底部である。30は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面には約2㎝幅のヘラ状工具によって押さえたような痕跡が残っている。31は、底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整されている。この時期の壺あるいは甕の底部から胴部にかけては、外面が縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われるのが一般的である。32～37についても同様であるが、35・37は内面底部付近には指頭圧痕が明瞭に残っている。また、36・37は底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。38は、底径6.7㎝を測る壺あるいは甕の底部である。外面は縦方向のミガキと一部には細かいハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、底部には長さ5㎜、幅2㎜程度の籾のような痕跡が残っており、注意される。出雲平野では未だ確実な弥生時代の水田跡は検出されてはいないが、第7次発掘調査[13]Ｃ区から出土した木製農耕具などとともに、遺跡内で稲作が行われていたことを証明する一資料である。

39・40は、外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のケズリによって調整されている。内面がナデによって調整されているものと比較し、時期的にはやや後出するものであろう。

41は、外面は縦方向のミガキと一部には横方向のハケ、内面の一部にも横方向のハケ調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。42は、外面を縦方向のミガキにより調整した後、一

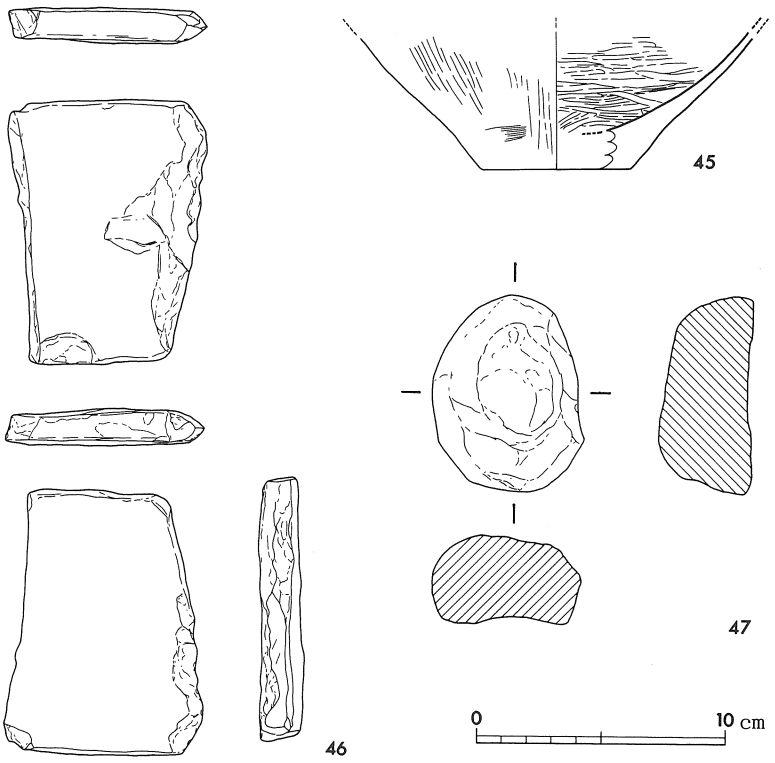


第39図　SD04出土遺物実測図(2)



第40図　SD04出土遺物実測図(3)

部をハケで消している。内面は全面にやや粗いハケによる調整が行われている。43は、外面は一般的な縦方向のミガキにより調整されているが、内面はケズリによる調整が行われた後、横方向のミガキがなされ、さらに一部にはハケによる調整が行われている。44は、外面は縦方向のミガキ、内面は刺突具で突いたような調整が行われ、剣状の文様を作り出している。このような土器は、後述するＳＤ０９からも出土している。



第41図　SD04出土遺物実測図(4)

第41図－45も弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片であるが、形態的には非常に珍しい特徴をもつ。外面は、一般的な縦方向のミガキと一部には横方向のハケによって調整されているが、内面は丁寧な横方向のミガキによって調整されている。なお、このような特徴をもつ土器はＳＤ０３（第31図－１、第34図－29・30）からも出土している。

以上のように、壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片には、様々なバリエーションがあるが、ＳＤ０４から出土している壺や甕の形態から考えると、おおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。このうち、内面が横方向のミガキによって調整されるものはやや古い様相を示し、ケズリによって調整されているものはやや後出するものと考えられる。

ＳＤ０４からは、弥生時代中期中葉頃の石器も数点出土している。46は片端が欠損しているが、最大長7.2㎝以上、最大幅10.0㎝、最大厚1.35㎝、重さ161ｇを測る。両面ともに磨かれ、側面は面取りされている。また、片端には刃部を削り出そうとしたような痕跡があり、それ以外の部分は側面同様に面取りされた部分が残っている。用途は不明であるが、製品を転用しようとした未成品である可能性もあろう。なお、石材には頁岩を用いている。

47は、最大長7.8㎝、最大幅5.85㎝を測り、平面的には楕円形を呈し、最大厚3.50㎝、重さ302ｇを測る石製品である。片面は割って平坦に作り出し、上面は円球状に形を整えている。また、円球状に加工した面には数箇所に打痕が認められ、赤く染まった部分が認められる。鑑定に出してはいないが、朱を擦りつぶしたものとも考えられ、注目すべき遺物である。

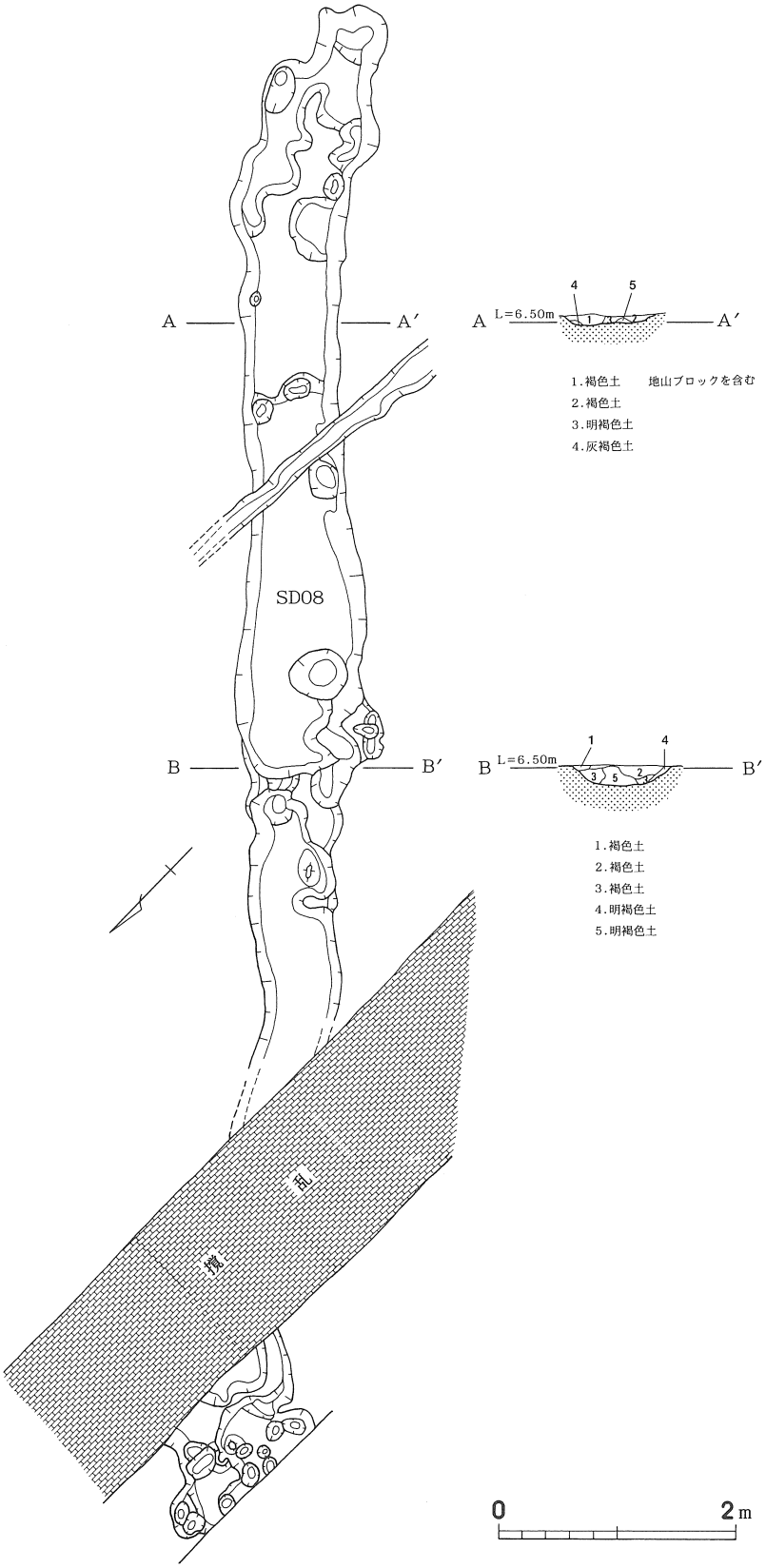
以上のように、ＳＤ０４からは多くの遺物が出土しているが、その中には出雲地域では珍しい形態的特徴をもつものがある。しかしながら、時期的には総じて弥生時代中期中葉頃に相当する資料と言

える。

ＳＤ０８（第42図）

調査区のやや北側、Ａ５GrからＢ７Grにかけて黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東－西北西の方向に伸びる溝状遺構である。Ａ５GrではＳＤ０８よりも新しい時期の遺構であるＳＤ０７によって一部が切られ、Ｂ７Grでは水道管埋設のために攪乱を受け、北側は調査区外へと伸びている。また、遺構の南側は途中で切れているが、これは上面が何度かの削平を受けているものと考えられ、本来はもう少し長く伸びていた可能性が強い。特に５Gr以北では、削平された面が大きく、遺構の底部が部分的に残るような状況であった。検出した状況では、長軸12.6ｍ以上、最大幅1.2ｍ、狭い所でも約80㎝を測る。なお、検出高は標高約6.54ｍであり、黄褐色シルト質土（地山）は、５Gr以北では約20㎝ほど高くなっている。

覆土には、褐色土や明褐色土・灰褐色土など腐食系の土が堆積し、最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は、両肩からやや緩やかに落ち、底面はレンズ状に丸く作り出している。なお、遺構の南側では削平された部分が大きく、深さは約10㎝と浅いが、残



第42図　SD08実測図

存状態のやや良好な北側では約20㎝の深さがある。

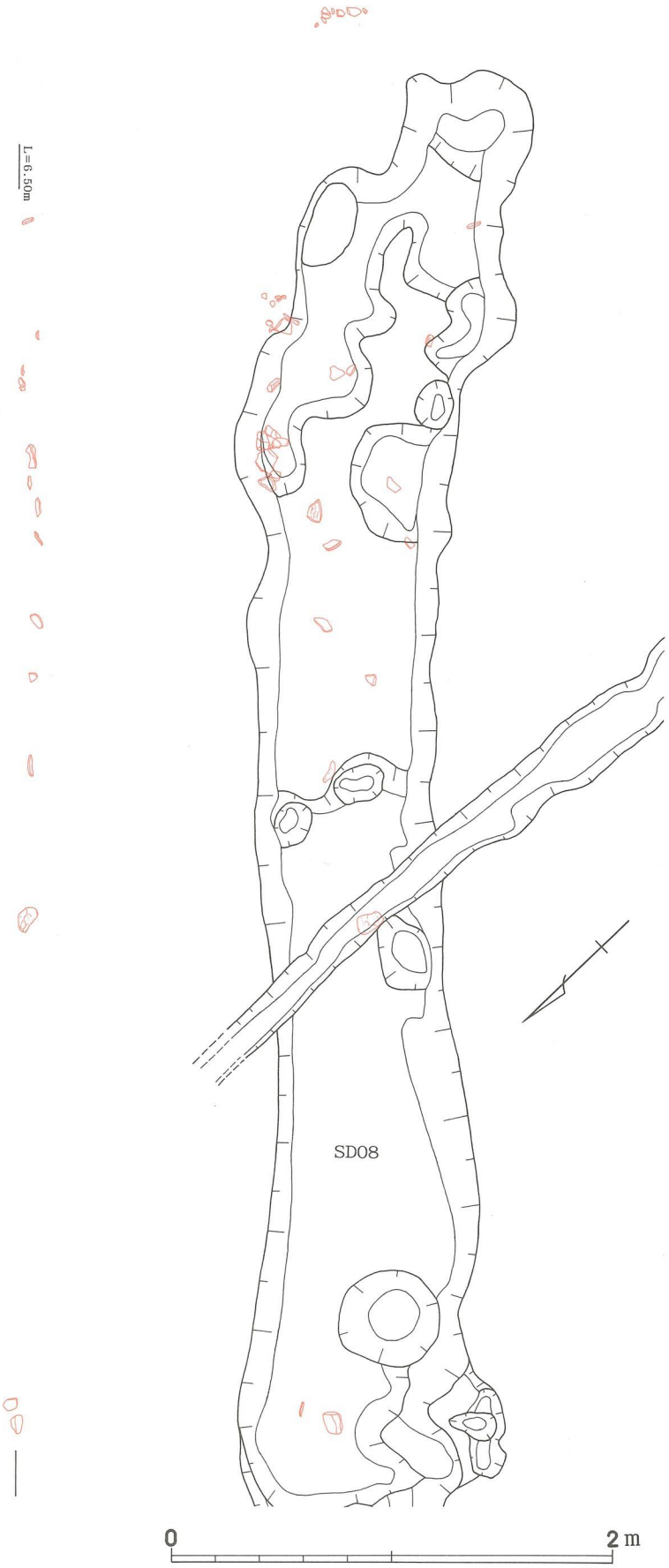
全体の形状は、Ｂ６Gr付近でやや幅が狭くなるものの、ほぼ一様である。しかし、溝の底部はピット状に掘り込またり、高まりとなっている箇所があるなど不均一である。

遺物の出土状況をみると、遺構の南側（第43図）では標高6.42ｍから6.78ｍの範囲で遺物が認められる。層位的には上層から多く遺物が出土しているが、大きく削平を受けていると考えられることから、一概には言及できない。また、位置的には南側に集中して遺物が認められている。

一方、遺構の北側（第44図）では標高6.30ｍから6.50ｍの範囲に遺物が認められる。層位的には下層から多くの遺物が出土しており、位置的にみると北側に遺物が集中している傾向にある。

遺構の性格は、上部が削平を受けていると考えられることから判断し難い。しかし、底面にはピット状に掘り込まれた箇所や高まりなどがあり、ＳＤ０３やＳＤ０４で示唆した環濠のような施設とは考えにくい。

遺構が築かれた時期については、ＳＤ０８の出土遺物には弥生時代中期中葉の遺物のみが認められていることから、当該期



第43図　SD08遺物出土状況実測図（南側）

に築かれ、機能していた期間も比較的短期間であったものと考えられる。

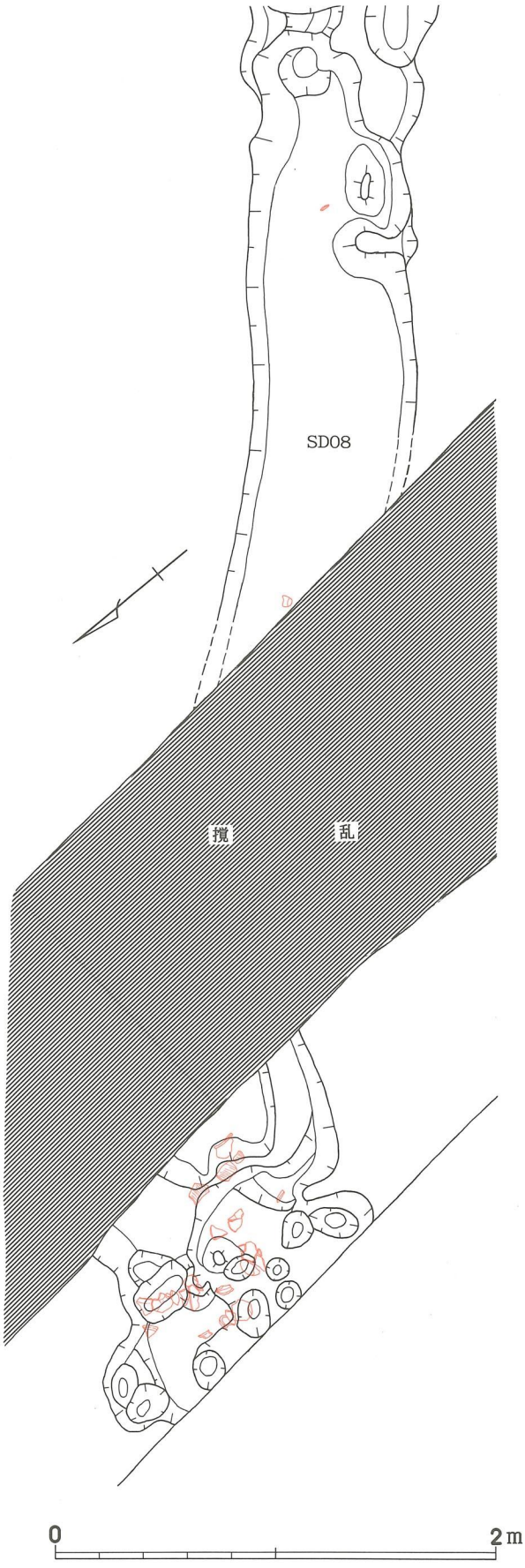
ＳＤ０８の出土遺物（第45図）

ＳＤ０８からは、弥生土器の壺・甕・高坏が出土しており、これら全てが弥生時代中期中葉頃の遺物と考えられる。

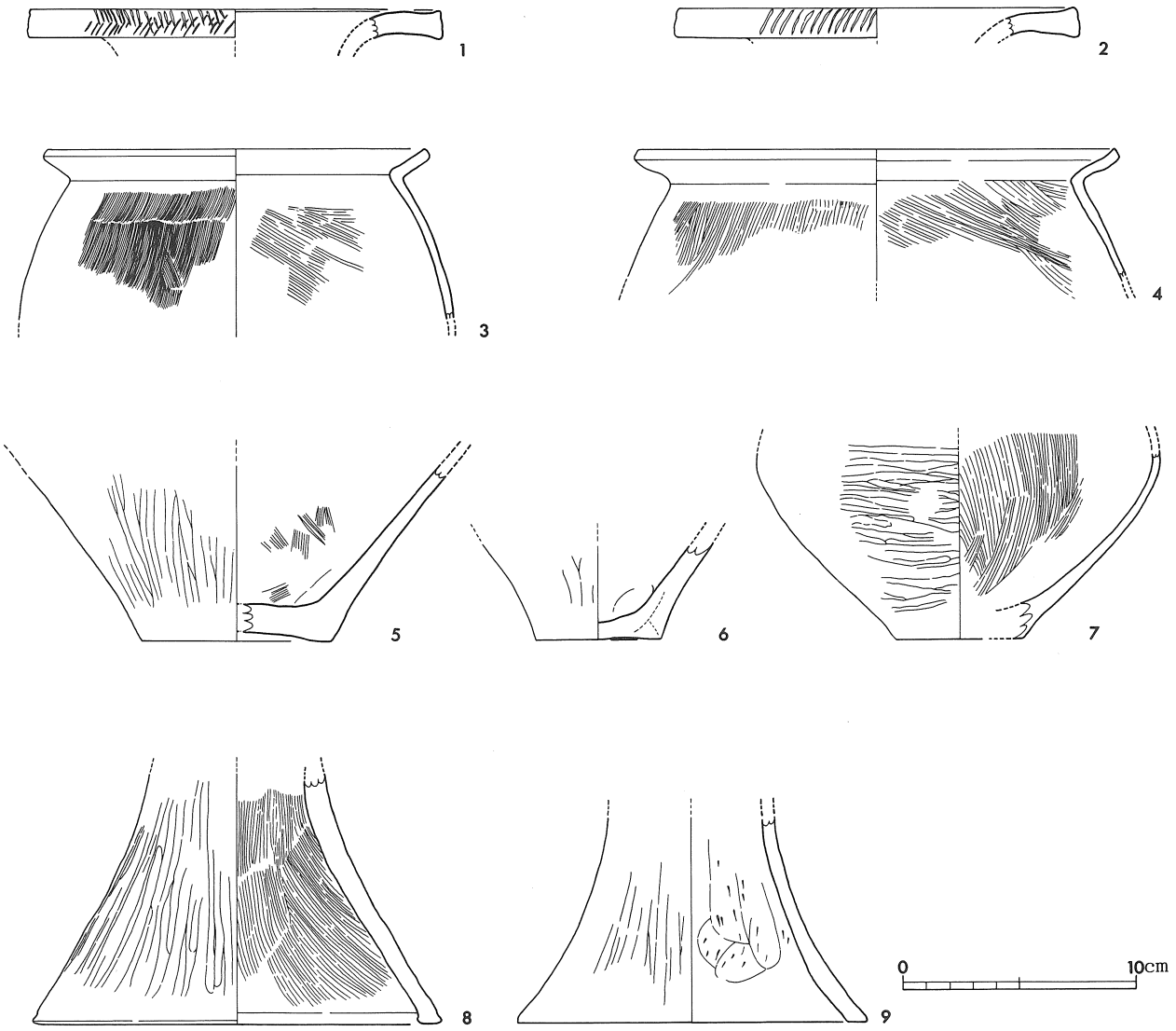
第45図－１・２は、弥生土器の壺である。１は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張している。口縁拡張部の平坦面には両端から互い違いの方向に貝殻による刻目文を施し、「く」の字状の文様を作り出している。２も１と同様に口縁部が大きく朝顔状に開くもので、口縁端部はわずかに上下に拡張し、拡張部には貝殻による刻目文がめぐらされている。これらの壺は、おおよそ松本編年Ⅲ－１様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉でもやや古い様相を示す資料であろう。

３・４は、弥生土器の甕である。３は、口径16.3㎝を測り、口縁部が外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して平坦面を作り出している。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われており、外面胴部から口縁部にかけてススが付着している。４は、口径20.4㎝を測り、口縁部は外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。３と同様に頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整され、口縁部外面にはススが付着している。以上のような甕は、壺と同様に松本編年Ⅲ－１様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

５～７は、弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。５は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケによって調整さ



第44図　SD08遺物出土状況実測図（北側）



第45図　SD08出土遺物実測図

れ、内面底部付近には指頭圧痕が明瞭に残っている。６は、５と比べると底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が認められる。７は、外面が横方向のミガキによって調整されるという特異な土器である。内面はハケによって調整され、胴部は強く張り出している。このようなタイプの土器は、弥生時代前期には認められるものであるが、中期には出雲地域では珍しく、松江市布田遺跡[14]などでわずかに出土しているにすぎない。これらの土器からは、時期的判断はし難いが、内面にケズリによる調整が認められず、ＳＤ０８から出土している壺や甕の形態的特徴を考えると、松本編年Ⅲ－１様式に相当する資料と考えられよう。

８・９は、弥生土器高坏の脚部である。８は、脚部は末広がりになり、端部は内外にやや拡張してフラットな面を作り出している。脚部外面は縦方向の丁寧なミガキ、内面はやや粗いハケにより調整されている。９は風化が著しいが、脚部は末広がりになり、端部にフラットな面を作り出す。脚部外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。これらの高坏のように脚端部にフラットな面をもつものは珍しいが、天神遺跡からは第５次発掘調査[15]においても同タイプのものが出土し

ており、地域的な特徴の一つと考えられる。

ＳＤ０９（第46図）

調査区のやや南側、Ａ２Gr～Ｂ３Grにかけて黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東－西北西の方向に伸びる溝状遺構である。Ａ３GrとＢ３Grにかけては古代の遺構であるＳＤ０５・ＳＫ０３・ＳＫ０６、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭にかけての遺構と考えられるＳＤ１０・ＳＸ０６に切られている。また、西側は水道管、ガス管埋設のために大きく攪乱を受けているが、東西とも調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、長軸10.0ｍ以上、最大幅5.52ｍ、狭い所でも5.08ｍを測る。なお、検出高は標高約6.30ｍである。

覆土は、上層から下層にかけて複雑な堆積を示している。上層には灰白色・褐色・暗褐色などの砂質土が堆積しているが、ブロック的に灰色・黒褐色の粘質土を含んでいる。また、28層から31層にかけては覆土の中でも切合関係をもち、他の覆土よりも古いものと考えられる。中層にも明褐色・灰白色・赤褐色などの砂質土と灰色・黒褐色・明灰色などの粘質土が互層状に複雑に堆積し、この中には褐色粒子や黒色土ブロックを含む層が認められる。下層も基本的には砂質土と粘質土の混合層ではあるが、最下層には灰褐色・明褐色の砂層が堆積し、最深部は灰白色粗砂層にまで達し、この層位からはかなりの湧水がある。

断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて一旦平坦な面を作り出し、そこからなだらかに落ちてもう一度平坦面を作り出してさらに最深部へ向かって落ちている。底面の幅は約80㎝を測り、ほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは約1.0ｍ、浅い所でも92㎝の深さがある。

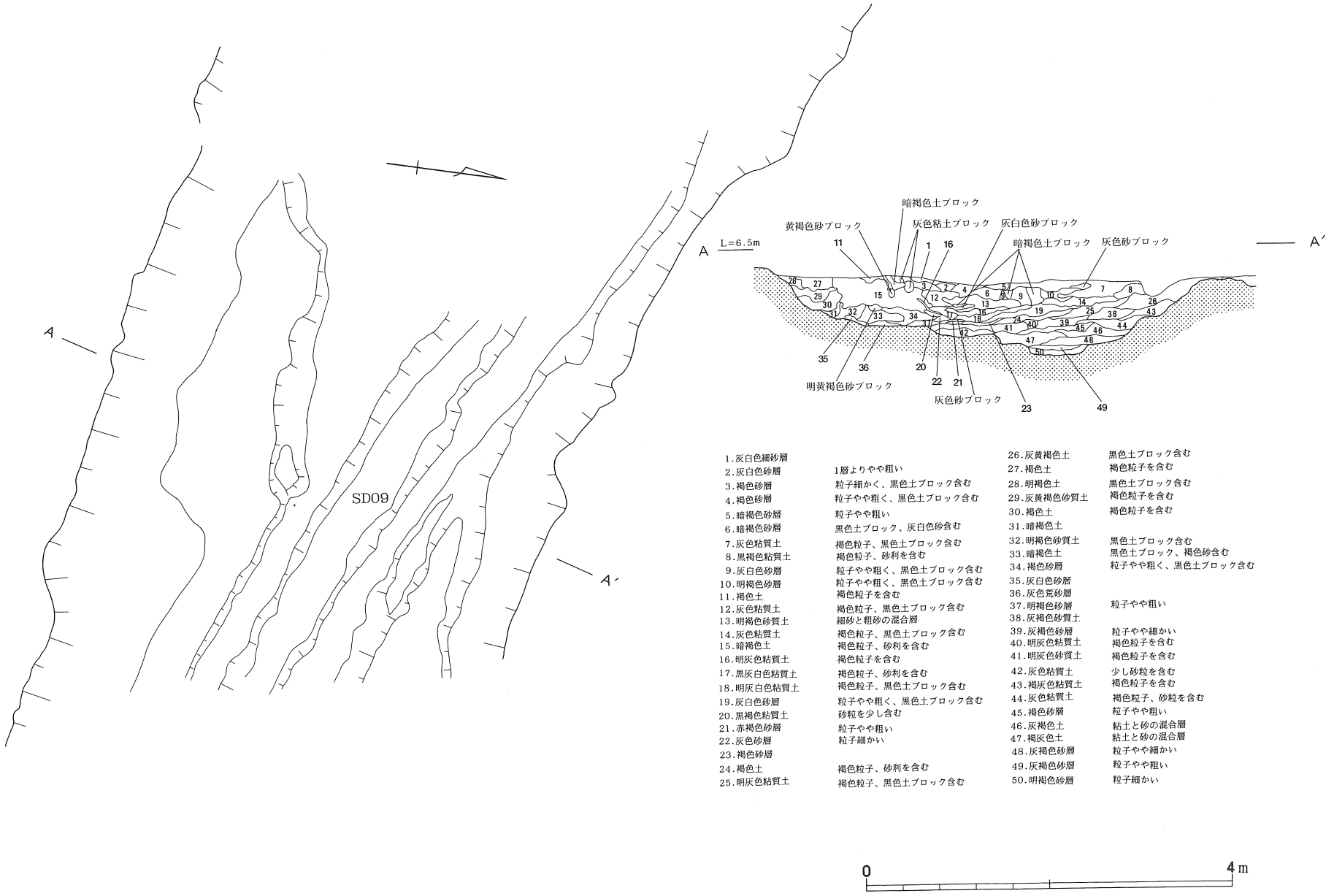
全体の形状は、遺構の西側が新しい時期の遺構によって切られているため、一概には言えないが、東側では南肩部から落ちた平坦な面が広く、西肩部から落ちた平坦面がやや狭くなっている。なお、上部の溝の幅はほぼ一様な広さを有している。

遺物の出土状況をみると（第47図）、標高5.34ｍから6.32ｍの範囲に遺物が認められている。位置的には遺構の東側・南側で遺物の出土量が多い傾向にある。しかし、これは西側が古代の遺構であるＳＫ０６によって大きく切られているためであり、実際にはＳＫ０６の最下層からは多くの弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土しており、これはＳＤ０９に伴うものと考えられる。また、層位的にみると、上層よりも中層・下層からの出土量が多い。

遺構の性格は判断し難いが、覆土には砂質土と粘質土が互層状に堆積していることから、ある程度の水の流れがあったことが推測される。また、幅5.52ｍ、深さ1.0ｍと大規模なものであることから、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。

なお、天神遺跡第７次発掘調査A区では、幅6.0ｍ、深さ0.9ｍを測る大溝１が検出されており、遺構の規模・方向がほぼ一致することから、ＳＤ０９と同一の溝である可能性がある。大溝１からは、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが出土していることから、当該期の遺構と解されている。ＳＤ０９からは弥生時代中期中葉頃の遺物が多いが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の遺物も検出されており、時期的な問題については再考の必要があろう。

ＳＤ０９が築かれた時期については、出土遺物から考えると、弥生時代中期中葉頃に築かれたと考



1.灰白色細砂層		26.灰黄褐色土	黒色土ブロック含む
2.灰白色砂層	1層よりやや粗い	27.褐色土	褐色粒子を含む
3.褐色砂層	粒子細かく、黒色土ブロック含む	28.明褐色土	黒色土ブロック含む
4.褐色砂層	粒子やや粗く、黒色土ブロック含む	29.灰黄褐色砂質土	褐色粒子を含む
5.暗褐色砂層	粒子やや粗い	30.褐色土	褐色粒子を含む
6.暗褐色砂層	黒色土ブロック、灰白色砂含む	31.暗褐色土	
7.灰色粘質土	褐色粒子、黒色土ブロック含む	32.明褐色砂質土	黒色土ブロック含む
8.黒褐色粘質土	褐色粒子、砂利を含む	33.暗褐色土	黒色土ブロック、褐色砂含む
9.灰白色砂層	粒子やや粗く、黒色土ブロック含む	34.褐色砂層	粒子やや粗く、黒色土ブロック含む
10.明褐色砂層	粒子やや粗く、黒色土ブロック含む	35.灰白色砂層	
11.褐色土	褐色粒子を含む	36.灰色荒砂層	
12.灰色粘質土	褐色粒子、黒色土ブロック含む	37.明褐色砂層	粒子やや粗い
13.明褐色砂質土	細砂と粗砂の混合層	38.灰褐色砂質土	
14.灰色粘質土	褐色粒子、黒色土ブロック含む	39.灰褐色砂層	粒子やや細かい
15.暗褐色土	褐色粒子、砂利を含む	40.明灰色粘質土	褐色粒子を含む
16.明灰色粘質土	褐色粒子を含む	41.明灰色砂質土	褐色粒子を含む
17.黒灰白色粘質土	褐色粒子、砂利を含む	42.灰色粘質土	少し砂粒を含む
18.明灰白色粘質土	褐色粒子、黒色土ブロック含む	43.褐灰色粘質土	褐色粒子を含む
19.灰白色砂層	粒子やや粗く、黒色土ブロック含む	44.灰色粘質土	褐色粒子、砂粒を含む
20.黒褐色粘質土	砂粒を少し含む	45.褐色砂層	粒子やや粗い
21.赤褐色砂層	粒子やや粗い	46.灰褐色土	粘土と砂の混合層
22.灰色砂層	粒子細かい	47.褐灰色土	粘土と砂の混合層
23.褐色砂層		48.灰褐色砂層	粒子やや細かい
24.褐色土	褐色粒子、砂利を含む	49.灰褐色砂層	粒子やや粗い
25.明灰色粘質土	褐色粒子、黒色土ブロック含む	50.明褐色砂層	粒子細かい

第46図　SD09実測図

えられる。その後、弥生時代後期にはほとんど機能しなくなり、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて再び掘り直して利用されたのではないだろうか。そして、古墳時代前期中頃までには再び機能しなくなったと考えられる。なお、このような傾向は、前述したＳＤ０３でも認められる傾向である。

ＳＤ０９の出土遺物

（第48図～第53図）

前述したように、ＳＤ０９からは弥生時代中期中葉から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土している。このうち弥生時代中期中葉頃の遺物には、弥生土器壺・甕・高坏・蓋・鉢などが出土している。また、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物には、古式土師器甕・高坏・低脚坏・器台などが出土しており、出土量も多く、布留式傾向甕も認められるなどバラエティーに富んでいる。

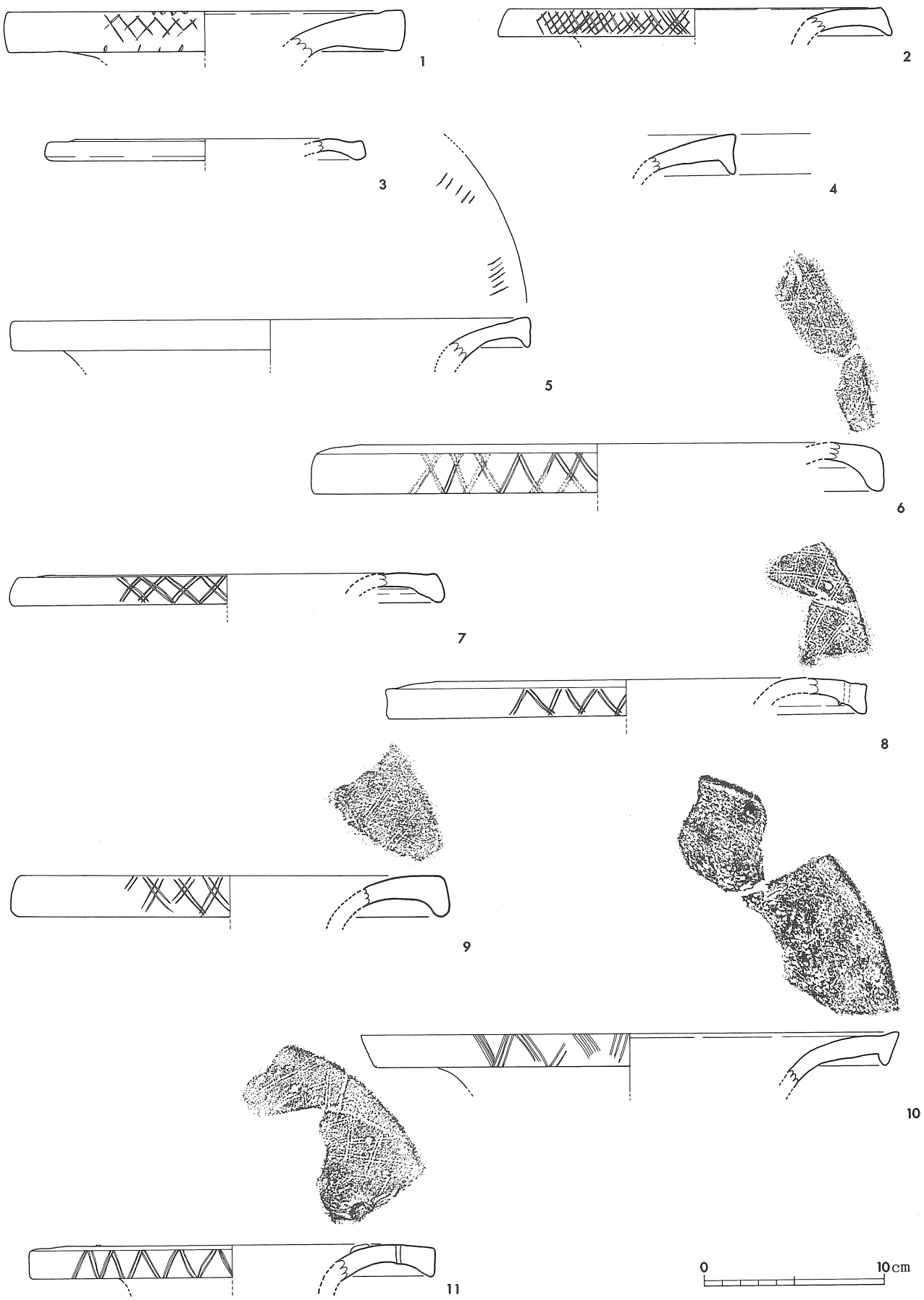
第48図－１～11は、弥生土器の壺である。１は、口縁部が大きく朝顔

第47図　SD09遺物出土状況実測図

状に開き、口縁端部はあまり拡張しないが平坦面を作り出している。口縁拡張部には1本のクシ状工具による斜格子文、両端からは刺突具によって刻目文が施されている。2は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張している。口縁拡張部には1本のクシ状工具によって斜格子文を密に施している。3も同様に口縁部が朝顔状に開くが口縁端部は上方に波打つように拡張し、無文である。4も同様であるが、口縁端部は下方にのみ大きく拡張し、口縁端部上端には刺突による刻目文が施されている。5は、風化が著しいが口縁端部は下方にのみ拡張し、朝顔状に開く口縁部内面にはヘラ状工具によって約1㎝の直線が刻まれ、めぐらされている。6は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部と内面には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施されている。7は、口縁部は大きく開き、口縁端部は下方に拡張するが、上方にもわずかに拡張している。口縁拡張部には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施され、内面にも3本単位からなるクシ状工具によって波頂間の狭い波状文が2列にめぐらされている。8は、大きく朝顔状に開く口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部と内面には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施し、口縁部内面から外面に向かって2以上の穿孔が認められる。9は、口縁端部は下方にのみ拡張し、口縁拡張部から内面にかけては2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施され、さらに内面頸部付近には直線文がめぐらされている。10は、口縁端部が上下に大きく拡張する。口縁拡張部には3本単位からなるクシ状工具によって山形文が施され、口縁内面には4本単位からなる波状文が2列に施され、さらに内面頸部付近には2列に刺突列点文がめぐらされている。11は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部から内面にかけては2本単位からなる斜格子文が施され、口縁部内面から外面に向かって6以上の穿孔が認められる。さらに内面頸部付近には3列に刺突列点文、1以上の円形浮文を貼付けて飾っている。11は、8とよく似た形態をもっており、同一個体である可能性がある。

第49図－13は、口径9.6㎝を測る小形の壺である。口縁部は前述したものより短く外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張して無文である。16は、頸部から口縁部に向かっての開き方から、壺と考えられる。口縁部は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われているが、このような形態的特徴をもつ壺は出雲地域ではあまり類例がない。詳しくはわからないが、他地域からの搬入品と考えることもできよう。山口県山口市吉田遺跡[16]からは同じような形態の土器が出土しており、瀬戸内あるいは北部九州からの影響を受けたものではないだろうか。なお、この土器は高坏の坏部である可能性もある。17は、壺の頸部から胴部にかけての破片である。外面頸部には1条の指頭圧痕文帯を貼付け、その下方は縦方向のハケ、内面はナデと横方向のミガキによって調整されている。以上のような壺は、その特徴から松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第49図－19～22は、弥生土器の鉢あるいは無頸壺と称されるものである。19は、口縁端部を厚くして上面にフラットな面を作り、体部はやや張り出すようである。外面口縁部の下には1条の指頭圧痕文帯が貼付けられ、その下方はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。20は、口径約38.8㎝を測る大形のもので、口縁端部は内側に突出している。厚く、平坦に作り出した口縁端部外面には刻目文、1.5㎝ほど下には指頭圧痕文帯が貼りめぐらされ、その下方は縦方向のハケ

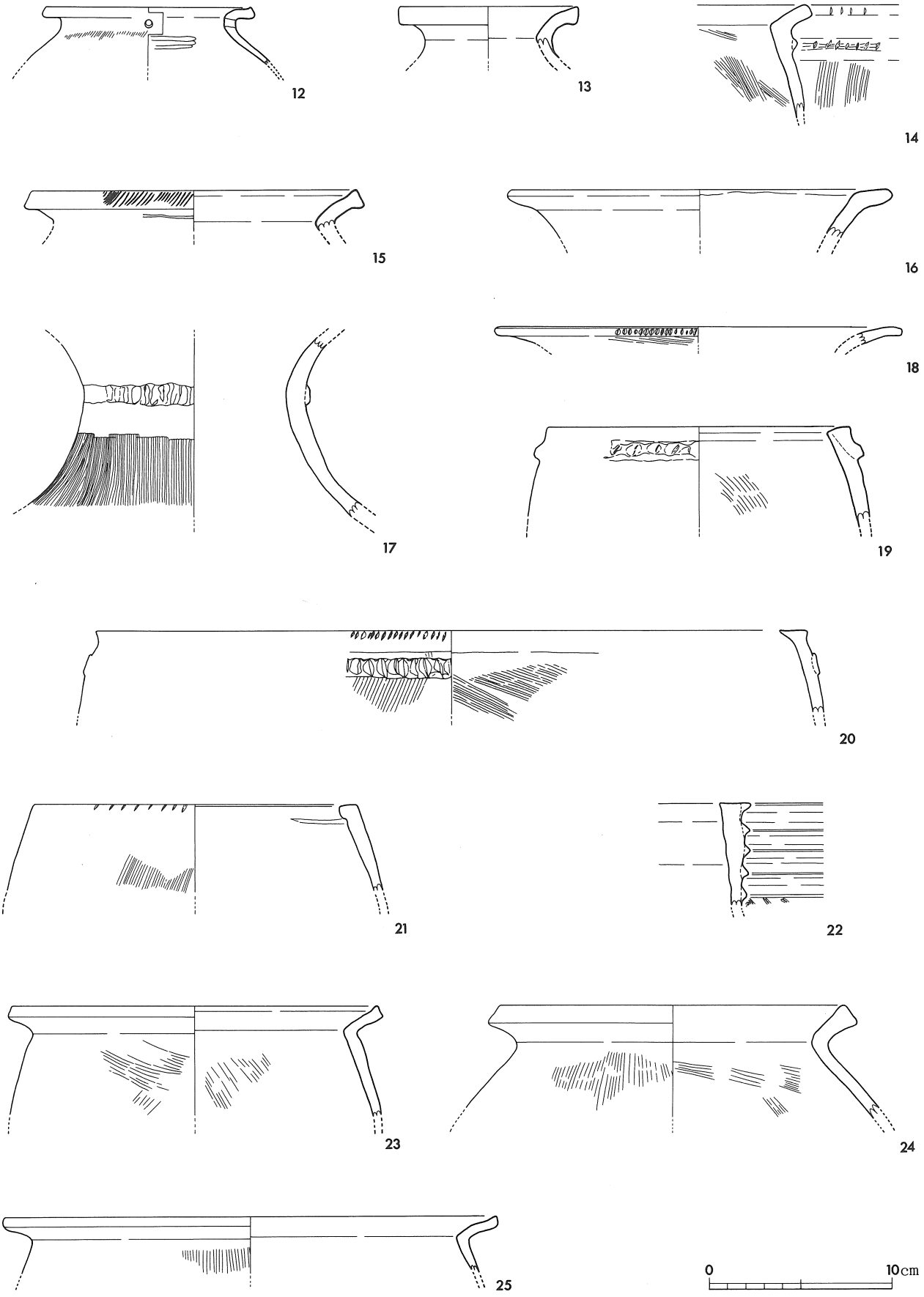


第48図　SD09出土遺物実測図(1)

による調整が行われている。なお、内面には19と同様に斜め方向のハケによる調整が行われている。21は、口縁端部がやや内側に肥厚し、上面にフラットな面を作り出して口縁端部の外面には刺突による刻目文を施している。22は、同様に口縁端部を厚くして上面をフラットに作っている。外面には口縁端部から胴部にかけて刺突による刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文（または山形文）が施されている。内面はナデによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ鉢あるいは無頸壺は、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第49図－12・14・15・18・23～25は、弥生土器の甕である。12は、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張してやや丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。また、頸部外面から内面に向かって2つの穿孔が認められている。14は、口縁部が外方に短く「く」の字状に屈折し、口縁端部に平坦面を作り、刺突による刻目文を施している。頸部下外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。なお、外面胴部から口縁部にかけてはススが付着している。15は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。平坦面を作る口縁拡張部には貝殻腹縁による刻目文が密に施されている。18は、器壁が薄く、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部は拡張せず丸くおさめ、刺突による刻目文を施している。口縁部外面は横方向の丁寧なミガキ、内面はナデによる調整が行われている。このようなタイプの土器は、出雲地域では珍しい。23は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張して平坦面を作っているが、無文である。頸部下は内外面ともに斜め方向のハケによる調整が行われている。24は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。25は、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。

第50図－26～35も弥生土器の甕である。26は、口縁部が外方に強く短く屈折し、口縁端部には平坦面を作って刺突による刻目文を施している。頸部下外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、内面はナデによる調整が行われている。第49図－14と非常によく似た形態であることから、同一個体である可能性もある。27は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下の内外面ともにナデによる調整が行われている。28は、器壁がやや薄く、口縁端部は上方にわずかに拡張して丸くおさめている。29は、口縁部は外方に短く鋭く屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張してやや丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面口縁部にはススが付着している。30は、口縁部が外方にやや強く屈折し、口縁端部は拡張せず、やや丸くおさめている。31は、外方に強く屈折するやや長めの口縁部を有し、口縁端部は拡張せず、丸くおさめている。頸部下は内外面ともにナデによって調整され、外面口縁部にはススが付着している。32は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。33は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張して平坦面を作っているが、無文である。34は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに拡張して平坦面を作っ



第49図　SD09出土遺物実測図(2)

ているが、無文である。なお、外面にはススが付着している。35は、口径10.2㎝を測るやや小形の甕で、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部は拡張しないが平坦面を作り出している。

以上のような甕は、様々な形態的特徴をもっているが、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

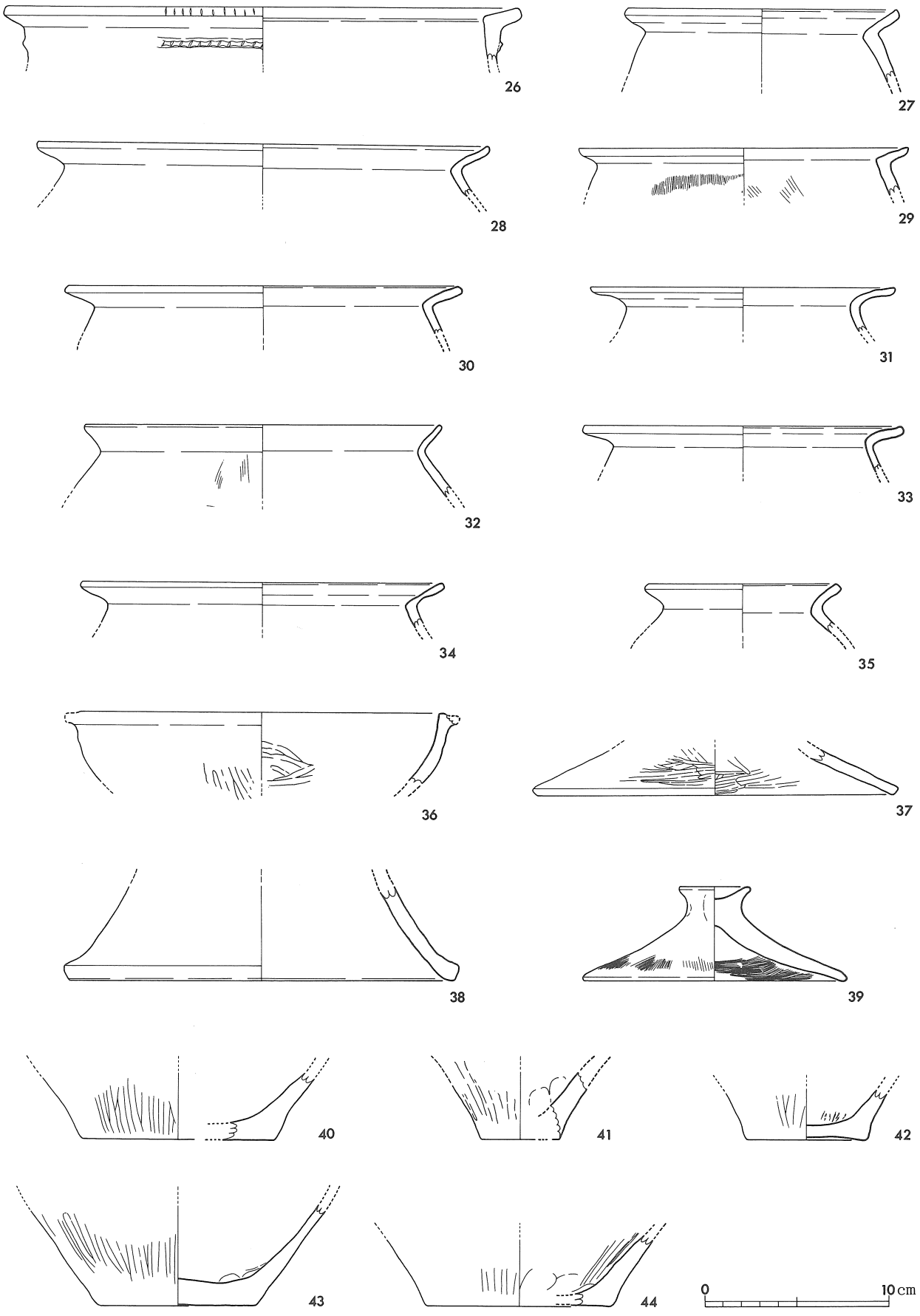
第50図－36は、弥生土器高坏の坏部であろう。口縁端部は水平方向に外方へ突出し、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによって調整されている。この高坏も、壺や甕の形態から考えると、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式の範疇に入る資料と考えられる。なお、ＳＤ０９から出土している当該期の高坏は、この1点のみである。

第50図－39は、弥生土器の蓋である。底径14.2㎝、器高5.1㎝を測り、上部に内側に凹んだ輪状のつまみをもつものである。外面は縦方向のハケ、内面は横方向の細かいハケによって丁寧な調整が行われている。なお、つまみ部には指頭圧痕が明瞭に残っている。蓋はこの1点のみの出土であり、無頸壺の蓋に利用されたものであろう。おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第50図－40～44は、弥生土器の壺あるいは甕の底部付近の破片である。40は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキによって調整されている。41は、底径4.2㎝とやや小さく、底部から胴部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整され、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。42は、外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われているが、内面底部付近には粗く、工具によるものと考えられる痕跡が認められる。43は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整され、内面底部付近には指頭圧痕が認められる。44は風化が著しいが、底部から胴部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面も縦方向のミガキによる調整が行われているようである。このような土器は出雲地域には珍しいが、弥生時代前期末からの系譜を引いたやや古めの様相を示すものであろうか。

第51図－45～58も弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。45は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面はやや粗く、間隔の広い縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。46も形態的にはほぼ同様で、外面に残る縦方向のミガキは約7㎜と間隔が広く、外面にススが付着している。47は、外面は細かく丁寧な縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。48は、外面の縦方向のミガキは粗く、間隔が広いという特徴をもつ。49・50は、外面は一般的な縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。

51は、底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、外面はやや粗く、間隔の広いミガキ、底部付近には一部横方の細かいハケ、内面はケズリによる調整が行われている。52は、底径3.7㎝とやや小さく、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のケズリによる調整が行われている。53は、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のケズリによって調整されている。54は、外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のケズリによる調整が行われている。55は、底径3.9㎝とやや小さく、外面には指頭圧痕が明瞭に残り、内面には刺突具で突いたような痕



第50図　SD09出土遺物実測図(3)

跡が残っている。このような土器はＳＤ０４（第40図－44）からも出土している。56は、底部から胴部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。このようなタイプの土器も出雲地域には珍しいが、ＳＤ０３・ＳＤ０４からも内面が横方向のミガキによって調整された土器が出土している。57は、小形の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。底部は丸底で胴部が球形を呈し、内外面とも手捏ねで作られ、指頭圧痕が至るところに認められる。58は、底径2.2㎝とやや小さく、底部から胴部にかけて大きく広がって立ち上がっている。外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。弥生時代後期の遺物であろう。

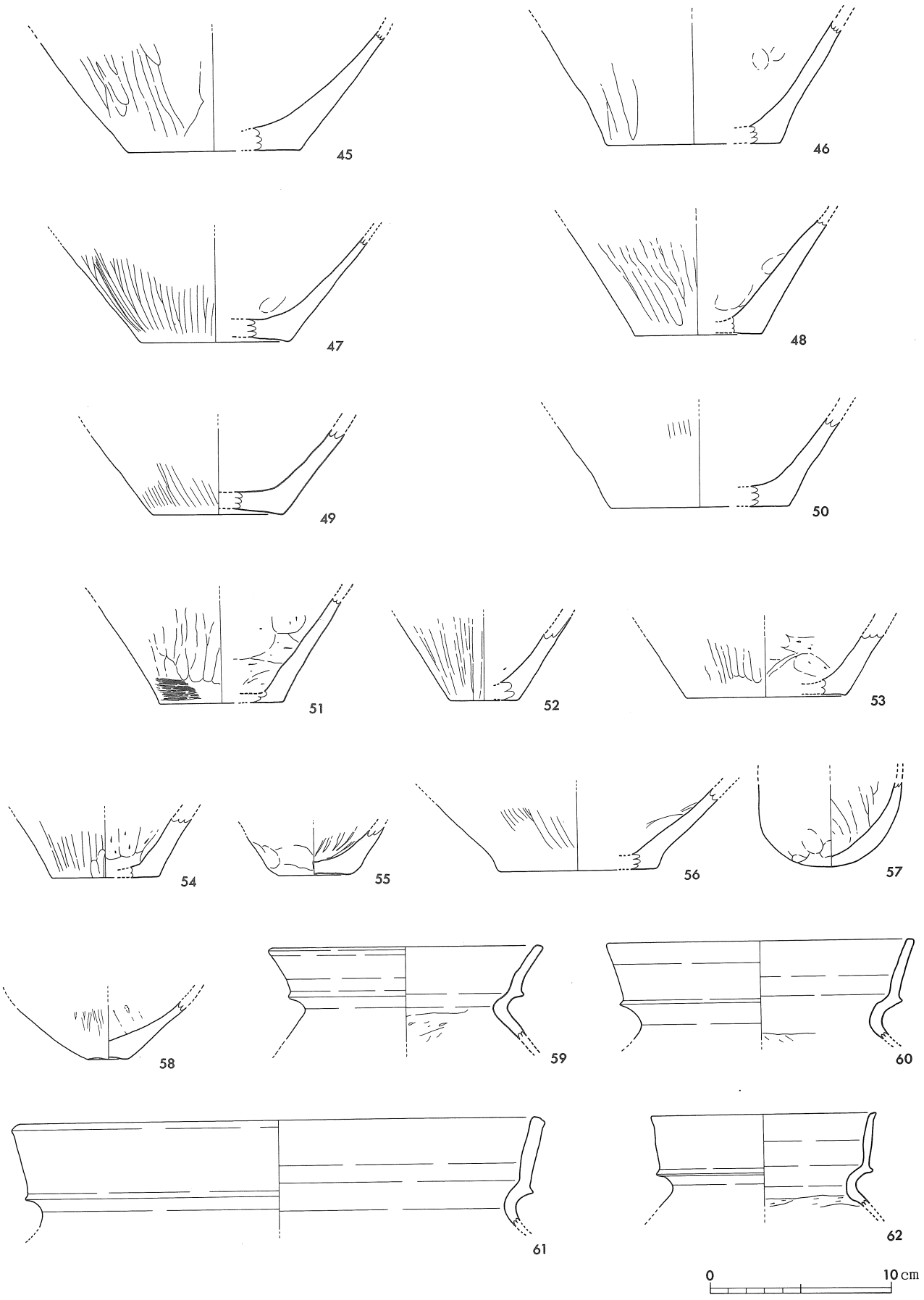
以上のような壺あるいは甕の底部は、その特徴から時期的に類別できるものである。40～54については、松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。そのうち、51～54については、内面にケズリによる調整が行われていることから、松本編年Ⅲ－２様式に相当する資料であろう。また、56については、内面が横方向のミガキによって調整されていることから、松本編年Ⅲ－１様式の中でも古い様相を示すものと考えられる。なお、55・57・58については、底径が小さくなるという特徴から、松本編年Ⅴ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期の遺物であろう。

ＳＤ０９からは、前述したような弥生時代中期の遺物のほか、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も確認されている。

第51図－59～62は、複合口縁をもつ古式土師器の甕である。59は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はやや平坦に作り出している。口縁部内外面は横方向のナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。60もほぼ同じ形態である。61は、口径28.2㎝とやや大形のもので、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁の稜は水平方向に向いている。62はやや器壁が薄いが、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作っている。

第52図－63～74も複合口縁をもつ古式土師器の甕である。63は、口縁部が直立し、口縁端部はやや外方に折り曲げて平坦面を作り出している。複合口縁の稜は水平方向に向くが、やや鋭さを欠いている。なお、この土器は内外面ともに朱塗りされている。64は、口縁端部を外方に折り曲げているが、やや丸くおさめている。65は、63と同様に口縁端部に平坦面を作っている。66は、頸部から胴部にかけての破片である。外面頸部やや下にはクシ状工具による直線文・波頂間のやや広い波状文が施され、その下方は斜め方向のハケ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。なお、外面胴部にはススが付着している。67～71はほぼ同様な形態をもち、複合口縁の稜は水平方向に折り曲げているが、やや丸みを帯びておさめている。なお、71は口縁端部にススが付着している。72は、複合口縁の稜はやや下方に向き、口縁端部は折り曲げず、先細りとなって丸くおさめている。73はやや器壁が薄いが、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作っている。74は、頸部付近の破片であるが、内面頸部下にはケズリによる調整が行われている。

以上のような甕は、72がやや古い様相を呈しているが、その特徴から草田６期から７期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。これらの土器は、東出雲町大木権現山１号墳・１号土壙資料[17]、鹿島町南講武草田遺跡ＣＤ－４、ＤＥ－３区土器溜資料[18]、



第51図　SD09出土遺物実測図(4)

出雲市山持川川岸遺跡ＳＫ０２・ＳＩ０１・ＳＢ０１資料[19]などに相当するものであろう。

第52図－75～78は、単純口縁の布留式傾向甕である。75は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はやや内傾して稜をなしている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。76は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はやや丸くおさめている。頸部下外面は横方向のナデ、内面はケズリによる調整が行われ、外面口縁部にはススが付着している。77は、頸部下外面はハケによる調整、内面頸部やや下方からケズリによる調整が行われている。形態的特徴が76とほぼ同じであることから、同一個体である可能性もある。78は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はやや内傾して稜をなしている。外面頸部やや下方には８本単位からなるクシ状工具によって波頂間が広い波状文・直線文が施され、内面頸部やや下からはケズリによる調整が行われている。なお、外面にはススが付着している。

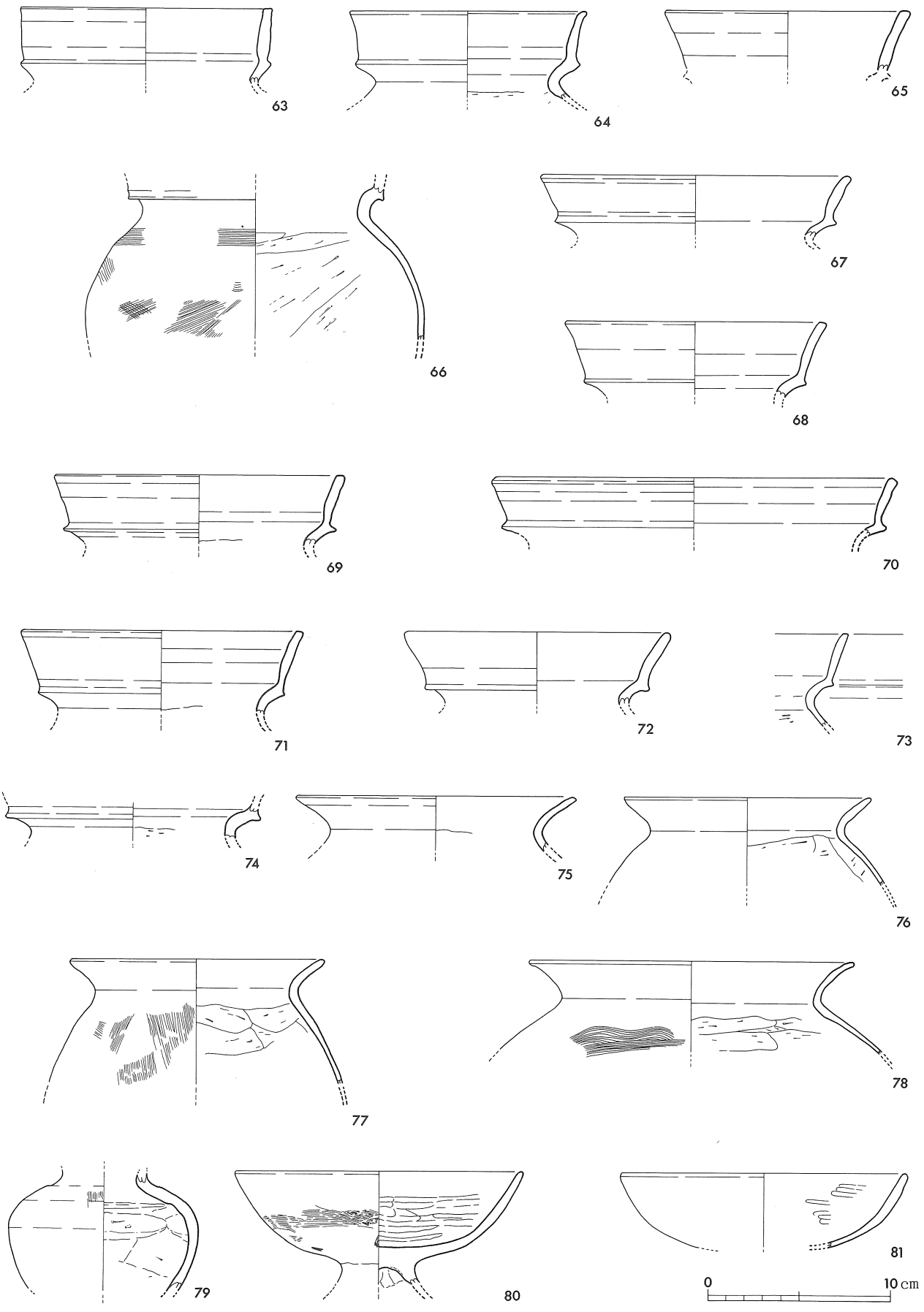
以上のような布留式傾向の甕は、第７次発掘調査Ｂ区ＳＤ０６からも多量に出土しているが、ＳＤ０９から出土している甕は、出雲平野における複合口縁をもつ甕と胎土が同じであることから、畿内系の甕を模倣して作られたものであろう。

第52図－79は、小形の壺あるいは甕であろう。胴部が球形を呈し、外面はナデ、頸部下には細かいハケによる調整が認められ、内面は横方向のケズリによる調整が行われている。弥生時代終末期以降のものであろう。

第52図－80・81は、古式土師器の高坏あるいは低脚坏である。80は、口縁端部は丸くおさめ、坏部外面は細かいハケ、内面は横方向の丁寧なミガキによって調整されている。坏部と脚部は円盤充填法によってつながれ、脚部はかなり末広がりになるものと考えられる。天神遺跡から出土するこの時期の高坏は、総じて器壁が厚く、坏部に深さがあり、器高も高坏と低脚坏の中間に位置するものがある。在地的な手法の特徴であるのかは判断し難いが、注意が必要である。81は、口縁端部は丸くおさめ、坏部外面上方は横方向のミガキ、下方はハケ、内面はミガキによって調整されている。

第59図－82は、坏部外面はハケ、内面上方は横方向のミガキ、下方は縦方向のミガキによる調整が行われている。83・84は高坏脚部の破片である。83は、脚部外面は丁寧な縦方向のミガキ、坏部外面の下方にはハケによる調整が認められる。内面は横方向のケズリによる調整が行われ、円盤充填法によって坏部と脚部をつないでいる。84は風化が著しいが、やや大形の高坏と考えられ、脚部内面はケズリによる調整が行われている。86・87は、高坏の脚端部から裾部にかけての破片である。86は、裾部が大きく広がり、脚端部には平坦面を作っている。内面脚部付近から上方は横方向のケズリによる調整が行われている。87は、裾部は広がるが86ほどではなく、平坦面を作る脚端部にはナデて凹線を作っている。脚部外面は縦方向のミガキ、内面裾部にはハケ、脚部付近から上方はケズリによる調整が行われている。

第50図－37・38も高坏の脚端部から脚部にかけての破片であろう。37は、裾部が大きく末広がりとなり、脚端部はほぼ平坦に作り出している。また、内外面ともに横方向の丁寧なミガキによる調整が行われている。この時期の高坏としては、出雲地域ではあまり類例のないものである。38は、器壁が厚く、底径約20.8㎝を測る大形のものである。裾部は広がり、脚端部はやや上方に拡張し、下端はやや内傾して稜をなしている。内外面は横方向のナデによる調整が行われている。



第52図　SD09出土遺物実測図(5)

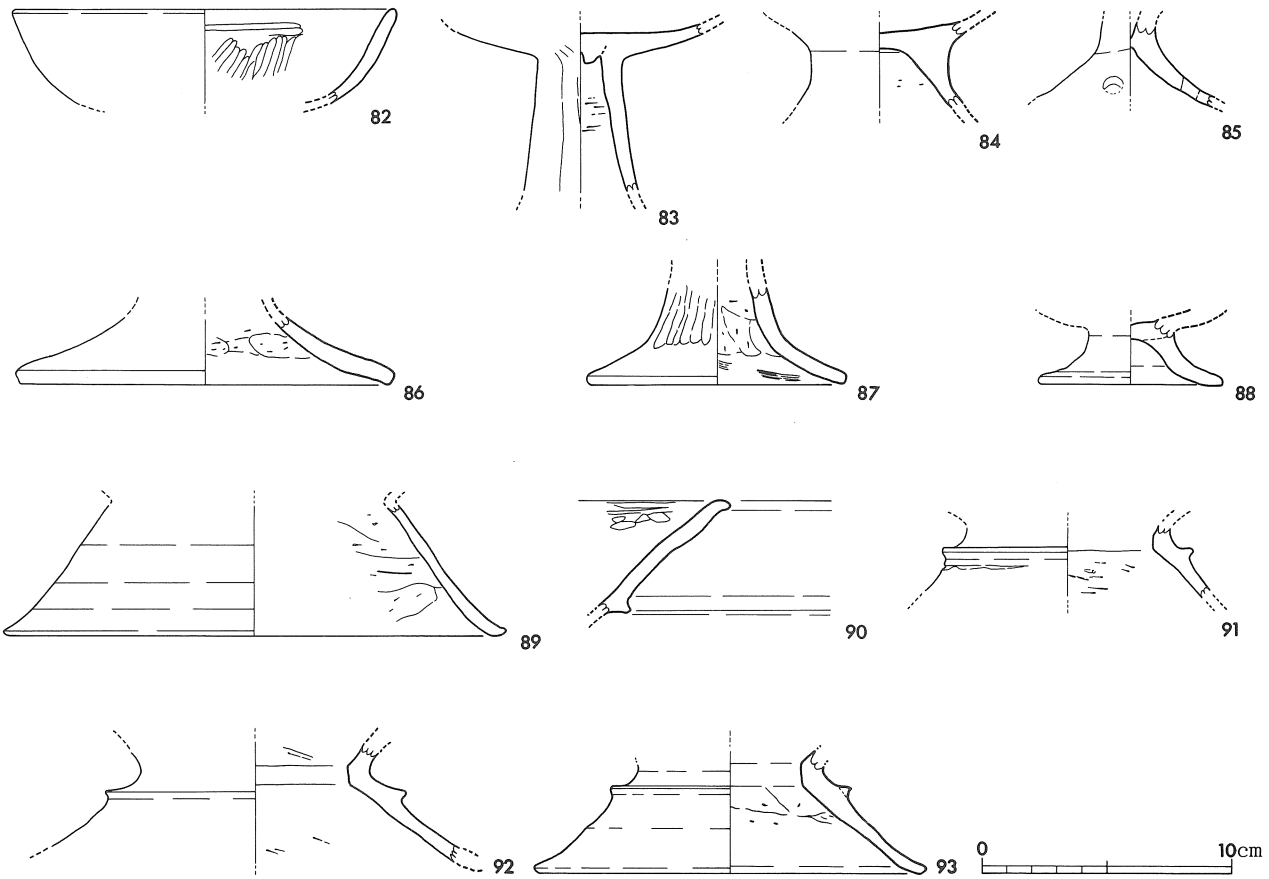
以上のような高坏あるいは低脚坏は、器形や形態からは判断し難いが、ＳＤ０９から出土している甕の特徴から考えると、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に相当する資料ではないだろうか。

第53図－85は、小型器台であろうか。広がる裾部には2箇所に透し孔が認められる。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。高坏と同様に弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

第53図－89～93は、古式土師器の器台である。89は脚部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のケズリによって調整され、外面にはススが付着している。90は受部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。また、筒部の稜は水平方向に向いているがやや鋭さを欠いている。91は、脚部から筒部付近にかけての破片である。脚部外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に向いているが丸みを帯びている。92も同様に脚部から筒部付近にかけての破片である。外面はナデ、脚部内面はケズリによる調整が行われるが、筒部上方にもケズリによる調整が認められ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。93は、形態が91と非常によく似ており、同一個体である可能性もある。

以上のような器台については、時期的判断は難しいが、ＳＤ０９から出土している古代土師器から考えると、おおよそ草田6期～7期の範疇に入る資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

以上のように、ＳＤ０９からは多くの遺物を検出しているが、時期的には、弥生時代中期中葉を中心とした時期と弥生時代終末期から古墳時代前期初頭を中心とした時期に大別することができる。こ



第53図　SD09出土遺物実測図(6)

の傾向は、前述したＳＤ０３と同様で、ＳＤ０９が機能していた時期を考えるうえで、注意が必要である。

ＳＤ１２（第54図）

調査区のほぼ中央、Ａ４GrからＢ５Grにかけて、黄褐色シルト質土上面（地山）で検出した溝状遺構である。Ａ４Grでは古代から中世にかけての遺構であるＳＸ０２・ＳＸ０３・ＳＫ０５、弥生時代中期頃の遺構と考えられるＳＤ11によって切られ、Ｂ４Grでは古代の遺構であるＳＫ０４、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構と考えられるＳＤ１０によって切られている。新しい時期に築かれた遺構によって切られているため、検出状況はよくないが、東西とも調査区外へとさらに伸びている。また、Ａ４Grで溝は分岐しているが、ほぼ東南東－西北西の方向に伸びている。検出した状況では、長軸10.5ｍ以上、最大幅2.22ｍ、狭い所では62㎝を測る。なお、検出高は標高約6.00ｍである。

覆土には、上層には褐色粒子を含む明褐色土、灰白色の砂粒を含む明黄褐色土・褐灰色土などが堆積し、中層には粘質土と砂層が互層状に堆積し、最下層は褐灰色粘砂層が堆積している。断面の形状は、南肩部からは約45度の角度で落ち、北肩部からはややなだらかに落ちるが、中段からはやや鋭角に落ちている。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約43㎝、浅い所でも約25㎝の深さがある。また、最深部は灰白色粗砂層にまで達しているが、他の遺構と比べると湧水は少ない。

全体の形状は、Ａ４Gr東側での溝の幅はほぼ一様であるが、分岐した北側では溝の幅が広く、Ｂ５Grで最大幅を有す。一方、分岐した南側の溝の幅は約70㎝と狭くなっている。

遺物は、他の遺構と比べると少量であるが、弥生時代中期頃の遺物を中心に出土している。層位的には下層からの出土量が多く、位置的には分岐した北側の溝からの出土量が多い。

遺構の性格としては、覆土に粘質土と砂質土が互層状に堆積していることから、一定の水の流れがあったことが推測される。そして、溝が途中で分岐していることから考えると、灌漑用水路のような機能を果していたのではないだろうか。

遺構の築かれた時期については、切合関係、出土遺物から考えても発掘調査全体を通して検出された遺構の中で最も古く、弥生時代中期中葉でもやや古い時期のものと考えられる。

ＳＤ１２の出土遺物（第55図）

ＳＤ１２からは遺物の出土量としては少ないが、弥生土器のみが出土しており、器種としては壺・甕・高坏がある。

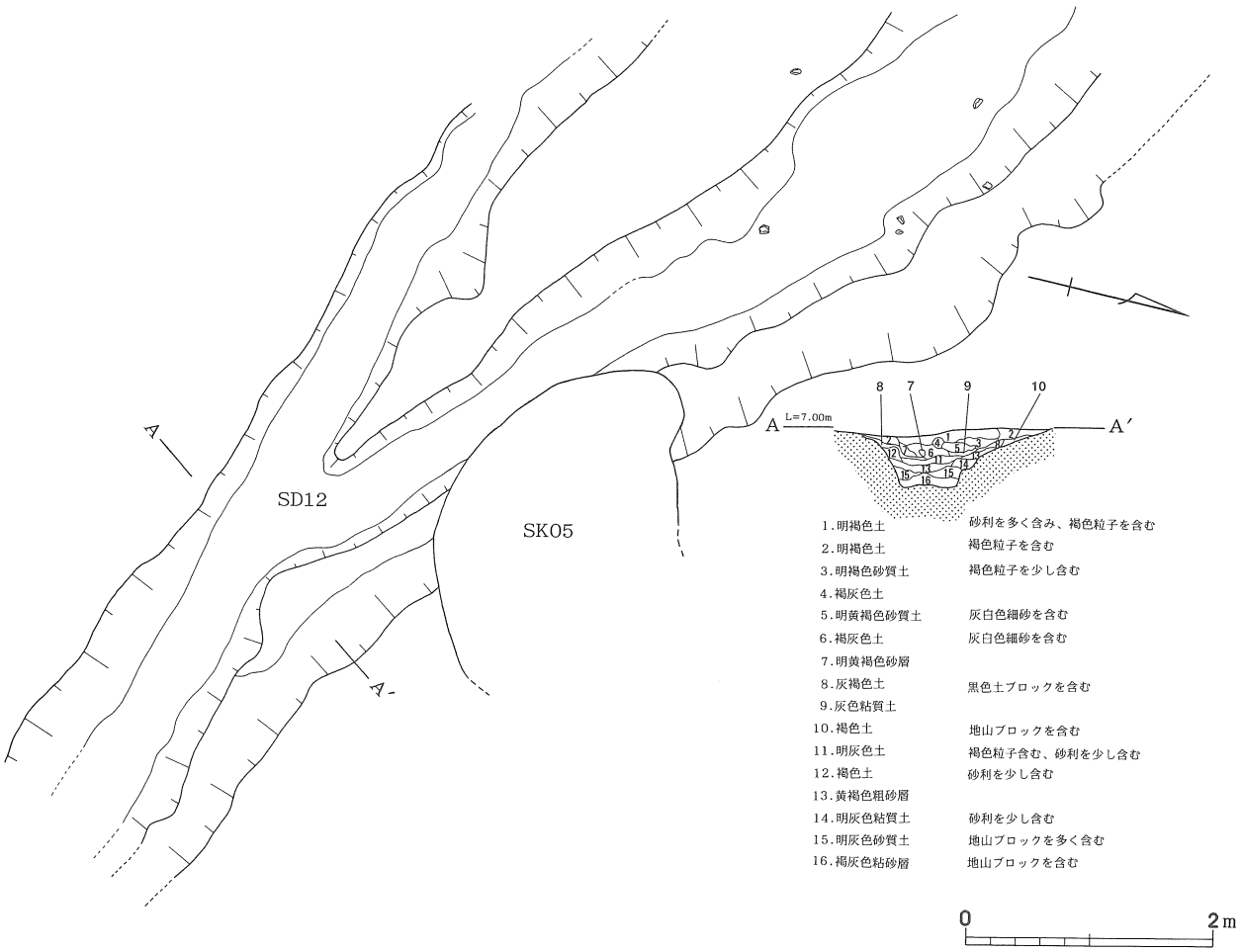
第55図－２～４は、弥生土器の壺である。２は、口縁部が大きく朝顔状に開くもので、口縁端部はわずかに上下に拡張し、平坦面を作り出している。口縁拡張部には貝殻腹縁による刻目文を施し、ナデてわずかに凹みを作っている。３は、口縁部が大きく朝顔状に開いて口縁端部は上下に拡張する。口縁拡張部には４本単位からなるクシ状工具によって山形文を施している。３は、頸部から口縁部にかけての破片である。頸部外面には刺突文を施した三角形文帯を３条以上貼付け、その上方は縦方向

のハケ、内面頸部は横方向のミガキ、上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。

以上のような壺は、その特徴からおおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

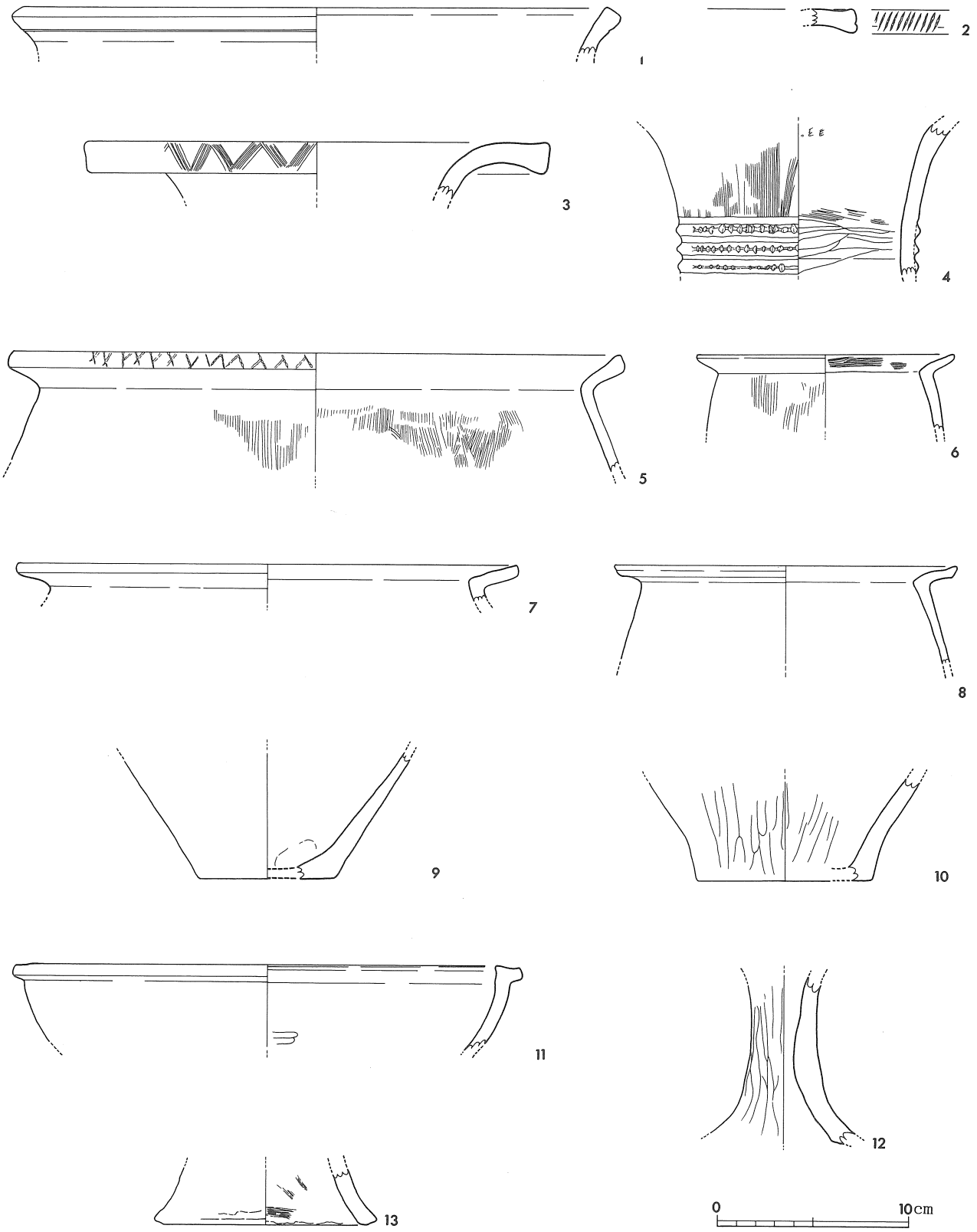
第55図－１・５～８は、弥生土器の甕である。１は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作っているが、無文である。５は、口径31.6㎝を測る大形のもので、頸部から口縁部にかけて外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。口縁拡張部には貝殻腹縁により交互に刻目文を施し、「×」印のような文様をめぐらせている。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向の細かいハケによって調整されている。６は、口径13.3㎝を測るやや小形のもので、頸部から口縁部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は拡張せずに丸みを帯びておさめている。口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケによる調整が行われ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。７は、頸部から口縁部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は拡張しないがほぼ平坦に作り、外面にはススが付着している。８は、頸部から口縁部にかけて外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。なお、外面口縁部にはススが付着している。

以上のような甕は、その特徴からおおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式の範疇に入る資料と考えられるが、Ⅲ－１様式に近く、やや古めの様相を示すものであろう。



第54図　SD12実測図

第55図－9・10は、弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。9は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。風化が著しいため外面の調整は不明であるが、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が認められる。10は、底部から胴部にかけて外反ぎ



第55図　SD12出土遺物実測図

みに立ち上がる。外面は縦方向のミガキ、内面も縦方向のミガキによる調整が行われている。このような特徴をもつ土器はＳＤ０９からも出土しているが、出雲地域ではあまり類例がなく、Ⅱ－１様式の系譜を引くもので、やや古めの様相を示すものであろう。

第55図－11・13は、弥生土器の高坏である。11は坏部の破片であるが、口径26.4㎝を測る大形のものである。口縁端部は肥厚して上面にフラットな面を有し、内外に水平方向に突出している。外方に突出する口縁端部は、上方にわずかに拡張し、ほぼ平坦におさめている。坏部外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。このような口縁をもつ高坏は類例が少ないが、天神遺跡では第２次発掘調査時[20]にも同様な高坏が検出されている。在地的な形態的特徴であろうか。12は、高坏脚部の破片である。外面は縦方向の丁寧なミガキによって調整され、内面は無調整である。13は高坏の脚端部から裾部にかけての破片であろう。脚端部は雑な調整ではあるがほぼ平坦に作り出し、外面裾部はナデ、内面は部分的にハケによる調整が行われている。

以上のような高坏も、ＳＤ１２から出土している壺や甕の特徴を考えると、おおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。

以上のようにＳＤ１２から出土している遺物は、弥生時代中期中葉頃の遺物ではあるが、５～８の甕、10の底部から胴部にかけての破片、11の高坏などは松本編年Ⅲ－１様式の範疇に入る資料と考えられ、やや古い様相を示している。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのその他の遺構

この時期の遺構としては、前述した他にも溝状遺構３（ＳＤ０７・ＳＤ１０・ＳＤ１１）、落ち込み状遺構２（ＳＸ０４・ＳＸ０６）を検出している。

ＳＤ０７は、Ａ６GrからＡ７Grにかけて、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出したほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しているにすぎず、時期的判断はし難いが、切合関係から考えるとＳＤ０８よりも新しい時期の遺構である。なお、北側は上部が削平されているために途中で切れている。

ＳＤ１０は、Ａ３GrからＢ５Grにかけて、ＳＤ０９の上面で検出した溝状遺構で、途中で蛇行しながら東南東－北北西の方向に伸びている。切合関係から考えるとＳＤ０９よりも新しく、古墳時代前期初頭頃の遺構であろう。なお、遺構内から遺物は出土していない。

ＳＤ１１は、Ａ３Grの東側、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東－西北西に伸びる溝状遺構である。遺構内からは弥生時代中期中葉頃の遺物が数点出土していることから、当該期の遺構と考えられるが、切合関係からＳＤ１２よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。なお、西側は上部が削平されているために残存状況が悪く、途中で切れている。

ＳＸ０４は、Ｂ５Grの黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した落ち込み状遺構である。新しい時期の遺構によって切られているが、切合関係から考えるとＳＤ０９よりも新しく、ＳＤ１０よりも古い遺構であることが明らかである。遺物は出土していないが、古墳時代前期初頭頃の遺構である可能性が強い。

ＳＸ０６は、Ｂ５GrのＳＤ０９上面で検出した落ち込み状遺構である。この遺構も新しい時期の遺

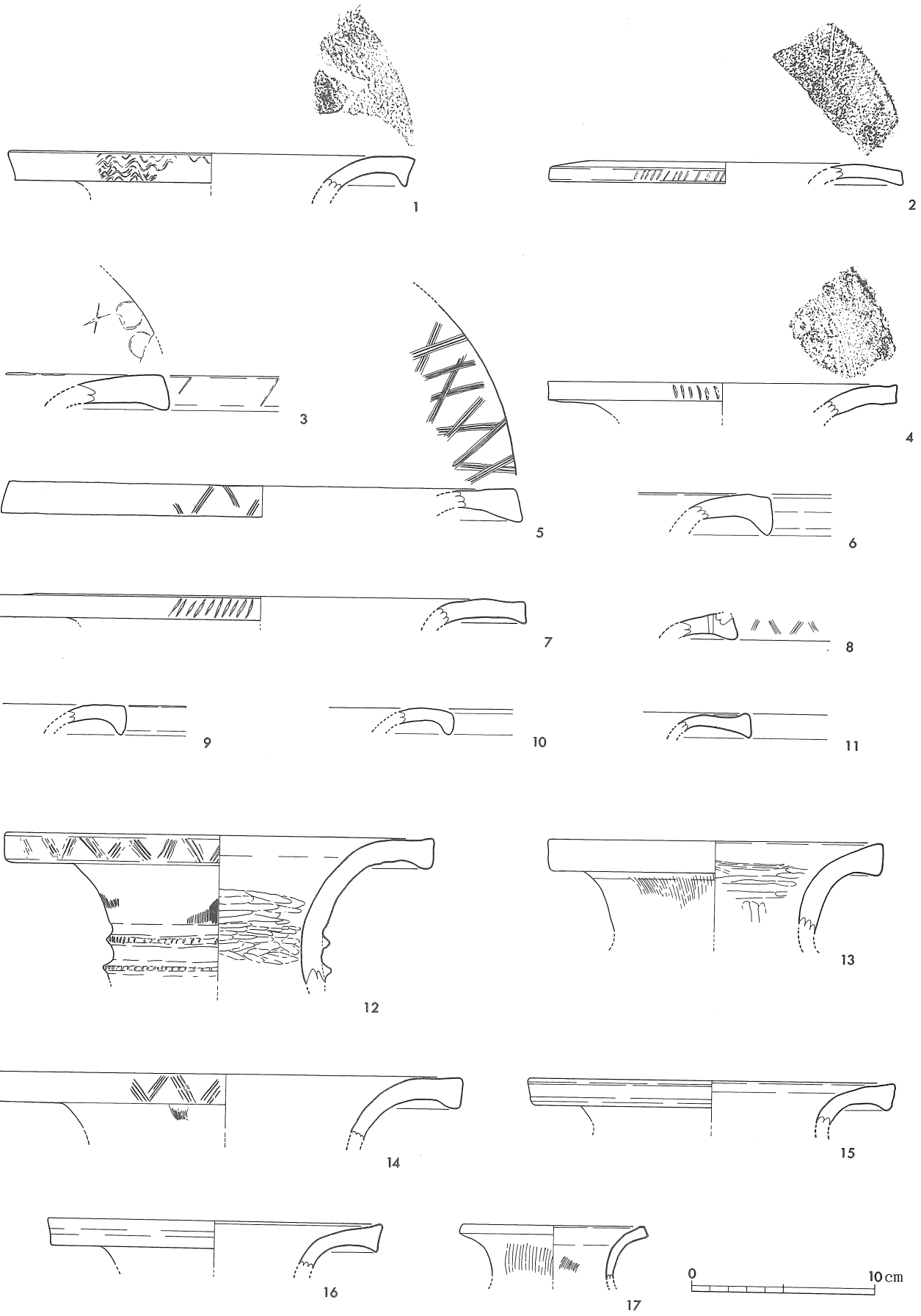
構に大きく切られているが、方向・溝の幅がＳＤ１０とほぼ一致することから、同じ遺構の可能性もある。

７Gr～８Grにかけては明確な遺構は検出されていないが、これは地山上面が何度かの削平を受けているためで、実際には遺構の底部のみが部分的に残っている状態であった。この中には当該期の遺構もあったと考えられ、覆土中からは当該期の遺物も少量ではあるが出土している。

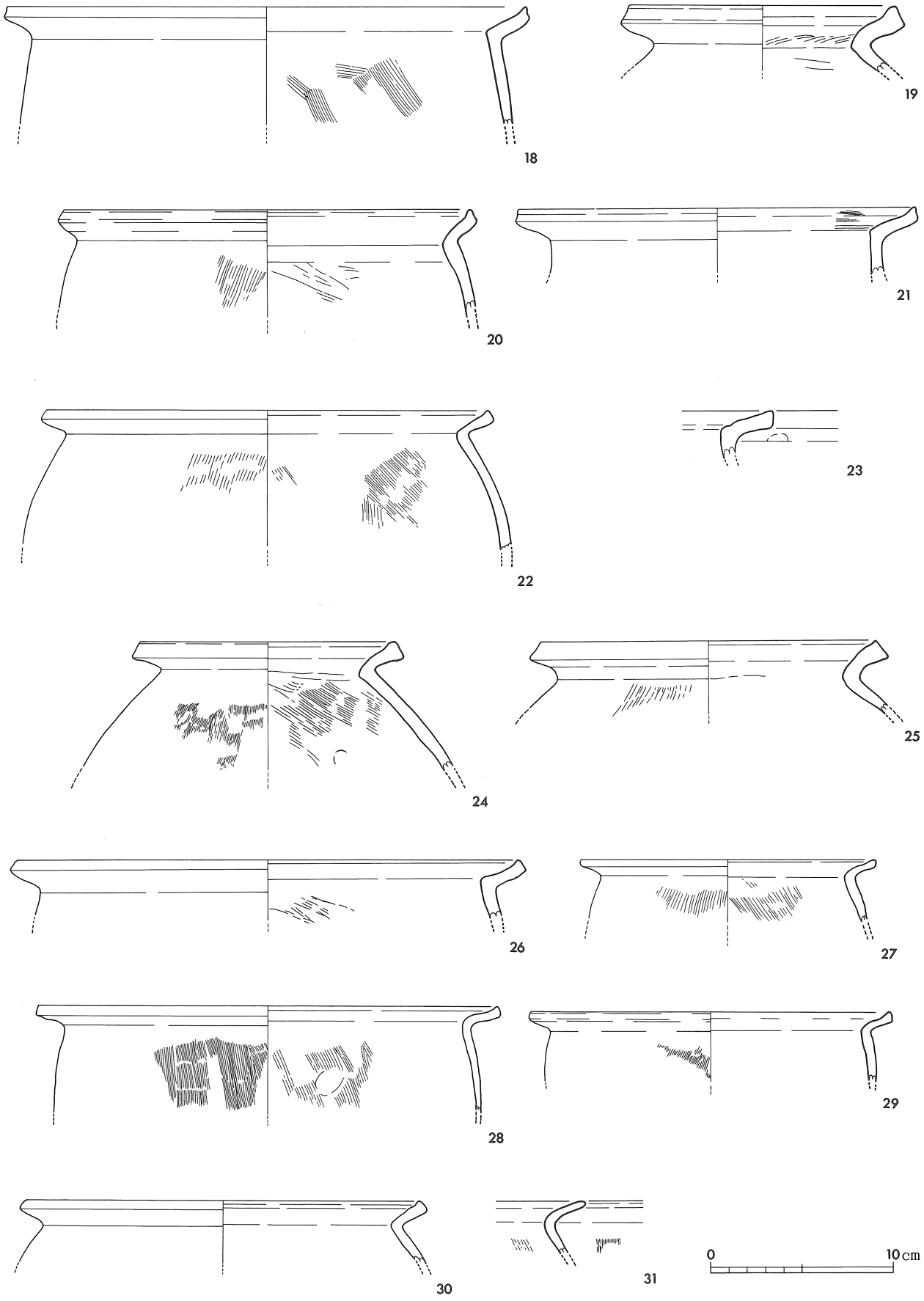
遺構外の出土遺物（第56図～第60図）

前述のように、遺構内からは多量の遺物が出土しているが、遺構検出面の上層に堆積する層は、全てが安定した遺物包含層となっており、遺物の出土量も多い。遺物の時期としては、弥生時代中期中葉から近世にかけてのものが出土しているが、その中でも弥生土器・古代の遺物の出土量が多い。

第56図－１～17は、弥生土器の壺である。１は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下に拡張する。口縁拡張部と内面にはクシ状工具によって波頂間の狭い波状文が施され、内面にはさらに２列に刺突列点文がめぐらされている。２は、口縁部は大きく朝顔状に開くが、口縁端部は拡張しない。口縁端部には貝殻腹縁による刻目文が施され、内面には３本単位からなるクシ状工具によって斜格子文・２本単位からなるクシ状工具による波状文がめぐらされている。３は、同様に口縁部は大きく開くタイプのものであるが、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部には、１本のクシ状工具による斜線文、内面には円形浮文を２以上貼付け、さらにその内側には１本のクシ状工具による斜格子文が描かれている。４は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部にはヘラ状工具による刻目文、内面には５本単位からなるクシ状工具によって波状文が施され、さらに内側には６本単位からなるクシ状工具によって直線文が描かれている。５は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部には３本単位からなるクシ状工具によって山形文、内面には斜格子文が施されている。６も形態的にはほぼ同様であるが、無文である。７は、口縁部がやや長めに外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部にはヘラ状工具によって刻目文が密に施されている。８は、口縁部が大きく開くタイプのものであるが、口縁拡張部には２本単位からなるクシ状工具によって山形文を施し、内面から外面に向かって２以上の穿孔が認められる。９～11は、口縁部が大きく朝顔状に開くが、無文である。９・10は、口縁端部は下方にのみ拡張し、11はわずかに上下に拡張している。12は、頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張し、口縁拡張部には３本単位からなるクシ状工具によって山形文がめぐらされている。頸部外面には刻目文を施した三角形文帯を２以上貼付け、その上方はハケによる調整が行われ、頸部内面には丁寧なミガキによる調整が行われている。13は、口縁部が短く外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。頸部外面は縦方向のハケ、頸部内面の上方は横方向のミガキ、下方は縦方向のミガキによって調整されている。なお、口縁拡張部から口縁部内面にかけては無文である。14は、やや長めの外反する口縁部を有し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部には４本単位からなるクシ状工具によって山形文を施している。頸部外面には縦方向のハケによる調整が認められる。15・16は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部の平坦面は強くナデて凹面を作り出している。17は、口径9.9㎝を測るやや小



第56図　遺構外出土遺物実測図(1)



第57図　遺構外出土遺物実測図(2)

形の壺である。口縁部は短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部内外面は縦方向のハケによる調整が行われ、口縁部の内外面にはススが付着している。

以上のような壺は、その特徴から、おおよそ松本編年Ⅲ－１～２様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第57図－18～31は、弥生土器の甕である。18は、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張して平坦面を作っている。また、口縁拡張部はナデてわずかに凹面を作り出し、頸部下外面はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。19は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。口縁部外面はナデ、内面下方には一部ハケによる調整が認められる。頸部下の外面はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。20は、口縁部が外方に比較的ゆるく屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部にはナデてわずかに凹面を作り出している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は粗い斜め方向のハケによる調整が行われている。21は、口縁部が外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張して平坦面にはナデてわずかに凹面を作り出している。22は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。23は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して頸部外面には指頭圧痕が認められる。24は、口縁部は強く外方に屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張している。頸部下外面は細かい縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。胴部はかなり張り出し、外面全体にススが付着している。25は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。26は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は上方にのみ拡張する。頸部下外面はナデ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。27は器壁が薄く、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面口縁部にはススが付着している。28は、口縁部は外方に鋭く屈折して口縁端部は内湾ぎみに立ち上がり、上方にのみ拡張している。頸部下外面は細かい縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。29は、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。なお、外面口縁部にはススが付着している。30も形態的にはほぼ同様である。31は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は拡張せず丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にススが付着している。

第58図－32～37も弥生土器の甕である。32は、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下は内外面ともナデによる調整が行われている。33は、口径11.6㎝を測る小形の甕で、口縁部は外方に鋭く屈折し、口縁端部は拡張しない。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にはススが付着している。34は小片で口縁部の開き方は判断できないが、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面はナデ、内面は上方に横方向のハケ、その下方はケズリによる調整が行われている。内面がケズリによって調整されていることから、弥生時代後期以降のものと考えられ、ミニチュア土器の可能性もある。35は、口縁部

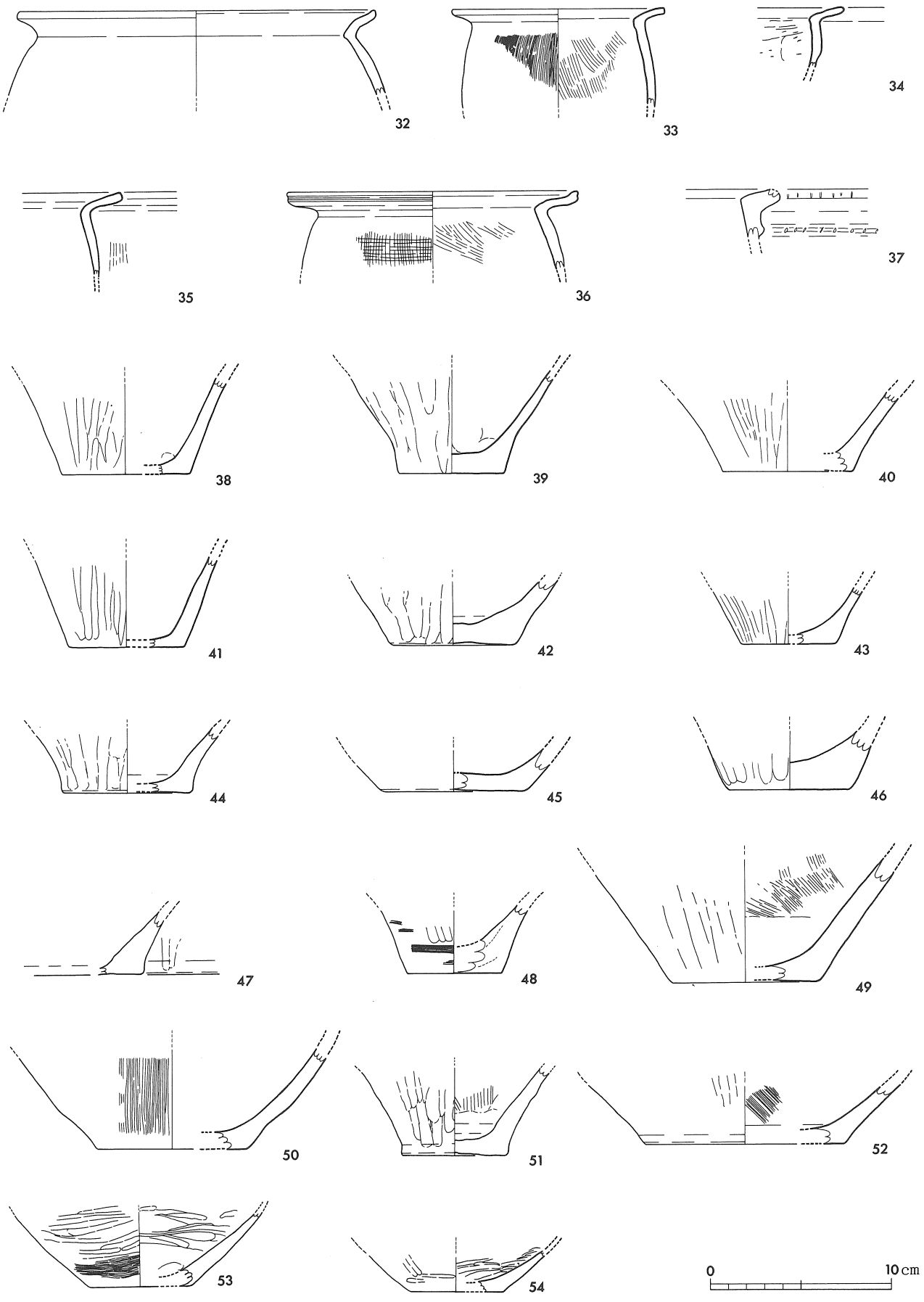
が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は拡張せず丸みを帯びておさめている。風化が著しいが、頸部下外面は縦方向のハケによる調整が行われている。36は、口縁部が外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部には1条の凹線文が施されている。頸部下外面は縦・横方向のハケによって格子状の文様を施し、内面は斜め方向のハケによって調整されている。前述した甕よりもやや新しく、弥生時代中期後葉のものであろう。また、外面が格子状のハケによって調整される例は珍しい。37は、口縁部が短く外反して口縁端部にやや平坦な面を作り出し、ヘラ状工具によって刻目文を施している。外面頸部下には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、内外面ともナデによる調整が行われている。

以上のような甕は、形態的には様々な特徴をもっているが、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料であり、弥生時代中期中葉のものであろう。しかし、中には34・36のように弥生時代中期中葉から後期にかけてのものも少量ながら確認されている。

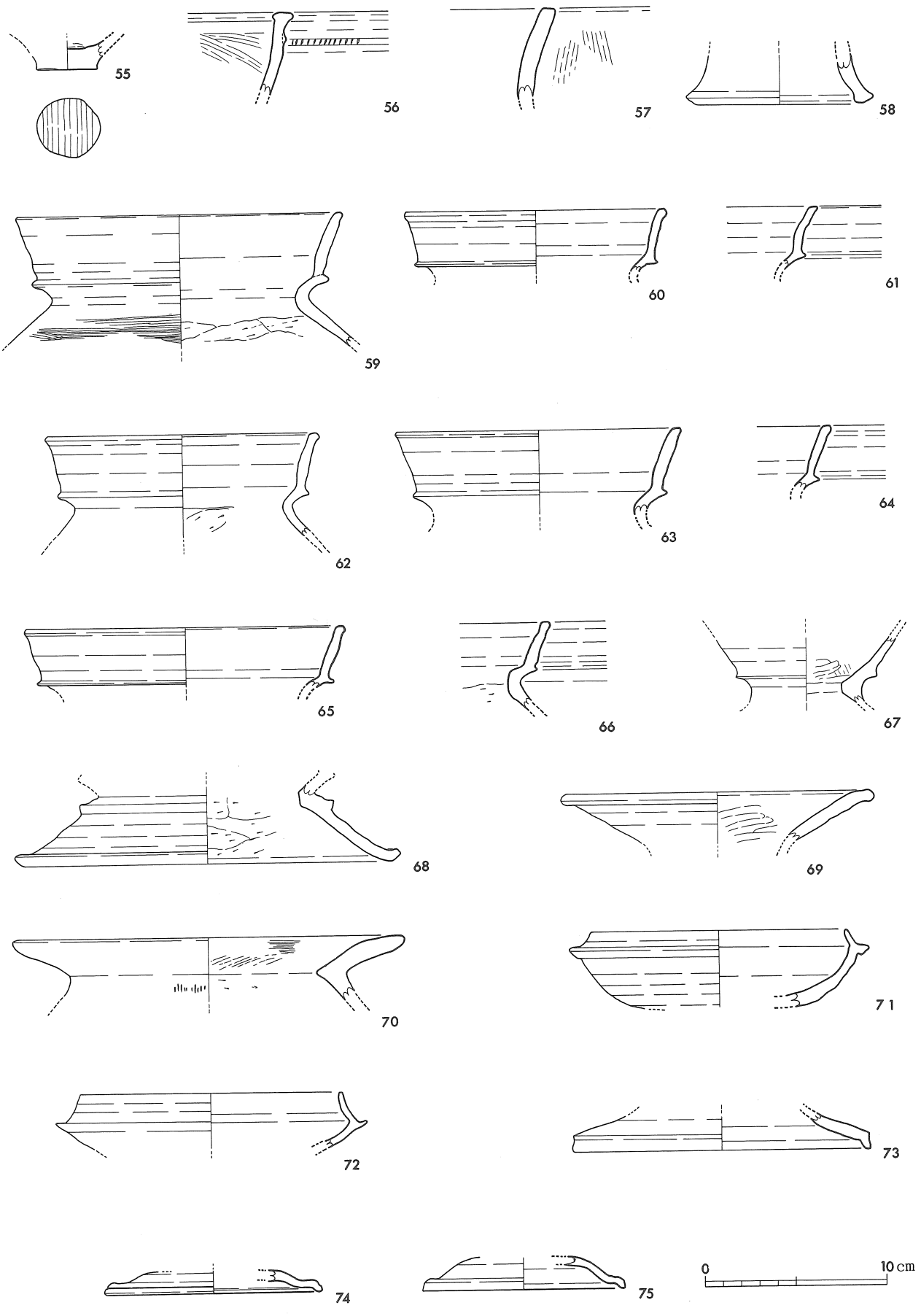
第58図－38～54は、弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。38は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。同様なタイプのものには40・41・43・47がある。39は、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がる。外面は縦方向のやや幅が広いミガキ、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。なお、外面がやや幅の広いミガキによって調整されるタイプのものには、42・44・46などがあり、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がるものには、44・47などがある。45・46は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。48は、底径5.2㎝とやや小さく、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のミガキと細かいハケ、内面はナデによる調整が行われている。49も底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のやや幅が広いミガキ、内面底部付近はナデ、その上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。50は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。このように、外面が縦方向のハケによって調整される土器は出雲地域では珍しい。51は、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がる。外面はやや幅の広い縦方向のミガキ、内面底部付近はナデ、その上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。52は、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。53は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面底部付近は横方向の細かいハケ、その上方は丁寧な横方向のミガキ、内面も丁寧な横方向のミガキによる調整が行われている。なお、外面の一部にはススが付着している。54は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面は縦・横方向のミガキ、内面は丁寧な横方向のミガキによる調整が行われている。また、底部もミガキによって調整されている。53・54のように横方向のミガキによって調整される土器は、ＳＤ０３・ＳＤ０４・ＳＤ０９からも数点出土しているが、松本編年Ⅱ様式の系統を引くやや古い様相を示すものであろう。

以上のような壺あるいは甕の底部は、その特徴からおおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。このうち、53・54については、前述したようにやや古い様相を示すものであろう。

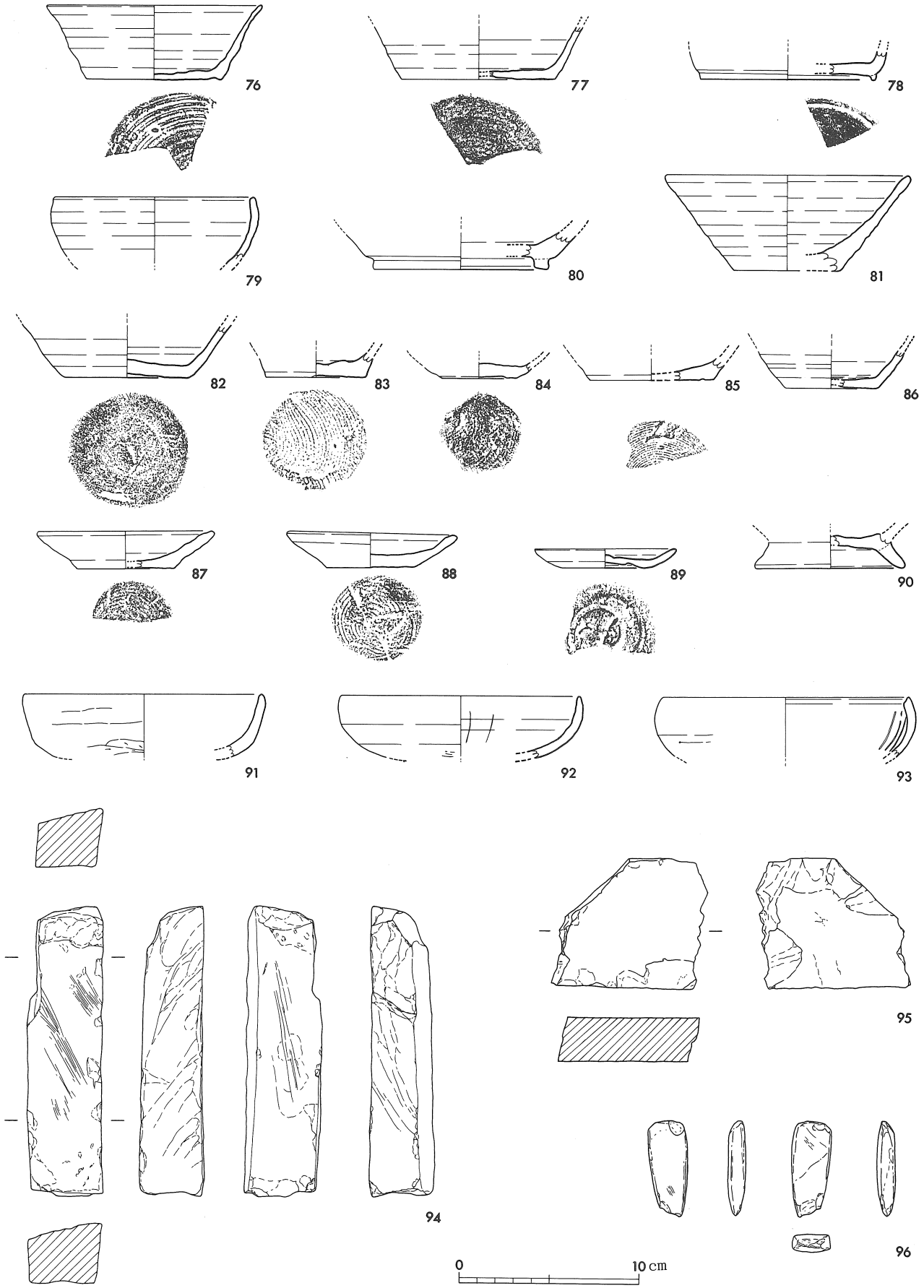
第59図－55は、壺あるいは甕の底部であるが、底径3.3㎝と小さいものである。底部外面は板



第58図　遺構外出土遺物実測図(3)



第59図　遺構外出土遺物実測図(4)



第60図　遺構外出土遺物実測図(5)

目（あるいはハケ）による調整が行われている。底径が小さく、胴部が張り出すという特徴から、松本編年Ⅴ様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期のものであろう。

56・57は、弥生土器の鉢であろうか。56は、口縁部が肥厚して口縁端部は内外に水平方向に突出している。外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方はナデ、内面は丁寧な斜め方向のミガキによる調整が行われている。57は、やや外傾して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はほぼ平坦におさめている。外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。

以上のような鉢は、57がやや古い様相を示すものの、松本編年Ⅲ－1～2様式の範疇に入る資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

58は、弥生土器高坏の脚部である。脚端部は肥厚して内外にわずかに拡張し、平坦面を作り出している。裾部は内外面ともにナデによる調整が行われている。弥生時代中期中葉頃のものであろう。

第59図－59～66は、複合口縁をもつ古式土師器の甕である。59は、口縁端部をわずかに外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁の稜は水平方向に向いている。口縁部は内外面ナデ、頸部下の外面は横方向のハケ、内面はケズリによって調整されている。60は、口縁端部を外方に折り曲げているが平坦面を作らず、丸みを帯びておさめ、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出している。このような形態をもつものには、64～66がある。61は、口縁端部は折り曲げていないがほぼ平面におさめている。62・63は、口縁端部を外方に折り曲げて口縁端部に平坦面を作っている。

以上のような甕は、その特徴から、59・62・63については草田編年7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期初頭のものであろう。また、60・61・64～66は草田編年6期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

67～69は古式土師器の器台である。67は、筒部から受部にかけての破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。68は、脚部から筒部にかけての破片で、脚端部を上方に折り曲げている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に突出するがやや鋭さを欠く。69は受部の破片で、外面はナデ、内面は縦方向のミガキによる調整が行われている。

以上のような器台については時期的な判断は難しいが、他の古式土師器の形態的特徴から考えると草田編年5～7期に相当する資料と考えられる。

70は、土師器の甕である。口縁部は鋭く外方に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面はナデ、内面はナデと一部にハケによる調整が行われ、頸部下の外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。古墳時代後期以降の遺物であろう。

71・72は須恵器の坏身である。71は、口縁部は鋭く内傾し、外面上方は回転ナデ、下方はケズリ、内面は回転ナデにより調整されている。高広編年[21]ⅠB～ⅡA期頃にかけての資料と考えられ、6世紀末から7世紀前葉にかけてのものであろう。72は、口縁部は内傾して長く伸び、内外面は回転ナデによって調整されている。71よりやや古めの特徴をもつもので、高広編年ⅠA～ⅠB期、6世紀後葉から7世紀初頭にかけてのものであろう。

73～75は坏蓋である。73は、口縁部にはかえりがなく、短く直立するもので、内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。74・75は器高が低く、口縁端部は屈曲して短く直立するもので

ある。いずれも高広編年ⅢＢ期以降に相当する資料で、７世紀末～８世紀代のものであろう。

第60図－76～80は、須恵器坏である。76は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。形態的には77もほぼ同様であり、８世紀中葉以降に出現する器形である。78は、高台をもつ坏である。高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。79は、坏の口縁部から体部にかけての破片で、内湾しながら立ち上がり、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。80は、高台をもつ坏で、高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。79は８世紀中頃、78・80は８世紀末以降のものであろうか。

81～86は土師器の坏である。81は、底径5.8㎝、口径13.3㎝、器高5.5㎝を測り、底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。10世紀前後のものであろう。82・86は、底部が静止糸切り後、ナデによって糸切り痕を消している。83は、底部に回転糸切りの痕跡が２度ある。84・85は内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。82・86は奈良時代、84・85は平安時代以降のものであろう。

87～89は、土師器の小皿である。87・88は内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りにより切り離されている。89は、底部がヘラ切りによって雑に切り離されている。土師器小皿は11世紀後半以降に出現する器形であることから、それ以降のものであろう。

91～93は、土師器高坏であり、内外面ともに朱塗りされるものである。91は、坏部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面上方はナデ、下方はケズリ、内面はナデによる調整が行われている。また、内外面の朱は、一般的にみられる朱と異なり、暗赤褐色を呈している。成分の違いであろうが、このような朱は、出雲地方の山間部でよくみられるものである。92は、坏部が内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面はナデと下方の一部にはハケ、内面はナデによって調整され、内面には暗文が施されている。93は、坏部が内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾して平坦面を作り出している。外面上方はナデ、下方はケズリ、内面はナデによる調整が行われ、暗文が施されている。以上のような高坏は、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであろう。

94～96は、石器である。94は、ほぼ完形の砥石であり、三面に使用痕が残っている。石材には安山岩を用いている。95は、両端が欠損しており、用途は不明であるが、二面に使用痕が残っている。砥石として使用された可能性もあろう。石材には桂質頁岩を用いている。96は、扁平片刃石斧である。刃部が欠損しているが、全面を磨いている。石材には桂質頁岩を用いている。94・95については時期は不明であるが、96は弥生時代のものであろう。

註

(1) 「天満谷遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会（1987年）

(2) 「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢　第18集』川原和人・桑原真治（1987年）

(3) 「藤ヶ森遺跡（Ⅰ地点・Ⅱ地点）発掘調査報告書」　出雲市教育委員会（1998年）

(4) 「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」　島根県教育委員会（1982年）

(5) 角田徳幸氏（島根県埋蔵文化財調査センター）の御教示による。

(6) 角田徳幸氏（島根県埋蔵文化財調査センター）の御教示による。

(7) 「池の奥古墳群」『松江東工業団地内発掘調査報告書』（1990年）

(8) 「中竹矢1号墳・長峯遺跡」　松江市教育委員会（1987年）

(9) 「南講武草田遺跡」　鹿島町教育委員会（1992年）

(10) 「弥生土器の様式と編年・山陰・山陽編」　正岡勝夫・松本岩雄編　木耳社（1992年）

(11) 「朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ」　島根県教育委員会（1987年）

(12) 「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）」　島根県教育委員会（1988年）

(13) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」　出雲市教育委員会（1997年）

(14) 「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）」島根県教育委員会（1991年）

(15) 「天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ」　出雲市教育委員会（1986年）

(16) 「吉田遺跡第Ⅰ地区Ａ区出土の弥生時代中期後半の土器について」『山口大学遺跡調査研究年報Ⅺ』豆谷和之（1993年）

(17) 「大木権現山古墳群」　東出雲町教育委員会（1979年）

(18) 「南講武草田遺跡」　鹿島町教育委員会（1992年）

(19) 「山持川川岸遺跡」　出雲市教育委員会（1996年）

(20) 「天神遺跡」　出雲市教育委員会（1977年）

(21) 「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会（1984年）

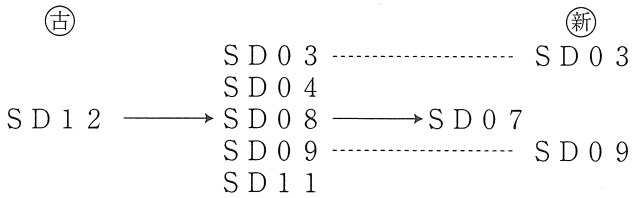
Ⅴ．総　　括

１．遺構

(1) 弥生時代中期中葉頃の遺構

弥生時代中期中葉頃に築かれた遺構は、溝状遺構９条（ＳＤ０３・０４・０７～０９・１１・１２）を検出している。平面形態はＳＤ１２が途中で分岐し、やや蛇行しているが、その他の溝状遺構は全てが直線状のものである。また、ＳＤ０７以外は東南東から西北西に伸びるもの（ＳＤ０３・０４・０８・０９・１１・１２）であることが特徴である。深さは0.1～0.2 mと浅いものがＳＤ０７・０８・１１、0.5m程度のものがＳＤ０３・０４・１２、それ以上、深さ1.0 mのものがＳＤ０９である。また、溝の幅が、1.0m以下のものはＳＤ０７・１１、1.0～1.5m程度のものがＳＤ０８、それ以上の大規模なものがＳＤ０３・０４・０９・１２であり、ＳＤ０９に至っては溝幅5.52 mを測る非常に大規模なものである。

これらの溝状遺構は複雑な切合関係を有しているが、相互の関係を整理して示すと次のようになる。



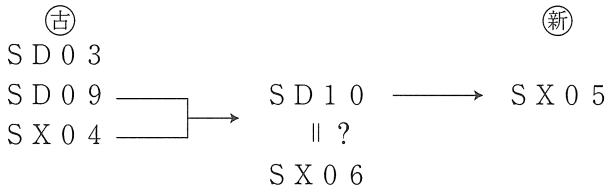
このうち、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが出土している遺構は、ＳＤ０４・０７・０８・１１・１２で、切合関係から、ＳＤ１２が最も古い遺構であることが明らかである。しかし、ＳＤ０３・０９については、弥生時代中期中葉頃の遺物が圧倒的に多いが、中には弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が混入していることから、注意が必要である。覆土には、掘り直しと考えられるような箇所は認められない。また、古式土師器は底面直上からも検出されており、弥生時代後期と考えられる遺物はほとんど含まない。このことからＳＤ０３・０９は、弥生時代中期中葉頃に築かれた溝が、後期にはほとんど機能しなくなり、弥生時代終末期に再び同じ箇所を掘り返して利用された可能性が強い。

また、ＳＤ０９については、第７次発掘調査[(1)]Ａ区で検出された大溝１（第61図）と遺構の規模・方向がほぼ一致する。大溝１からは、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが検出されていることから、当該期の遺構と解されている。しかし、調査範囲も狭小であり、上面が他の遺構によって切られているために時期的判断はし難く、ＳＤ０９と同一の溝である可能性が指摘できる。

これら溝状遺構の性格については、水路・区画を示すものなどいくつかの可能性が考えられるが、調査範囲も狭く、その様相を据えることは困難である。しかし、ＳＤ０３・０４・０９については、溝の規模や時期から考えても第７次発掘調査で検出されたような集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。なお、第７次発掘調査時にもそうであったように、溝の方向が、ほぼ同一方向に伸びる傾向にあることは、今後も注視していく必要がある。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構

当該期の遺構は、前述したＳＤ０３・０９を含めると、溝状遺構３条（ＳＤ０３・０９・１０）、落ち込み状遺構３（ＳＸ０４・０５・０６）を検出している。それぞれの遺構が複雑な切合関係を有しているが、相互関係を整理して示すと次のようになる。



出土遺物は総じて少ないが、この中でもっとも新しい時期の遺構であるＳＸ０５からは、古墳時代前期初頭の遺物が検出されており、他の遺構はこれよりも古い遺構であることが明らかである。しかし、ＳＤ０９は弥生時代終末期に再び掘り直されたと考えられることから、これらの遺構が機能していたのは比較的短期間であったと思われる。

第61図　第7次調査大構1実測図

なお、これらの遺構の性格については、調査範囲も狭いうえ、新しい時期の遺構によって切られている部分が大きく、判断し難い。

(3) 古代から中世にかけての遺構

この時期に築かれた遺構には、溝状遺構１条（ＳＤ０６）、土坑状遺構５（ＳＫ０２～ＳＫ０６）、ピット状遺構９（Ｐ１～Ｐ９）を検出している。

これらのうち、平安時代末期頃に築かれたと考えられる遺構には、ＳＫ０３～ＳＫ０６・Ｐ４～Ｐ９がある。特にＳＫ０４・ＳＫ０６からは多くの遺物が検出されているうえ、白磁も共伴していることから、良好な資料となっている。時期的には、11世紀後半から12世紀代にかけての遺構であろう。

また、切合関係からやや新しい時期に築かれた遺構には、ＳＫ０２・ＳＸ０２・０３・Ｐ１～Ｐ３がある。これらの遺構は、上部が削平されているために残存状況が悪く遺物も認められないが、少なくとも12世紀後半以降に築かれた遺構である。

遺構の性格については、ＳＫ０３・０４・０５・０６は最深部は灰白色粗砂層に達し、かなりの湧水があることから考えても井戸として利用されていたと考えられる。このうちＳＫ０３の下層には木片が認められ、ＳＫ０６からは側板・杭が検出されていることから、木枠組みの井戸であったと考えられる。ＳＫ０４・０５については、素掘りの井戸であったようで、木片などは確認されていない。なお、ＳＫ０４・０６は大量の遺物が出土していることから、井戸を廃棄する際に、土器を投げ入れて祭祀を行った可能性が指摘される。

その他の遺構の性格については、上部が削平されていることや調査範囲が狭いことから判断し難い。なお、ピット状遺構については、建物跡と想定できるような配置は認められない。

２．遺物

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代の出土遺物は調査を通して最も多く、器種には壺・甕・鉢・高坏・蓋などがある。時期的には松本編年[(2)]Ⅲ－１～２様式に相当するものがほとんどであるが、中にはⅥ－１様式・Ⅴ様式に相当するものも若干認められている。

壺には、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部が拡張して口縁拡張部から内面にかけて文様を施す例が圧倒的に多い。中でもクシ状工具によって斜格子文を施すものの割合が多く、これらは「天神式」と呼べるものであろう。特異なものとしては、第49図－16のように口縁部が水平方向に突出し、口縁端部を丸くおさめているものがある。瀬戸内・北部九州地方の影響を受けたものであろう。

甕は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部に平坦面をもつものと丸くおさめるものが多く、頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されるものがほとんどである。特異なものとしては、口縁部外面が丁寧なミガキによって調整される第49図－18などがある。

壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片には、この時期のものとしてはやや特異なものが数点出土している。この時期のものは、外面は縦方向のミガキ、内面はナデ、またはハケによって調整が行われるのが一般的である。しかし、内面が横方向のミガキによって調整される（第30図－１など）

もの、外面が横方向のミガキによって調整される（第45図－7）もの、内外面とも横方向のミガキによって調整される（第58図－53など）ものが検出されている。これらの土器は、Ⅱ－1様式の系譜を引く、やや古い様相を示すものではないだろうか。

鉢・高坏にもやや異なる形態的特徴をもつものがある。在地的な手法の特徴で、一般的なもののバリエーションの中で考えられるものである。

弥生時代の石器も数点出土しており、砥石や扁平片刃石斧などが出土している。中でも、第41図－47は朱の痕跡のようなものが認められ、注目すべき遺物である。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物

この時期の遺物は量的には少ないが、器種には甕・高坏・低脚坏・器台などがある。時期的には草田編年[(3)]5期～7期に相当する資料である。

このうち、甕には布留式傾向の特徴をもつもの（第52図－75～78）が数点出土している。これらは、出雲地域の胎土とほとんど同じであることから、畿内の甕を模倣して作られたものと考えられる。他の器種は出雲地域の特徴をもつものであり、一般的な調整により作られているものである。

(3) 古代から中世にかけての遺物

この時期の遺物は、ＳＫ０４・０６など遺構内からの出土量が多く、そのうち、土師器坏が大部分を占めている。器種としては、土師器坏のほか、足高高台付坏・台付坏・小皿・甕・須恵器壺・白磁碗がある。

足高高台付の坏・小皿は、１１世紀後半以降に出現する器形であるとともに、11世紀後半から12世紀代にかけての口縁部に玉縁状の突帯が付く白磁が出土していることから、この時期の土師器の編年を考えるうえで、貴重な資料である。

また、土師器甕の中には外面がタタキ、内面が強いケズリによって調整される出雲地域では珍しいものも出土しており、注意すべき資料である。

3．おわりに

今回の発掘調査では範囲が極めて限定されていたこともあり、遺構の性格を十分に把握することができなかった。しかし、周辺には大規模な溝状遺構が多数存在することが明らかであり、その中には、環濠として機能していた可能性があるものがある。天神遺跡の周辺は早くから宅地化が進み、立錐のすきまもないほどであるが、今後調査する機会があれば、遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。

註

(1) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会（1997年）

(2) 「弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編」正岡勝夫・松本岩雄編　木耳社（1992年）

(3) 「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会（1992年）

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13－1	B3Gr SK03	土師器 坏	－	5.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	普通 1㎜大の褐色砂粒・石英を含む	普通	
－2	B3Gr SK03 （下層）	土師器 坏	－	4.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	普通 石英を多く含む	良好	
－3	B3Gr SK03 （下層）	土師器 坏	－	5.9	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡橙褐色 内／橙褐色 断／褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
－4	B3Gr SK03 （下層）	土師器 坏	－	4.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	普通 石英を多く含む	良好	
16－1	B4Gr SK04	土師器 坏	－	6.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－2	B4Gr SK04 （中層～下層）	土師器 坏	－	4.7	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	密 石英を多く含む	良好	
－3	B4Gr SK04	土師器 坏	15.7	6.0	4.1	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－4	B4Gr SK04 （中層～下層）	土師器 坏	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	暗褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－5	B4Gr SK04	土師器 坏	－	5.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	普通	
－6	B4Gr SK04	土師器 坏	14.0	5.8	4.6	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	外面スス付着
－7	B4Gr SK04	土師器 坏	－	6.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－8	B4Gr SK04	土師器 坏	－	6.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／黒褐色 内／赤褐色 断／黒褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－9	B4Gr SK04 （中層～下層）	土師器 坏	－	6.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	暗褐色 （一部橙褐色）	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－10	B4Gr SK04	土師器 坏	15.6	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	黒褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
－11	B4Gr SK04	土師器 小皿	7.2	4.0	1.35	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	内／暗褐色 外／暗褐色 断／橙褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	内外面にスス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
16－12	B4Gr SK04	土師器 小皿	7.4	3.8	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－13	B4Gr SK04 （中層～下層）	土師器 小皿	7.6	4.0	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡灰褐色	普通 石英を含む	良好	
－14	B4Gr SK04	土師器 足高高台付坏	－	8.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－15	B4Gr SK04	土師器 台付 坏	－	3.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄橙色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－16	B4Gr SK04	白磁 碗	19.7	－	－	外／ナデ 内／ナデ	乳白色	密	良好	
19－ 1	A4Gr SK05	土師器 坏	－	4.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－ 2	A4Gr SK05 （中層）	土師器 坏	－	4.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英を含む	良好	
－ 3	A4Gr SK05	土師器 坏	－	5.3	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄褐色	密 石英を含む	普通	
－ 4	A5Gr SK05	土師器 坏	－	4.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
－ 5	A5Gr SK05	土師器 坏	21.8	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／橙褐色 内／暗褐色 断／橙褐色	密 石英を含む	良好	口縁部にスス付着
－ 6	A4Gr SK05	土師器 小皿	8.6	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡褐色	密 石英を多く含む	良好	
－ 7	A4Gr SK05	土師器 小皿	8.8	3.9	1.95	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄橙色	密 石英を含む	良好	
22－ 1	A3Gr SK06	土師器 坏	14.8	6.2	4.75	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／褐色 内／橙褐色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	回転水引き痕明瞭に残る
－ 2	A3Gr SK06	土師器 坏	16.0	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	回転水引き痕残る
－ 3	A3Gr SK06 （下層）	土師器 坏	－	5.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・金雲母を多く含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22－ 4	B3Gr SK06	土師器 坏	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	底部に厚みがある
－ 5	B3Gr SK06	土師器 坏	－	5.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－ 6	B3Gr SK06	土師器 坏	－	7.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／黒褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－ 7	B4Gr SK06 （中層）	土師器 坏	－	5.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・金雲母を含む	良好	
－ 8	B3Gr SK06	土師器 坏	－	4.3	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
－ 9	B3Gr SK06	土師器 坏	－	6.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／褐色 内／橙褐色 断／橙褐色	普通 褐色粒子・石英を含む	普通	
－10	A3Gr SK06 （下層）	土師器 坏	－	5.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄橙色	密 石英・雲母を含む	良好	
－11	B3Gr SK06 （下層）	土師器 坏	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／灰褐色 内／褐色 断／淡褐色	普通 石英を含む	普通	
－12	B3Gr SK06 （下層）	土師器 坏	－	5.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－13	B3Gr SK06 （下層）	土師器 坏	－	5.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	回転水引き痕明瞭に残る
－14	B3Gr SK06	土師器 坏	－	5.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－15	B4Gr SK06	土師器 坏	－	5.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	底部にヘラ状工具による調整痕あり
－16	A4Gr SK06	土師器 坏	－	7.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・金雲母を含む	普通	
－17	B3Gr SK06	土師器 坏	12.2	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－18	B3Gr SK06	土師器 坏	14.0	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22－19	A3Gr SK06	土師器 坏	15.6	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－20	A3Gr SK06	土師器 坏	15.0	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／褐色 内／橙褐色 断／橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－21	B4Gr SK06 （中層）	土師器 坏	－	5.9	－	外／回転ナデ？ 内／回転ナデ？ 底／回転糸切り？	暗褐色 （一部橙褐色）	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	須恵器のような焼成
23－22	B3Gr SK06	土師器 小皿	8.0	4.6	2.1	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英・金雲母を含む	良好	外面口縁部にスス付着
－23	A4Gr SK06 （下層）	土師器 小皿	7.4	4.0	1.75	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	普通	良好	
－24	A3Gr SK06 （上層）	土師器 小皿	9.3	5.6	2.15	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・褐色粒子・石英・金雲母を含む	普通	
－25	A3Gr SK06 （下層）	土師器 小皿	10.3	5.0	1.95	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
－26	B4Gr SK06	土師器 小皿	8.2	4.4	2.4	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	密 石英を含む	良好	
－27	B3Gr SK06	土師器 小皿	8.9	4.8	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－28	B3Gr SK06	土師器 台付 坏	－	4.8	－	外／回転ナデ 内／不明 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
－29	B4Gr SK06 （下層）	土師器 足高高台付 坏	－	4.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－30	B5Gr SK06	土師器 足高高台付 坏	－	7.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／褐色 内／褐色 断／橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	坏部内面に黒褐色の付着物あり
－31	A3Gr SK06 （上層）	土師器 足高高台付 坏	－	9.5	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡褐色	密 褐色粒子・石英・金雲母を含む	良好	
－32	A3Gr SK06	土師器 足高高台付 坏	－	5.5	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡褐色	密 石英を含む	良好	
－33	A3Gr SK06	土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／不明 内／ケズリ	外／黒褐色 内／橙褐色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	搬入品の可能性あり 外面スス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
23－34	A4Gr SK06	土師器 甕	25.5	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／タタキ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／橙褐色 断／褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	搬入品の可能性あり 外面スス付着
－35	A4Gr SK06 （中層）	土師器 甕	－	－	－	外／タタキ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／橙褐色 断／黒褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	搬入品の可能性あり 外面スス付着
－36	B3Gr SK06 （下層）	土師器 甕	23.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／タタキ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／褐色 断／褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	搬入品の可能性あり 外面スス付着
－37	A3Gr SK06 （上層）	土師器 高坏	14.0	－	－	坏部内外面ナデ 脚部付近外面一部ハケ	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内外面朱塗り
－38	A3Gr SK06	土師器 甕	21.6	－	－	口縁部　外／ナデ 内／ナデ、一部ハケ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	黒褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－39	A4Gr SK06	須恵器 壺	－	6.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黒褐色	密	良好	内面底部に自然釉がかかる
－40	B3Gr SK06	白磁 碗	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡緑灰色	密 1㎜以下の黒灰色粒子を含む	良好	口縁部に玉縁がつく
25－ 1	B5Gr SX05	古式土師器 甕	15.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／直線文、斜め方向ハケ 内／ケズリ	黄褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
31－ 1	南側溝 土器群1 （SD03）	弥生土器 壺or甕	－	8.6	－	外／縦方向ミガキ 内／底部付近横方向ミガキ、斜め方向ハケ	外／褐色 内／淡黄褐色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	外面胴部にスス付着 内面胴部に指頭圧痕残る
32－ 2	A1Gr SD03	弥生土器 壺	27.4	－	－	内外面ナデ 口縁端部の両端に刻目文	外／褐色 内／黄褐色 断／褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	普通	口縁端部上下にわずかに拡張する
－ 3	A1Gr SD03	弥生土器 壺	17.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ 口縁端部に斜格子文	外／褐色 内／黄褐色 断／褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上下にわずかに拡張する
－ 4	B2Gr SD03	弥生土器 壺	19.4	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	普通 石英を含む	普通	口縁端部上下にわずかに拡張する
－ 5	A1Gr SD03	弥生土器 壺	16.2	－	－	口縁部内外面ナデ	外／橙褐色 内／橙褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	普通	
－ 6	B3Gr SD03	弥生土器 甕	15.8	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－ 7	B2Gr SD03	弥生土器 壺	30.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部の両端に刻目文	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	口縁端部上下に拡張する

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
32－ 8	A1Gr SD03	弥生土器 壺	－	－	－	外／頸部貼付突帯に刻目文、肩部に直線文・波状文 内／ナデ	外／褐色 内／淡黄褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	
－ 9	A1Gr SD03	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に円形浮文・刻目文	外／褐色 内／黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁部内面に三角形文帯を貼付け刻目文
－10	A1Gr SD03	弥生土器 甕	16.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ケズリの後、斜め方向ハケ	外／淡黄褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－11	B2Gr SD03	弥生土器 甕	16.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／縦・斜め方向にハケ	淡黄褐色	やや粗い 石英を含む	やや不良	口縁部に斜格子文
－12	A1Gr SD03	弥生土器 甕	19.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	
－13	B3Gr SD03	弥生土器 甕	13.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－14	B3Gr SD03	弥生土器 甕	13.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に刻目文	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
－15	B3Gr SD03	弥生土器 甕	18.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に刻目文	外／褐色 内／淡黄褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－16	A1Gr SD03	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ケズリの後、ミガキ	外／褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－17	B2Gr SD03	弥生土器 甕	12.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ミガキ、斜め方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
33－18	南側溝土器群1（SD03）	弥生土器 甕	29.1	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／縦・斜め方向ハケ	外／淡黄褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－19	A1Gr SD03	弥生土器 甕	29.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／横方向ハケ	外／黄褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－20	B2Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	10.4	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／剥離のため不明	外／橙褐色 内／不明 断／灰褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	
－21	B2Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	7.6	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	褐色（一部赤褐色）	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－22	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	5.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	外／淡黄褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
33－23	B2Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	9.3	－	外／風化著しく不明 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／淡橙色 内／褐色 断／淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	不良	
－24	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	7.6	－	外／縦方向ミガキ 内／ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／赤橙色 内／灰褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	
－25	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	14.0	－	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ハケ	外／淡褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－26	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	5.9	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ、底部付近に指頭圧痕残る	外／淡褐色 内／灰褐色 断／褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－27	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	7.2	－	外／風化著しく不明 内／縦方向ケズリ	外／暗赤褐色 内／赤褐色 断／淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	不良	
－28	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	7.6	－	外／縦方向ミガキ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
34－29	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	10.5	－	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	
－30	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	－	6.8	－	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ・ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－31	A1Gr SD03	古式土師器 甕	15.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下不明	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	口縁端部丸くおさめる
－32	A1Gr SD03	古式土師器 甕	16.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部平坦に作る
－33	B3Gr SD03	古式土師器 甕	14.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／淡黄褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	口縁端部平坦に作る
－34	A1Gr SD03	古式土師器 甕	12.4	－	－	口縁部内外面ナデ	外／淡黄褐色 内／黄褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	口縁端部外方に折りまげる
－35	A1Gr SD03	古式土師器 器台	22.8	－	－	外／ナデ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	受部破片
－36	A1Gr SD03	古式土師器 器台	－	17.8	－	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
－37	A1Gr SD03	ミニチュア土器	5.2	3.3	3.95	外／手捏ね、脚部付近ミガキ 内／手捏ね	褐色 （一部黒褐色）	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
38－ 1	A2Gr SD04	弥生土器 壺	21.3	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／横方向ハケ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－ 2	A1Gr SD04	弥生土器 壺	23.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／不明	褐色	密 石英を含む	良好	口縁端部下垂する
－ 3	A1Gr SD04	弥生土器 壺	22.8	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部の上端に刻目文	褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－ 4	A2Gr SD04	弥生土器 壺	23.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に斜格子文	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－ 5	A2Gr SD04	弥生土器 壺	25.5	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜線文 口縁内面に斜格子文	外／橙褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－ 6	B2Gr SD04	弥生土器 壺	34.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文 口縁内面に斜格子文・刺突列点文	外／褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する 外面に指頭圧痕残る
－ 7	A2Gr SD04	弥生土器 壺	29.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁内面に指頭圧痕文帯貼付ける	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－ 8	SD04	弥生土器 壺	33.6	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜線文・上端に刻目文 口縁内面に斜格子文・三角形文帯に刻目文	黄褐色	普通 石英を含む	やや不良	頸部外面縦方向ハケ
39－ 9	SD04	弥生土器 壺	19.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／ナデ、指頭圧痕残る	外／黄褐色 内／淡黄褐色 断／淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部上方に拡張する
－10	A2Gr SD04	弥生土器 壺	－	－	－	口縁端部に円形浮文 貝殻による刺突文 外／縦方向ハケ 内／横方向ミガキ	外／赤褐色 内／橙褐色 断／褐色	密 石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－11	A1Gr SD04	弥生土器 壺	－	－	－	外／頸部に指頭圧痕文帯貼付ける、縦方向ハケ 内／ナデ	褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	頸部破片
－12	SD04	弥生土器 壺	－	－	－	外／頸部に2条以上の三角形文帯貼付ける、縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／黄褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	頸部破片
－13	A1Gr SD04	弥生土器 甕	24.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁端部に刻目文
－14	A1Gr SD04	弥生土器 甕	20.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ	褐色	普通 石英を含む	良好	
－15	B2Gr SD04	弥生土器 甕	26.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／縦方向ハケ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
39－16	A1Gr SD04	弥生土器 甕	20.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方にやや拡張する
－17	A2Gr SD04	弥生土器 甕	29.3	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	普通 石英・金雲母を含む	良好	
－18	A1Gr SD04	弥生土器 甕	17.5	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／褐色	密 石英・金雲母を含む	やや不良	
－19	A2Gr SD04	弥生土器 甕	22.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／橙褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部上方にやや拡張する
－20	A1Gr SD04	弥生土器 甕	15.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	外／橙色 内／橙褐色 外／橙色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部上方にやや拡張する
－21	A1Gr SD04	弥生土器 甕	23.1	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／縦・斜め方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－22	A1Gr SD04	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
40－23	A2Gr SD04	弥生土器 甕	22.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－24	A1Gr SD04	弥生土器 甕	16.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ミガキ？	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－25	A2Gr SD04	弥生土器 甕	18.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－26	SD04	弥生土器 甕	14.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下／不明	橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－27	A2Gr SD04	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／淡橙褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－28	B2Gr SD04	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	外／橙褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－29	A2Gr SD04	弥生土器 鉢？	－	－	－	外／縦方向ハケ 内／ナデ	褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部平坦に作る
－30	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	10.8	－	外／縦方向にヘラ状工具による調整 内／風化著しく不明	外／橙褐色 内／褐色 断／橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
40－31	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	5.8	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	普通	
－32	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	7.7	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	淡黄褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－33	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	8.4	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	不良	
－34	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	9.0	－	外／縦方向ミガキ 内／剥離のため不明	外／淡黄褐色 内／不明 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	普通	
－35	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	7.8	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／淡黄褐色 断／淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－36	A2Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	5.1	－	外／縦方向ミガキ 内／風化著しく不明	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－37	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	5.7	－	外／縦方向ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る	褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－38	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	6.7	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／ケズリ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	底部に籾痕あり
－39	B2Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	6.3	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	外／橙褐色 内／黒褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－40	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	5.5	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ、底部付近に指頭圧痕残る	外／黒褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－41	A2Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	6.4	－	外／縦方向ミガキ 内／一部ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／黒褐色 断／灰褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	普通	
－42	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	7.2	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／黒色 内／黒褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	
－43	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリの後ハケ、横方向ミガキ	外／黒色 内／淡黄褐色 断／褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－44	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／縦方向ミガキ 内／刺突具で突いたような調整、底部付近に指頭圧痕残る	外／淡橙褐色 内／褐色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内面底部にスス付着
41－45	B2Gr SD04	弥生土器 壺or甕	－	6.0	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／横方向ミガキ	外／淡黄褐色 内／黒褐色 断／灰褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
45－1	A5Gr SD08	弥生土器 壺	17.7	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に上下から刻目文	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	
－2	B7Gr SD08	弥生土器 壺	17.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	
－3	A5Gr SD08	弥生土器 甕	16.3	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－4	B7Gr SD08	弥生土器 甕	20.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－5	A5Gr SD08	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	黄橙色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－6	A5Gr SD08	弥生土器 壺or甕	－	5.4	－	外／縦方向ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	不良	
－7	A5Gr SD08	弥生土器 壺or甕	－	5.4	－	外／横方向ミガキ 内／縦・斜め方向ハケ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	搬入土器の可能性あり
－8	A5Gr SD08	弥生土器 高坏	－	16.0	－	外／縦方向ミガキ 内／縦・斜め方向ハケ	褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	脚端部平坦に作る
－9	B7Gr SD08	弥生土器 高坏	－	15.0	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ、脚端部はナデ	外／褐色 内／橙褐色 断／橙褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	不良	脚端部平坦に作る
48－1	B3Gr SD09	弥生土器 壺	21.8	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文、両端に刻目文	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・金雲母を含む	普通	
－2	B3Gr SD09	弥生土器 壺	20.5	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－3	B3Gr SD09	弥生土器 壺	17.4	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部上方にやや拡張する
－4	B3Gr SD09	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部上端に刻目文	淡橙褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－5	A3Gr SD09	弥生土器 壺	28.4	－	－	口縁部内外面ナデ	外／淡褐色 内／褐色 断／黒灰色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－6	A3Gr SD09	弥生土器 壺	31.1	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に斜格子文	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
48－ 7	A3Gr SD09	弥生土器 壺	22.4	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文 口縁内面に波状文	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－ 8	B4Gr SD09	弥生土器 壺	26.4	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に斜格子文 口縁内面から外面に2つの穿孔あり	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	口縁端部下垂する
－ 9	B4Gr SD09	弥生土器 壺	23.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に斜格子文	淡黄褐色	粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部下垂する 口縁内面に直線文が入る
－10	A3Gr SD09（下層）	弥生土器 壺	29.6	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 口縁内面に波状文・刺突列点文	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－11	A3Gr SD09	弥生土器 壺	22.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文、口縁内面に斜格子文・刺突列点文・円形浮文	外／淡褐色 内／褐色 断／灰褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部下垂する 口縁内面から外面に5以上の穿孔あり
49－12	B3Gr SD09	弥生土器 壺	11.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	頸部に2以上の穿孔あり
－13	A3Gr SD09（下層）	弥生土器 壺	9.6	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－14	B3Gr SD09（下層）	弥生土器 甕or鉢	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	普通	頸部外面に三角形文帯を貼付け刻目文 外面スス付着
－15	A3Gr SD09	弥生土器 甕	17.7	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－16	B3Gr SD09（下層）	弥生土器 壺or高坏	20.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	搬入土器の可能性あり
－17	A3Gr SD09	弥生土器 壺	－	－	－	外／頸部に指頭圧痕文帯貼付ける、縦方向ハケ 内／ナデ、下方はミガキ？	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	
－18	A3Gr SD09	弥生土器 甕	21.6	－	－	外／口縁部ミガキ 内／ナデ	外／暗褐色 内／橙褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部に刻目文
－19	B4Gr SD09	弥生土器 無頸壺or鉢	16.4	－	－	外／指頭圧痕文帯貼付け、下方はナデ 内／斜め方向ハケ	外／橙褐色 内／淡橙褐色 断／褐色	密 石英を含む	普通	
－20	A3Gr SD09	弥生土器 無頸壺or鉢	38.8	－	－	外／端部に刻目文、指頭圧痕文帯貼付け、縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／黒色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－21	A3Gr SD09	弥生土器 無頸壺or鉢	17.6	－	－	外／端部に刻目文、胴部縦方向ハケ 内／ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
49－22	A3Gr SD09	弥生土器 無頸壺or鉢	－	－	－	外／端部に刻目文、4条の三角形文帯を貼付け、刻目文、下方に斜格子文? 内／ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	
－23	A3Gr SD09	弥生土器 甕	20.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ミガキの後、斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－24	B3Gr SD09	弥生土器 甕	18.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－25	A3Gr SD09	弥生土器 甕	26.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ナデ	褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	外面スス付着
50－26	B4Gr SD09（上層）	弥生土器 甕	27.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／三角形文帯を貼付け、刻目文 内／ナデ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	
－27	B3Gr SD09（下層）	弥生土器 甕	14.5	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	口縁端部上方にやや拡張する
－28	A3Gr SD09	弥生土器 甕	24.4	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部上方にやや拡張する 口縁端部にスス付着
－29	B3Gr SD09	弥生土器 甕	17.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部にスス付着
－30	B3Gr SD09	弥生土器 甕	21.0	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－31	A3Gr SD09	弥生土器 甕	16.4	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－32	A3Gr SD09（上層）	弥生土器 甕	19.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ナデ	淡灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－33	B3Gr SD09（下層）	弥生土器 甕	17.2	－	－	口縁部内外面ナデ	外／黄褐色 内／灰褐色 断／橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－34	B3Gr SD09	弥生土器 甕	19.5	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
－35	B3Gr SD09	弥生土器 甕	10.2	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－36	B3Gr SD09	弥生土器 高坏	19.2	－	－	口縁部内外面ナデ 坏部 外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ	外／褐色 内／黄褐色 断／淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部水平に突出する

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
50－37	A3Gr SD09	古式土師器 高坏？	－	19.2	－	外／横方向ミガキ 内／横方向ミガキ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－38	A3Gr SD09（下層）	古式土師器 高坏？	－	20.8	－	内外面ナデ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－39	A3Gr SD09	弥生土器 蓋	－	14.2	5.1	外／縦方向ハケ 内／横方向ハケ	褐色	密 石英を含む	良好	つまみ部に指頭圧痕残る
－40	B4Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	10.4	－	外／縦方向ミガキ 内／剥離のため不明	外／褐色 内／不明 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－41	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	4.2	－	外／縦方向ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／橙褐色 内／褐色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－42	B4Gr SD09（上層）	弥生土器 壺or甕	－	6.4	－	外／縦方向ミガキ 内／底部付近に工具痕？	黒褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	不良	
－43	B3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	8.4	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	外／暗褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－44	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	10.0	－	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ミガキ？底部付近に指頭圧痕残る	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	不良	
51－45	B4Gr SD09（下層）	弥生土器 壺or甕	－	9.6	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／淡灰褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－46	B4Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	9.6	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、指頭圧痕残る	外／赤褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
－47	B3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	淡黄褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－48	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	7.0	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	不良	
－49	B4Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	7.2	－	外／縦方向ミガキ 内／剥離のため不明	外／赤褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－50	B4Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	9.9	－	外／縦方向ミガキ 内／剥離のため不明	外／橙褐色 内／黒色 断／褐色	普通 1～2㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－51	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	6.8	－	外／縦方向ミガキ、底部付近ハケ 内／ケズリ	褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
51－52	B3Gr SD09 （下層）	弥生土器 壺or甕	－	3.7	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－53	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	8.8	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／淡褐色 断／黒褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	
－54	B3Gr SD09 （下層）	弥生土器 壺or甕	－	5.8	－	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ケズリ	外／赤褐色 内／黒褐色 断／橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－55	B3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	3.9	－	外／手捏ね、指頭圧痕残る 内／刺突具で突いたような痕跡あり	灰褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－56	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	8.6	－	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－57	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	－	－	外／手捏ね、指頭圧痕残る 内／手捏ね、指頭圧痕残る	灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－58	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甕	－	2.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	外／赤褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－59	A3Gr SD09	古式土師器 甕	14.7	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	
－60	A3Gr SD09	古式土師器 甕	16.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－61	A3Gr SD09	古式土師器 甕	28.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部平坦に作る 頸部下不明	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－62	A3Gr SD09	古式土師器 甕	12.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
52－63	B3Gr SD09 （下層）	古式土師器 甕	13.6	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部平坦に作る	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	内外面朱塗り
－64	B3Gr SD09	古式土師器 甕	12.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－65	A3Gr SD09	古式土師器 甕	13.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部平坦に作る	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	
－66	B4Gr SD09 （下層）	古式土師器 甕	－	－	－	外／頸部下に直線文、胴部ハケ 内／頸部下からケズリ	灰褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面胴部にスス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
52－67	B3Gr SD09	古式土師器 甕	16.6	－	－	口縁部内外面ナデ	黄褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－68	B3Gr SD09	古式土師器 甕	14.1	－	－	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－69	B3Gr SD09（下層）	古式土師器 甕	15.6	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－70	A3Gr SD09	古式土師器 甕	21.4	－	－	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－71	A3Gr SD09	古式土師器 甕	14.9	－	－	口縁部内外面ナデ	外／淡褐色 内／淡黄褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
－72	B3Gr SD09（下層）	古式土師器 甕	14.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部丸くおさめる	外／褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－73	A3Gr SD09	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－74	B3Gr SD09	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－75	B4Gr SD09	古式土師器 甕	15.0	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	布留式傾向甕
－76	B3Gr SD09	古式土師器 甕	15.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	布留式傾向甕 外面一部にスス付着
－77	A3Gr SD09	古式土師器 甕	13.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ハケ 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	布留式傾向甕 外面一部にスス付着
－78	A3Gr SD09	古式土師器 甕	17.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／間隔の広い波状文・直線文 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	布留式傾向甕 外面一部にスス付着
－79	B3Gr SD09	古式土師器 壺or甕	－	－	－	外／ナデ、一部ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－80	A3Gr SD09	古式土師器 高坏or 低脚坏	15.6	－	－	外／ハケ 内／横方向ミガキ	褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	円盤充填法
－81	A3Gr SD09	古式土師器 高坏or 低脚坏	15.5	－	－	外／ナデ 内／横方向ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
53－82	A3Gr SD09	古式土師器 高坏or 低脚坏	15.2	－	－	外／ナデ 内／横・縦方向ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－83	B3Gr SD09	古式土師器 高坏or 低脚坏	－	－	－	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ 坏部　外／ハケ 内／ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	円盤充填法
－84	B3Gr SD09	古式土師器 高坏or 低脚坏	－	－	－	脚部　外／風化著しく不明 内／ケズリ 坏部　内外面とも風化著しく不明	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－85	A3Gr SD09 （下層）	古式土師器 小型器台	－	－	－	裾部　外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	普通	外面に2以上の穿孔あり
－86	B3Gr SD09	古式土師器 高坏	－	14.8	－	裾部　外／風化著しく不明 内／ナデ 脚部　外／風化著しく不明 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－87	A3Gr SD09 （下層）	古式土師器 高坏	－	10.2	－	裾部内外面ナデ 脚部　外／ミガキ 内／ケズリ	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－88	A3Gr SD09	古式土師器 低脚坏	－	7.2	－	裾部から脚部にかけて内外面ナデ	外／橙色 内／淡橙色 断／橙色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－89	B3Gr SD09	古式土師器 器台	－	19.6	－	外／ナデ 内／ケズリ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片 外面スス付着
－90	B3Gr SD09	古式土師器 器台	－	－	－	外／ナデ 内／ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	受部破片
－91	B3Gr SD09	古式土師器 器台	－	－	－	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	筒部破片
－92	B3Gr SD09	古式土師器 器台	－	－	－	外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	密 石英を含む	普通	筒部破片
－93	B3Gr SD09	古式土師器 器台	－	15.2	－	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	脚部破片
55－ 1	B5Gr SD12	弥生土器甕	30.4	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	不良	
－ 2	A4Gr SD12	弥生土器壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－ 3	A4Gr SD12	弥生土器壺	24.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文	淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
55－ 4	A4Gr SD12	弥生土器 壺	－	－	－	外／3条以上の三角形貼付文帯に刻目文、上方は縦方向ハケ 内／横方向ミガキ、上方はハケ	橙褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	内面上方に刺突文あり
－ 5	A4Gr SD12	弥生土器 甕	31.6	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部下　外／縦方向ハケ 内／縦方向ハケ	淡橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面胴部にスス付着
－ 6	B5Gr SD12	弥生土器 甕	13.3	－	－	口縁部　外／ナデ 内／横方向ハケ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－ 7	B5Gr SD12	弥生土器 甕	25.9	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－ 8	B5Gr SD12	弥生土器 甕	17.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下不明	外／褐色 内／淡褐色 断／淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－ 9	A4Gr SD12	弥生土器 壺or甕	－	7.0	－	外／風化著しく不明 内／底部付近に指頭圧痕残る	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－10	A4Gr SD12（上層）	弥生土器 壺or甕	－	9.1	－	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ミガキ	黒褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－11	A4Gr SD12（上層）	弥生土器 高坏	26.4	－	－	口縁端部水平に突出する 外／ナデ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	
－12	B5Gr SD12	弥生土器 高坏	－	－	－	外／縦方向ミガキ 内／不明	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－13	B5Gr SD12	弥生土器 高坏	－	10.6	－	外／ナデ 内／ハケ	外／褐色 内／橙褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
56－ 1	A5Gr 包含層	弥生土器 壺	22.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に波状文 口縁内面に波状文・刺突列点文	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁端部下垂する
－ 2	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	19.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文 口縁内面に斜格子文・波状文	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－ 3	B4Gr 包含層	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜線文 口縁内面に2以上の円形浮文・斜格子文	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－ 4	A8Gr 包含層	弥生土器 壺	19.0	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文 口縁内面に波状文・直線文	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－ 5	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	27.4	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 口縁内面に斜格子文	橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部下垂する

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
56－ 6	B6Gr 包含層	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部下垂する
－ 7	B6Gr 包含層	弥生土器 壺	28.8	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	赤褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部下垂する
－ 8	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 口縁内面から2以上の穿孔あり	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－ 9	表採	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－10	西側溝	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
－11	A3Gr 包含層	弥生土器 壺	－	－	－	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	口縁端部上下に拡張する
－12	A3Gr 包含層	弥生土器 壺	23.2	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部　外／縦方向ハケ 内／横方向ミガキ	外／黄褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部下垂する外面頸部に2以上の三角形文帯を貼付け、刻目文
－13	B6Gr 包含層	弥生土器 壺	18.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／横・縦方向ミガキ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－14	B4Gr 包含層	弥生土器 壺	25.6	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部　外／ハケ 内／ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
－15	B5Gr 包含層	弥生土器 壺	19.8	－	－	口縁部内外面ナデ	橙褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－16	A4Gr 包含層	弥生土器 壺	18.2	－	－	口縁部内外面ナデ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－17	A7Gr 包含層	弥生土器 壺	9.9	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部　外／縦方向ハケ 内／縦方向ハケ	褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁部内外面にスス付着
－18	B5Gr 包含層	弥生土器 甕	28.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／斜め方向ハケ	褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－19	A7Gr 包含層	弥生土器 甕	14.4	－	－	口縁部内外面ナデ、内面一部ハケ 頸部下　外／ナデ 内／斜め方向ハケ	外／暗褐色 内／褐色 断／灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－20	A1Gr 包含層	弥生土器 甕	22.1	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	灰褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部上方に拡張する

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
57－21	B5Gr 包含層	弥生土器 甕	21.6	－	－	口縁部内外面ナデ、内面一部ハケ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－22	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	24.1	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／縦・斜め方向ハケ	黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部上方に拡張する
－23	A4Gr 包含層	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 外面頸部付近に指頭圧痕残る	淡黄褐色	粗い 石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	
－24	西側溝	弥生土器 甕	13.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／橙褐色 断／灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－25	B5Gr 包含層	弥生土器 甕	18.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	密 石英を含む	普通	
－26	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	27.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／斜め方向の粗いハケ	淡褐色	粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－27	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	16.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面口縁部にスス付着
－28	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	25.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／淡褐色 内／黄褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面口縁部にスス付着 口縁端部上方に拡張する
－29	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	19.5	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／斜め方向ハケ 内／ナデ	外／黒色 内／灰褐色 断／灰褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	外面口縁部にスス付着 口縁端部上方に拡張する
－30	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	21.4	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	外／褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部上方に拡張する
－31	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／淡褐色 断／褐色	密 石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
58－32	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	19.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部上方に拡張する
－33	B4Gr 包含層	弥生土器 甕	11.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／暗褐色 断／淡褐色	普通 1㎜以上の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
－34	A3Gr 包含層	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ハケ、下方はケズリ	黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－35	A1Gr 包含層	弥生土器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／風化著しく不明	淡褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
58－36	A6Gr 包含層	弥生土器 甕	15.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦・横方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／淡褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部に凹線文が入る
－37	B3Gr 包含層	弥生土器 甕or鉢	－	－	－	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文 頸部下　外／ナデ 内／ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	外面スス付着 外面頸部下に三角形文帯を貼付け、刻目文
－38	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	7.0	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
－39	B4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.8	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に指頭圧痕残る	外／黒褐色 内／褐色 断／褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－40	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	7.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／淡橙褐色 内／橙褐色 断／淡橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－41	A6Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	6.4	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
－42	B5Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	6.6	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／橙褐色 内／灰褐色 断／褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－43	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.2	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－44	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	6.9	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	内面スス付着
－45	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	7.6	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／ナデ	外／淡褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－46	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	7.7	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－47	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	－	－	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／橙褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－48	B7Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.2	－	外／縦方向ミガキ、一部ハケ 内／ナデ	褐色	密 1～2㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－49	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	7.7	－	外／縦方向ミガキ 内／ハケ	外／橙褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－50	B3Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／縦方向ハケ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
58－51	B5Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.8	－	外／縦方向ミガキ 内／ハケ	褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
－52	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	10.7	－	外／縦方向ミガキ 内／ハケ	外／褐色 内／橙褐色 断／橙褐色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－53	B7Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.6	－	外／横方向ミガキ、底部付近ハケ 内／横方向ミガキ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／黒灰色 断／褐色	密 石英を含む	良好	外面スス付着
－54	A3Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	5.2	－	外／縦・横方向ミガキ 内／横方向ミガキ	灰褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む	良好	外面底部ミガキ
59－55	A3Gr 包含層	弥生土器 壺or甕	－	3.3	－	外／ナデ 内／指頭圧痕残る 底／板目？	褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
－56	表採	弥生土器 鉢or無頸壺	－	－	－	外／口縁下に１条の三角形文帯を貼付け、刻目文、胴部ナデ 内／斜め方向ミガキ	淡褐色	密 石英を含む	良好	外面スス付着
－57	A3Gr 包含層	弥生土器 鉢	－	－	－	外／縦方向ハケ 内／ナデ	暗褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	内外面にスス付着
－58	A1Gr 包含層	弥生土器 高坏	－	9.0	－	外／ナデ 内／ナデ	褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－59	A2Gr 包含層	古式土師器 甕	17.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／横方向ハケ 内／ケズリ	外／淡黄褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部平坦に作る
－60	A1Gr 包含層	古式土師器 甕	14.2	－	－	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
－61	A1Gr 包含層	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁部内外面にスス付着
－62	B4Gr 包含層	古式土師器 甕	14.7	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
－63	A3Gr 包含層	古式土師器 甕	15.5	－	－	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡黄褐色 断／灰褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
－64	A3Gr 包含層	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
－65	A3Gr 包含層	古式土師器 甕	17.3	－	－	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
59－66	A3Gr 包含層	古式土師器 甕	－	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
－67	表採	古式土師器 器台	－	－	－	外／ナデ 内／受部ミガキ、脚部ケズリ	外／淡橙褐色 内／橙褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
－68	A3Gr 包含層	古式土師器 器台	－	20.2	－	外／ナデ 内／ケズリ	橙褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	脚部破片
－69	A3Gr 包含層	古式土師器 器台	16.5	－	－	外／ナデ 内／横方向ミガキ	橙褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	受部破片
－70	A5Gr 包含層	土師器 甕	21.6	－	－	口縁部　外／ナデ 内／ハケ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ケズリ	外／淡橙褐色 内／褐色 断／淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	不良	
－71	A1Gr 包含層	須恵器 坏身	14.0	－	－	外／回転ナデ、下部ケズリ 内／回転ナデ	外／灰色 内／暗灰色 断／灰色	普通	良好	外面に自然釉かかる
－72	A1Gr 包含層	須恵器 坏身	14.3	－	－	内外面回転ナデ	暗灰色	密 雲母を含む	良好	外面に自然釉かかる
－73	A1Gr 包含層	須恵器 坏蓋	16.2	－	－	内外面回転ナデ	外／灰色 内／暗灰色 断／暗灰色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	普通	内外面に自然釉かかる
－74	B4Gr 包含層	須恵器 坏蓋	12.0	－	－	内外面回転ナデ	灰色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	口縁端部に沈線入る
－75	B5Gr 包含層	須恵器 坏蓋	11.2	－	－	内外面回転ナデ	黒灰色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英を含む	良好	外面口縁端部に自然釉かかる
60－76	A6Gr 包含層	須恵器 坏	11.8	7.6	4.1	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡灰色	密 石英を含む	普通	
－77	A1Gr 包含層	須恵器 坏	－	8.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	普通 石英を含む	やや不良	
－78	A4Gr 包含層	須恵器 高台付坏	－	9.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	普通 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	普通	
－79	B2Gr 包含層	須恵器 坏	11.0	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	密 石英を含む	良好	
－80	B5Gr 包含層	須恵器 高台付坏	－	9.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	密 1㎜大の白色砂粒・石英を含む	やや不良	

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
60－81	A1Gr 包含層	土師器 坏	13.3	5.8	5.25	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	内外面にスス付着 回転水引き痕明瞭に残る
－82	A1Gr 包含層	土師器 坏	－	6.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ハケ・ナデ	外／橙褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
－83	A1Gr 包含層	土師器 坏	－	5.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	暗褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	2度の糸切り痕あり
－84	B2Gr 包含層	土師器 坏	－	4.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	赤褐色	密 石英・雲母を含む	不良	
－85	A1Gr 包含層	土師器 坏	－	6.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
－86	A1Gr 包含層	土師器 坏	－	5.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	外／橙褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面朱塗り 外面一部にスス付着
－87	A3Gr 包含層	土師器 小皿	9.6	5.4	2.1	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	橙色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－88	A2Gr P4	土師器 小皿	9.2	4.9	1.95	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／橙色 内／褐色 断／橙褐色	普通 1～3㎜大の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	内面一部にスス付着
－89	B4Gr 包含層	土師器 小皿	7.8	4.1	1.15	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	外／橙褐色 内／淡黄橙色 断／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
－90	A1Gr 包含層	土師器 足高高台付坏	－	8.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	坏部内面黒褐色
－91	A1Gr 包含層	土師器 高坏	13.2	－	－	外／ナデ、下半部ケズリ 内／ナデ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内外面朱塗り
－92	B2Gr 包含層	土師器 高坏	13.2	－	－	外／ナデ、一部ハケ 内／ナデ	淡橙褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	内外面朱塗り 内面に暗文が入る
－93	B2Gr 包含層	土師器 高坏	13.6	－	－	外／ナデ、下半部ケズリ 内／ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	内外面朱塗り 内面に暗文が入る

出土遺物観察表（鉄器・石器）

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考
17－1	B4Gr SK04	鉄鏃	上端欠損	鉄	9.35	2.4	－	42	錆化
－2	B4Gr SK04 (中層～下層)	鉄鏃	上端欠損	鉄	6.9	2.5	－	21	錆化
－3	B4Gr SK04	不明	完形	鉄	7.25	3.4	－	121	錆化
19－8	A4Gr SK05	鉄鏃	完形	鉄	6.3	3.1	－	27	錆化
23－41	A3Gr SK06	不明	両端欠損	鉄	5.7	1.9	－	11	錆化
－42	A3Gr SK06	砥石	片端欠損	安山岩（細粒）	11.3	6.9	3.5	308	二面に使用痕あり
34－38	土器群1 (SD03)	砥石	両端欠損	流紋岩質凝灰岩	5.8	3.7	2.5	47	全面に使用痕あり
－39	A1Gr SD03	砥石	両端欠損	流紋岩質凝灰岩	6.0	3.0	2.5	55	全面に使用痕あり
41－46	A1Gr SD04	不明	片端欠損	流紋岩（中粒）	7.2	10.0	1.35	161	側面を面取りしている 片端に刃部のようなもの削り出す
－47	A2Gr SD04	不明	一部欠損	玄武岩（中粒）	7.8	5.85	3.5	302	朱の痕跡あり
60－94	A2Gr 包含層	砥石	ほぼ完形	安山岩	15.8	4.0	3.3	420	三面に使用痕あり
－95	A1Gr 包含層	砥石？	両端欠損	硅質頁岩	7.2	7.6	2.4	220	二面に使用痕あり
－96	A3Gr 包含層	扁平片刃石斧	刃部欠損	安山岩	5.3	2.2	1.0	18	全面を磨いている